

# 立花寺 B 遺跡

— 福岡都市高速道路 2 号線建設に伴う  
埋蔵文化財調査報告 —

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第523集

1 9 9 7

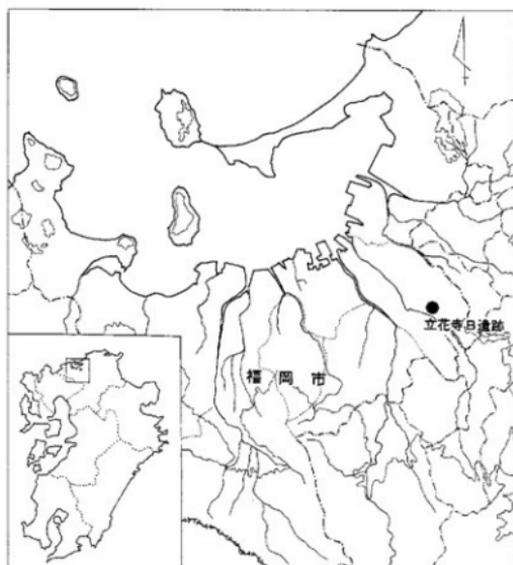
福岡市教育委員会

RYUGEJI

# 立花寺 B 遺跡

— 福岡都市高速道路 2 号線建設に伴う  
埋蔵文化財調査報告 —

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第523集



調査番号 9429-9511-9621  
調査略号 R G B-1・2・3

平成 9 年

福岡市教育委員会



## 序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。いまさら申し上げるまでもなく、本市は九州の中核都市として発展しつつあり、既存の道路整備を中心とした社会基盤整備とは別に、高規格化の道路整備を図る必要があります。このため、都心部の主要部と九州縦貫道路とが直結する福岡都市高速道路の充実化を図っているところです。

今回報告いたしますのは、この福岡都市高速道路2号線建設工事に先だつて実施したもので、本市南東部に位置し、古代から中世の複合遺跡である立花寺B遺跡を平成6年～8年に実施しました発掘調査記録です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた福岡北九州高速道路公社をはじめ、御指導と御援助をいただいた関係各位にたいし、深く感謝いたします。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 町田英俊

## 凡 例

1. 本書は、福岡市教育委員会が博多区上月隈・立花寺地内の都市高速2号線建設地内において、1994年(平成6年)～1996年(平成8年)に実施した立花寺B遺跡第1～3次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書における各調査の細目は下記のとおりである。
3. 遺構実測図に付した座標値は平面直角座標系第II座標系による座標値である。方位は磁北で、真北に対し6'18"西偏する。
4. 遺構図には、遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前に、SB(建物)、SD(溝)、SE(井戸)、SK(土坑)、SX(その他)などの分類記号を付した。
5. 本書に掲載した遺構、遺物の図面作成は第1次調査を田中寛子・吉武学、第2・3次調査を中村智子・澁本正志が行ない、裂図は第1次調査を田中・大神真理子、第2・3次調査を澁本・中村・田上勇一郎・木田清二郎・山口とし子・岩瀬宏子・牟田由佳が行なった。
6. 本書に掲載した写真は、第1次調査を吉武学、第2・3次調査を澁本正志の撮影による。
7. 本書の執筆は下記のとおりである。  
 III-2, ..... 吉武 学  
 I-1・2, II-1, III-1・3, IV ... 澁本正志
8. 出土した馬骨については鹿児島大学の西中川駿先生、人骨については九州大学院の中橋孝博先生、土壌については株式会社古環境研究所に分析をそれぞれ依頼し、分析結果についてはVに収録した。
9. 本書の編集は澁本正志が担当した。
10. 発掘調査の遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	調査面積	調査期間
第1次	9429	RGB-1	博多区上月隈	432㎡	1994.7.1～94.8.31
第2次	9511	RGB-2	博多区上月隈・立花寺	5,300㎡	1995.5.22～96.3.15
第3次	9621	RGB-3	博多区上月隈	40㎡	1996.7.22

## 本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	2
II 遺跡の環境と概要	4
1. 遺跡の位置と環境	4
III 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 第1次調査の記録	9
3. 第2・3次調査の記録	21
IV 小 結	74
V 付 編	75
1. 立花寺B遺跡(第2次調査)出土の馬骨	75
2. 立花寺B遺跡第2次調査出土の中世人骨	78
3. 立花寺B遺跡第2次調査における植物遺体分析	80

## ・立花寺日遺跡調査報告

Figures	挿 図 目 次
Fig. 1 調査地区位置図(1/200,000).....	1
Fig. 2 調査地周辺航空写真(昭和25年頃).....	4
Fig. 3 周辺道路分布図(1/75,000).....	5
Fig. 4 第2次調査(176-L)風景.....	6
Fig. 5 調査区位置図(1/6,000).....	7

## ・立花寺日遺跡第1次調査報告

Figures	挿 図 目 次
Fig. 1 第1次調査地区位置図(1/2,000).....	9
Fig. 2 1区全体図(1/100).....	10
Fig. 3 2区全体図(1/100).....	11
Fig. 4 3区全体図(1/100).....	12
Fig. 5 3区土層柱状図(1/20).....	12
Fig. 6 S B18・19実測図(1/80).....	13
Fig. 7 S B18・19出土遺物実測図(1/3).....	13
Fig. 8 溝状遺構断面図(1/40).....	14
Fig. 9 溝状遺構出土遺物実測図I(1/3).....	15
Fig. 10 溝状遺構出土遺物実測図II(1/3).....	16
Fig. 11 土坑実測図(1/40).....	18
Fig. 12 土坑出土遺物実測図(1/3).....	19

## PLATES

## 図 版 目 次

P.L. 1 (1) 第1次調査地区全景(南から)	P.L. 3 (5) S K08(南から)
(2) 1区全景(北から)	(6) S K11(西から)
P.L. 2 (1) 2区全景(南から)	(7) S K12・13(北から)
(2) 3区全景(南から)	(8) S K15(北から)
P.L. 3 (1) S B18・19(西から)	P.L. 4 (1) S K16(北から)
(2) S D07(北から)	(2) 1区北端の水田足跡
(3) S D09(北から)	(3) 第1次調査出土遺物
(4) S D10(南から)	

## ・立花寺日遺跡第2・3次調査報告

Figures	挿 図 目 次
Fig. 1 第2・3次調査区位置図(1/3,000).....	21
Fig. 2 175-L区溝出土遺物(1/3).....	29
Fig. 3 175-L区遺構検出面・包含層出土遺物(1/3).....	29
Fig. 4 176-R区出土遺物(1/3).....	29
Fig. 5 176-L区出土遺物(1/3).....	29
Fig. 6 177-R区出土線輪陶器(1/3).....	29
Fig. 7 177-R区出土越州窯系青磁(1/3).....	29
Fig. 8 177-L区S K131出土遺物(1/3).....	30
Fig. 9 177-L区S K134出土遺物(1/3).....	30
Fig. 10 177-L区S D137出土遺物(1/3).....	30
Fig. 11 177-L区遺構検出面出土遺物(1/3).....	30
Fig. 12 A1-R区S K157出土遺物(1/3).....	30
Fig. 13 A1-R区S K158出土遺物(1/4*).....	30
Fig. 14 A1-R区包含層出土遺物(1/3).....	30
Fig. 15 A1-L区S D154出土遺物(1/3).....	31
Fig. 16 A1-L区S D154出土線輪陶器(1/3).....	31
Fig. 17 A1-L区S D156出土越州窯系青磁(1/3).....	31
Fig. 18 A1-L区S K155出土遺物(1/3).....	31
Fig. 19 A1-L区S K155出土越州窯系青磁(1/3).....	31
Fig. 20 A1-L区S K155出土線輪陶器(1/3).....	31
Fig. 21 A1-L区包含層出土線輪陶器(1/3).....	31
Fig. 22 A1-L区包含層出土遺物(1/3・1/4*).....	32
Fig. 23 A-I区S D197出土遺物(1/3).....	35
Fig. 24 A-I区S D218出土遺物(1/3).....	35
Fig. 25 A-I区S D246出土遺物(1/3).....	35
Fig. 26 A-I区S D247出土遺物(1/3).....	35
Fig. 27 A-I区S D333出土遺物(1/3).....	35
Fig. 28 A-II区S D434出土遺物(1/3).....	35
Fig. 29 A-II区S E341出土遺物(1/3).....	36
Fig. 30 A-II区S E352出土遺物(1/3).....	36
Fig. 31 A-II区S E512出土遺物(1/3).....	36
Fig. 32 A-II区S E512出土越州窯系青磁(1/3).....	36
Fig. 33 A-II区S E512出土白磁(1/3).....	36
Fig. 34 A-I区S K169・171・172・174・179出土遺物(1/3).....	39
Fig. 35 A-I区S K180出土遺物(1/3).....	39
Fig. 36 A-I区S K187出土遺物(1/3).....	39
Fig. 37 A-I区S K188出土遺物(1/3).....	39
Fig. 38 A-I区S K245出土遺物(1/3).....	39
Fig. 39 A-I区S K250出土遺物(1/3).....	39
Fig. 40 A-I区S K260出土遺物(1/3).....	39
Fig. 41 A-I区S K263出土遺物(1/3・1/4*).....	39
Fig. 42 A-I区S K305出土遺物(1/3).....	40
Fig. 43 A-I区S K306出土遺物(1/3・1/4*).....	40
Fig. 44 A-I区S K307出土遺物(1/3・1/4*).....	40
Fig. 45 A-I区S K308出土遺物(1/3・1/4*).....	40
Fig. 46 A-I区S K310出土遺物(1/3・1/4*).....	40
Fig. 47 A-I区S K315出土遺物(1/3).....	41
Fig. 48 A-I区S K317出土遺物(1/3).....	41
Fig. 49 A-I区S K321出土遺物(1/3).....	42
Fig. 50 A-I区S K325出土遺物(1/3).....	42
Fig. 51 A-I区S K328出土遺物(1/3).....	42
Fig. 52 A-II区S K346出土遺物(1/3).....	43
Fig. 53 A-II区S K346出土遺物(1/3).....	44
Fig. 54 A-II区S K346出土遺物(1/3).....	45
Fig. 55 A-II区S K347出土遺物(1/3).....	47
Fig. 56 A-II区S K347出土遺物(1/3).....	48
Fig. 57 A-II区S K350出土遺物(1/3).....	49
Fig. 58 A-II区S K353出土遺物(1/3).....	49
Fig. 59 A-II区S K354出土遺物(1/3・1/4*).....	49
Fig. 60 A-I区S K355出土遺物(1/3).....	49
Fig. 61 A-I区S K360出土遺物(1/3・1/4*).....	50
Fig. 62 A-I区S K421出土遺物(1/3).....	51
Fig. 63 A-II区S K511出土遺物(1/3).....	51
Fig. 64 A-II区S K528出土遺物(1/3).....	51
Fig. 65 A-II区S K537出土遺物(1/3).....	51
Fig. 66 A-II区S K537出土遺物(1/3・1/4*).....	52
Fig. 67 A-I区S X356出土遺物(1/3).....	52
Fig. 68 A区包含層・遺構検出面出土遺物(1/3・1/4*).....	53
Fig. 69 A区包含層・遺構検出面出土越州窯系青磁(1/3).....	55
Fig. 70 B区S D879出土遺物(1/3・1/4*).....	56

Fig. 71	B区 S D919出土遺物(1/3)	57
Fig. 72	B-C区 S D1139出土遺物(1/3)	58
Fig. 73	B-C区 S D1139出土遺物(1/3-1/4*)	59
Fig. 74	B区 S E752出土遺物(1/3)	61
Fig. 75	B区 S E811出土遺物(1/3)	61
Fig. 76	B区 S E1119出土遺物(1/3)	61
Fig. 77	B区 S E1260出土遺物(1/3)	61
Fig. 78	B区 S E1277出土遺物(1/3)	61
Fig. 79	C区 S E1300出土遺物(1/3)	62
Fig. 80	C区 S F1302出土遺物(1/3-1/4*)	62
Fig. 81	B区 S E1307出土遺物(1/3-1/4*)	62
Fig. 82	B区 S K624出土遺物(1/3)	65
Fig. 83	B区 S K713出土遺物(1/3-1/4*)	65
Fig. 84	B区 S K764出土遺物(1/3)	65
Fig. 85	B区 S K766出土遺物(1/3)	65
Fig. 86	B区 S K773出土遺物(1/3)	65
Fig. 87	B区 S K805出土遺物(1/4*)	65
Fig. 88	B区 S K808出土遺物(1/3)	66
Fig. 89	B区 S K809出土遺物(1/3)	66
Fig. 90	B区 S K921出土遺物(1/3-1/4*)	66
Fig. 91	B区 S K986出土遺物(1/3-1/8*)	66
Fig. 92	B区 S K1021出土遺物(1/3)	67
Fig. 93	B区 S K1075出土遺物(1/3-1/4*)	67

## PLANS

PLAN. 1	175-R-L, 176-R-L調査区遺構配置図(1/250)
PLAN. 2	177-R-L, A1-R-L調査区遺構配置図(1/250)
PLAN. 3	A-I調査区遺構配置図(1/250)
PLAN. 4	A-II調査区遺構配置図(1/250)
PLAN. 5	B調査区遺構配置図(1/250)
PLAN. 6	B調査区南半部, C調査区構配置図(1/250)
PLAN. 7	S B1195実測図(1/40)
PLAN. 8	S E50実測図(1/30)
PLAN. 9	S E341実測図(1/30)
PLAN. 10	S E352, S E512, S E516実測図(1/30-1/40)

## PLATES

P L. 1	(1) 調査地周辺航空写真
P L. 2	(1) 調査地全景(北西から)
	(2) 175-R調査区全景(南西から)
	(3) 175-L調査区全景(南西から)
P L. 3	(1) 176-R調査区全景(北東から)
	(2) 176-L調査区全景(南西から)
	(3) A1-R調査区全景(北東から)
	(4) A1-L調査区第1面全景(南西から)
	(5) A1-L調査区第2面北半部(南西から)
P L. 4	(1) A-I調査区全景(南東から)
	(2) A-I調査区北半部(北東から)
	(3) A-I調査区南半部(北東から)
P L. 5	(1) A-II調査区全景(南東から)
	(2) A-II調査区南半部(北東から)
P L. 6	(1) B調査区全景(北西から)
P L. 7	(1) B調査区南半部(南東から)
	(2) C調査区全景(南西から)
P L. 8	(1) S B1195(南東から)
	(2) S B1195(南東から)
	(3) S B1195柱穴礎石(北東から)
P L. 9	(1) S E50(北西から)
	(2) S E50(北西から)
	(3) S E50(北西から)
	(4) S E50(北西から)
	(5) S E153(南西から)
	(6) S E153(北西から)

## 図 面 目 次

Fig. 94	B区 S K1134出土遺物(1/3)	67
Fig. 95	B区 S P1035出土遺物(1/4*)	67
Fig. 96	B区 S X920出土遺物(1/3-1/4*)	67
Fig. 97	B区 S P1122出土遺物(1/4*)	67
Fig. 98	B区遺構検出面出土遺物(1/3-1/4*)	67
Fig. 99	C区 S K1295出土遺物(1/3)	68
Fig. 100	C区 S K1303出土遺物(1/3)	68
Fig. 101	C区 S K1306出土遺物(1/3)	68
Fig. 102	C区 S K1308出土遺物(1/3)	68
Fig. 103	C区 S K1342出土遺物(1/3)	68
Fig. 104	C区 S K1345出土遺物(1/3)	68
Fig. 105	C区 S K1347出土遺物(1/3)	68
Fig. 106	176-R区 S E50出土遺物(1/5)	70
Fig. 107	A1-L区 S E153出土遺物(1/5)	70
Fig. 108	A-II区 S E341出土遺物(1/5)	71
Fig. 109	A-I区 S E352出土遺物(1/5)	71
Fig. 110	B区 S E752出土遺物(1/5)	71
Fig. 111	S E153-S K346-S K347出土遺物(1/4)	72
Fig. 112	B区 S K350出土遺物(1/4)	73
Fig. 113	175-R区出土遺物(1/1)	73
Fig. 114	B区 S K624出土遺物(1/1)	73
Fig. 115	B区遺構検出面出土遺物(1/1)	73

## 図 版 目 次

P L. 10	(1) S E341(南東から)
	(2) S E341(南東から)
	(3) S E341(南東から)
	(4) S E341(南東から)
	(5) S E341(南東から)
P L. 11	(1) S E352(南東から)
	(2) S E352(南東から)
	(3) S E512(南東から)
	(4) S E312(北東から)
	(5) S E512(北東から)
	(6) S E312(南東から)
	(7) S E316(北東から)
	(8) S E316(北東から)
P L. 12	(1) S E752(北東から)
	(2) S E752(東から)
	(3) S E811(北東から)
	(4) S E811(北東から)
	(5) S E811, 813, 1227, 1232(北東から)
P L. 13	(1) S E872(南東から)
	(2) S E872(南東から)
	(3) S E1119(南東から)
	(4) S E1119(南東から)
	(5) S E1119(南東から)
	(6) S E1119(南西から)
	(7) S E1119(南東から)

P L . 14	(1) S E 1225(北東から)	P L . 18	(4) S K 355(南西から)
	(2) S E 1225(北東から)		(5) S K 360(南西から)
	(3) S E 1300(南西から)		(6) S K 360(南から)
	(4) S E 1300(南西から)		(7) S K 528(北東から)
	(5) S E 1302(北東から)		(8) S K 528(南東から)
	(6) S E 1302(北東から)	P L . 19	(1) S K 421(南東から)
	(7) S E 1302(東から)		(2) S K 421(南東から)
P L . 15	(1) S E 1307(南東から)		(3) S K 421(南東から)
	(2) S E 1307(南西から)	P L . 20	(1) S K 769(北西から)
	(3) S E 1356(南東から)	P L . 21	(1) S K 1295(南西から)
	(4) S E 1356(南東から)		(2) S K 1295(南西から)
	(5) S E 1356(東から)	P L . 22	(1) S K 1295(南西から)
	(6) S E 1356(南東から)	P L . 23	(1) S K 1345(南から)
P L . 16	(1) S K 187(南東から)		(2) S K 1345(西から)
	(2) S K 188(北東から)	P L . 24	(1) 第2次調査出土遺物 1
	(3) S K 245(南東から)	P L . 25	(1) 第2次調査出土遺物 2
	(4) S K 250(南東から)	P L . 26	(1) 第2次調査出土遺物 3
	(5) S K 263(南東から)	P L . 27	(1) 第2次調査出土遺物 4
	(6) S K 305, 306, 310, 312(北から)	P L . 28	(1) 第2次調査出土遺物 5
	(7) S K 317遺物出土状況(南西から)	P L . 29	(1) 第2次調査出土遺物 6
	(8) S K 317(南西から)	P L . 30	(1) 第2次調査出土遺物 7
P L . 17	(1) S K 344(南東から)	P L . 31	(1) 第2次調査出土遺物 8
	(2) S K 346遺物出土状況(南西から)	P L . 32	(1) 第2次調査出土遺物 9
	(3) S K 346遺物出土状況(南東から)	P L . 33	(1) 第2次調査出土遺物 10
	(4) S K 347上層遺物出土状況(南東から)	P L . 34	(1) 第2次調査出土遺物 11
	(5) S K 347(南東から)	P L . 35	(1) 第2次調査出土遺物 12
	(6) S K 347(北東から)	P L . 36	(1) 第2次調査出土遺物 13
	(7) S K 347下層遺物出土状況(南東から)	P L . 37	(1) 第2次調査出土遺物 14
	(8) S K 347下層遺物出土状況(南西から)	P L . 38	(1) 第2次調査出土遺物 15
P L . 18	(1) S K 350(北西から)	P L . 39	(1) 第2次調査出土遺物 16
	(2) S K 350(南東から)	P L . 40	(1) 第2次調査出土遺物 17
	(3) S K 353(北東から)	P L . 41	(1) 第2次調査出土遺物 18

### ・立花寺B遺跡(第2次調査)出土の馬骨

Figures	挿 図 目 次
Fig. 1 遺跡位置図(1/300,000)	75
	Fig. 2 調査地位置図(1/30,000)
	75
PLATES	図 版 目 次
P L . 1 (1) 馬遺体の出土状況	P L . 2 (4) 1号馬の左中手骨(左)と左脛骨
P L . 2 (1) 馬遺体の出土状況	(5) 2号馬の左蹠骨(左)と仙骨
(2) 1号馬の右下頷骨	(6) 2号馬の左大腿骨
(3) 1号馬の左側上顎、下顎骨	

### ・立花寺B遺跡第2次調査における植物遺体分析

	挿 図 目 次
図 1 立花寺B遺跡第2次調査における花粉ダイアグラム(1)...	85
図 2 立花寺B遺跡第2次調査における花粉ダイアグラム(2)...	86
図 3 立花寺B遺跡第2次調査における種実ダイアグラム(1)...	92
図 4 立花寺B遺跡第2次調査における種実ダイアグラム(2)...	92

#### 表 目 次

表 1 資料一覧	80
表 2 立花寺B遺跡第2次調査における花粉分析結果(1)	83
表 3 立花寺B遺跡第2次調査における花粉分析結果(2)	84
表 4 立花寺B遺跡第2次調査における種実同定結果(1)	89
表 5 立花寺B遺跡第2次調査における種実同定結果(2)	90
表 6 立花寺B遺跡第2次調査における種実同定結果(3)	91
表 7 立花寺B遺跡第2次調査におけるイネ果実(炭化米)の計測値	93

PLATES	図 版 目 次
P L . 1 (1) 立花寺B遺跡第2次調査出土の花粉・胎子・寄生虫卵遺体	
P L . 2 (1) 立花寺B遺跡第2次調査出土の種実 I	
P L . 3 (1) 立花寺B遺跡第2次調査出土の種実 II	

# I はじめに

## 1. 発掘調査に至る経過

1991年(平成3年)9月30日付文書(福北福工第108号)で、福岡北九州高速道路公社から埋蔵文化財課へ、福岡市博多区上月隈～金隈(福岡南バイパス道路内)における福岡都市高速道路2号線建設事業計画が提出された。当該地域は、既に福岡南バイパス道路として供用され、埋蔵文化財包蔵地域外であったが、道路建設前に埋蔵文化財の試掘調査などは実施されていなかった。このように埋蔵文化財包蔵地域としての調査が既存施設の為に実施できなかった地域のひとつとして、本調査地に近接する福岡空港が揚げられる。福岡空港では、空港整備工事に先だつ試掘調査で埋蔵文化財の存在が初めて確認され、これまで埋蔵文化財の空白地域を埋められた。このため、当該地域においても同様に空白地域を確認する必要性から、埋蔵文化財課では当該地域において埋蔵文化財試掘調査が必要である旨の回答を1991年(平成3年)10月22日付文書(福市教埋第477号)で行なった。

その後、当該地域において進展が見られなかったところ、1992年(平成4年)5月29日付文書(福北福工第108号)で、建設省福岡国道事務所から埋蔵文化財課へ、先述した地域と重複する福岡市博多区半道橋～金隈(福岡南バイパス道路内)における福岡共同溝建設工事に先だつての埋蔵文化財試掘調査の願いが出された。このため、埋蔵文化財課では、1992年9月21日～10月21日に、当該地域において32箇所の試掘溝を設定し、バックホーを用いた試掘調査を行なった。その結果、新たに古代から中世に比定される3箇所の埋蔵文化財包蔵地域が発見され、当該地域の大半に広がる埋蔵文化財包蔵地域を立花寺B遺跡と命名した。この試掘調査成果をもとに福岡北九州高速道路公社と協議を行い、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は工事計画との関係から3ケ年に別け、第1次調査を1994年7月4日～同年8月31日、第2次調査を1995年5月22日～1996年3月15日、第3次調査を1996年7月22日に行ない、出土遺物の整理、報告書の刊行は1996年4月～1997年3月に行なった。

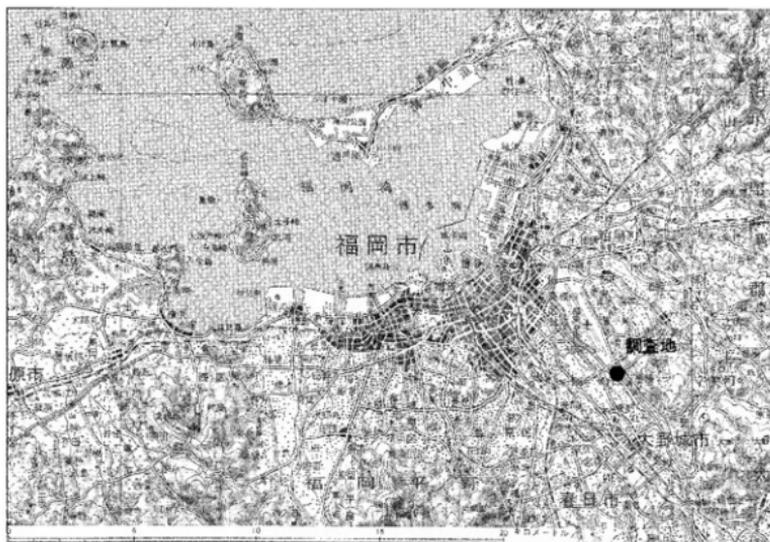


Fig. 1 調査地位図(1/200,000)

## 2. 発掘調査の組織

## (1) 第1次調査(平成6年度)

調査委託	福岡北九州高速道路公社		
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課		
	教 育 長	尾 花 剛	
	文化財部長	後 藤 直	
	埋蔵文化財課長	折 尾 学	
	同課第2係長	山 崎 純 男	
調査担当	文化財主事	吉 武 学	
事務担当		入 江 幸 男	
(試掘調査)	主任文化財主事	井 澤 洋 一	
( " )	文化財主事	吉 武 学	
(事前協議)	主任文化財主事	浜 石 哲 也	
( " )	文化財主事	長 屋 伸	
整理調査員	田 中 克 子		
資料整理	安部国恵 有島美江 大神真理子 太田富美子 富田輝子		
調査協力	石屋四一 金沢春雄 金子國雄 熊本義徳 渋谷博之 高崎秀巳		
	高田勤四郎 高田勲 西田昭 二宮白人 萩尾行雄 藤田圭三		
	松原高博 森垣隆視 森本勇夫 米倉國弘 金子澄子 唐島栄子		
	酒井康恵 正林真由美 杉村百合子		

## (2) 第2次調査(平成7年度)

調査委託	福岡北九州高速道路公社		
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課		
	教 育 長	尾 花 剛	
	文化財部長	後 藤 直	
	埋蔵文化財課長	荒 巻 輝 勝	
	同課第2係長	山 口 謙 治	
調査担当	文化財主事	瀧 本 正 志	
事務担当		入 江 幸 男	
(試掘調査)	主任文化財主事	井 澤 洋 一	
( " )	文化財主事	吉 武 学	
(事前協議)	主任文化財主事	浜 石 哲 也	
( " )	文化財主事	榎 本 義 嗣	
資料整理	岩瀬宏子 平崎スズ子 三島和美 南里幸子 山口とし子		

調査協力 家村富基郎 石屋四一 池田福美 井手知行 伊藤憲良 乾雄一郎 梅木繁良  
 梅崎元 榎田信一 逢坂洋史 大橋善平 大村芳雄 甲斐康完 梶原政信  
 亀井薫 川井田明 川井田ムツ子 河野一一 日下部義昭 高着一夫  
 酒井次憲 沢田須美子 島津明男 白水えつ子 杉野友香 須田雅樹  
 瀬戸啓治 世利陽子 谷本晃 田原謙志 堤篤史 東郷春子 戸上拓之  
 豊丸秀人 中尾征司 中川祥一 中川敏男 中村智子 西川譲 西小路由美子  
 原公子 日永田千穂 平石好克 平川由香里 福田美星 別府俊美 前山正義  
 松尾文江 松永正義 松山貞紀子 三浦力 右寺栄次 溝口誠司 村岡敏和  
 横溝昌幸 吉田博昭 渡辺淑子

## (3) 第3次調査(平成8年度)

調査委託 福岡北九州高速道路公社  
 調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課  
 教 育 長 町 田 英 俊  
 文化財部長 後 藤 直  
 埋蔵文化財課長 荒 巻 輝 勝  
 同課第2係長 山 口 譲 治  
 調査担当 文化財主事 瀧 本 正 志  
 事務担当 小 森 彰  
 (試掘調査) 主任文化財主事 井 澤 洋 一  
 ( " ) 文化財主事 吉 武 学  
 (事前協議) 主任文化財主事 杉 山 富 雄  
 ( " ) 文化財主事 榎 本 義 嗣  
 資料整理 岩瀬宏子 川野尚子 筒井敦子 中村智子 山口とし子  
 調査協力 池田福美 榎田信一 甲斐康完 川井田明 河野一一 高着一夫 酒井次憲  
 西川譲 別府俊美 吉田博昭 豊丸秀人 松尾文江 渡辺淑子

## II 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 遺跡の位置と立地

本調査地周辺の地形は、北東側を三郡山地から延びる丘陵性山地に、南側を背振山地から延びる丘陵に挟まれ、北西から南東方向にはほぼ直線的に延びる溝状地形が発達し、福岡～二日市～筑後地方へ通じる唯一の解析平地となっている。この低平地は、北流する御笠川の沖積作用によって形成された標高10m～15m程の平野となり、福岡平野の東南部の一画をなす。

立花寺B遺跡は、この低平地に点在する遺跡のひとつで、1991年に存在が確認された遺跡である。遺跡の西側を流れる御笠川は遺跡の南側で西へ、西側で北へ折れ曲がりながら遺跡の周縁に沿うように流れていることから、遺跡が微高地上に位置することを知る。調査時における地表高は10m～12m前後を測るが、旧地表高は9m～10.5m、遺構検出面高は8.5m～10mである。

### 2. 遺跡の歴史的環境

これまでの発掘調査で、調査地周辺の丘陵においては原始からの人々の暮らしの跡である遺跡が、連続と存在していることが明らかとなっている。また、最近の調査成果により、これまで遺跡の存在が考えられていなかった御笠川と月隈丘陵との間に位置する低平地において遺跡が発見され、微高地上を含む低平地の広範囲に遺跡が存在することが明らかになりつつある。

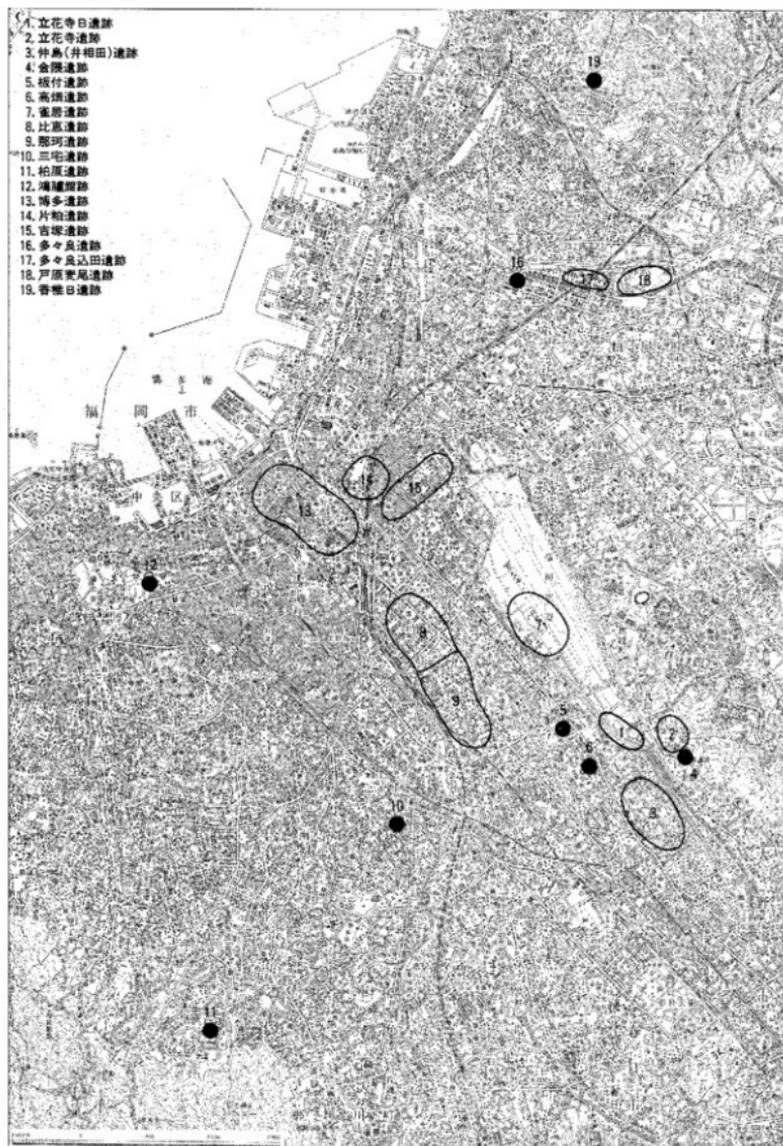
古墳時代以前の遺跡には、板付遺跡、金隈遺跡、那珂遺跡、比恵遺跡など多くの遺跡がある。最近では調査地の北西1.5kmで夜日式土器の単純包含層を持つ雀居遺跡が発見されている。

奈良時代以降の遺跡には、南東7kmに大宰府、西北西7kmに鴻臚館が位置する。さらに、周縁には遺構やその出土遺物などから官が性格が強い、高畑遺跡、仲島遺跡、立花寺遺跡、那珂遺跡、比恵遺跡などが位置する。立花寺遺跡は、調査地から東0.8kmの月隈低丘陵にあり、奈良時代から平安時代前半期に比定される掘立柱建物群や越州窯系青磁・緑釉陶器が発見されている。仲島遺跡は調査地から南1.5kmにあり奈良時代から平安時代前半期に比定される掘立柱建物群、井戸、祭祀土器などが発見されている。北西5kmには博多遺跡が位置する。

調査地を含む一帯には、最近まで糸里地形が良好な状態で残っていた。



Fig. 2 調査地周辺航空写真(昭和25年頃)



### III 調査の記録

#### 1. 調査の概要

##### (1) 第1次調査

立花寺B遺跡中央部を縦断するように建設される高架式都市高速道路で、遺跡の北端に位置する3区画の橋脚基礎工事予定地の調査を1994年7月1日～8月31日に行った。調査では古代の建物、土坑、溝などが検出されるとともに、土師器、黑色土器、少量の陶磁器などが出土した。調査の結果、試掘調査の成果が実証されるとともに、調査地が集落の縁辺部に位置することが判明した。

##### (2) 第2次調査

遺跡を縦断して建設される道路の橋脚基礎予定地(10区画)と地上道路予定地(2箇所)の調査を1995年5月22日～1996年3月15日に行った。調査地の北西端から南東端まで550mの長さである。調査は橋脚基礎予定地から行い、平安時代前半期と中世の井戸、溝、土坑などが検出されるとともに、土師器、黑色土器、緑釉陶器、中国産陶磁器などが出土した。特に、多量の越州窯系青磁、褐釉・緑釉陶器の出土数は、遺跡の特殊的性格を示すものである。地上道路予定地では、平安時代前半期と中世の掘立柱建物、井戸、溝、土坑、土壇墓、柱穴などが検出されるとともに、土師器、黑色土器、緑釉陶器、中国産陶磁器、石鍋などが出土した。遺跡の南東辺部近くでは土壇墓などが見つかり、中世集落の状況を明らかにする結果をえた。

##### (3) 第3次調査

橋脚基礎工事工程の関係から、第2次調査で調査が実施できなかった173-L・174-L区の調査を行った。当初は調査区を鋼矢板で囲み、基礎工事区域全域を調査する予定であったが、第2次調査の成果と切替道路との問題などから、遺構などが確認された場合には調査区を拡張する方針の基に、オープンカットの掘り下げ調査に変更した。地表下0.8～1.3mの灰褐色砂質土面で遺構検出を行ったが、顕著な遺構は認められなかった。遺物も少量の土師器片だけが出土した。このために調査面を拡大することなく、調査は1996年7月22日の1日で終了した。



Fig. 4 第2次調査(176-L区)風景

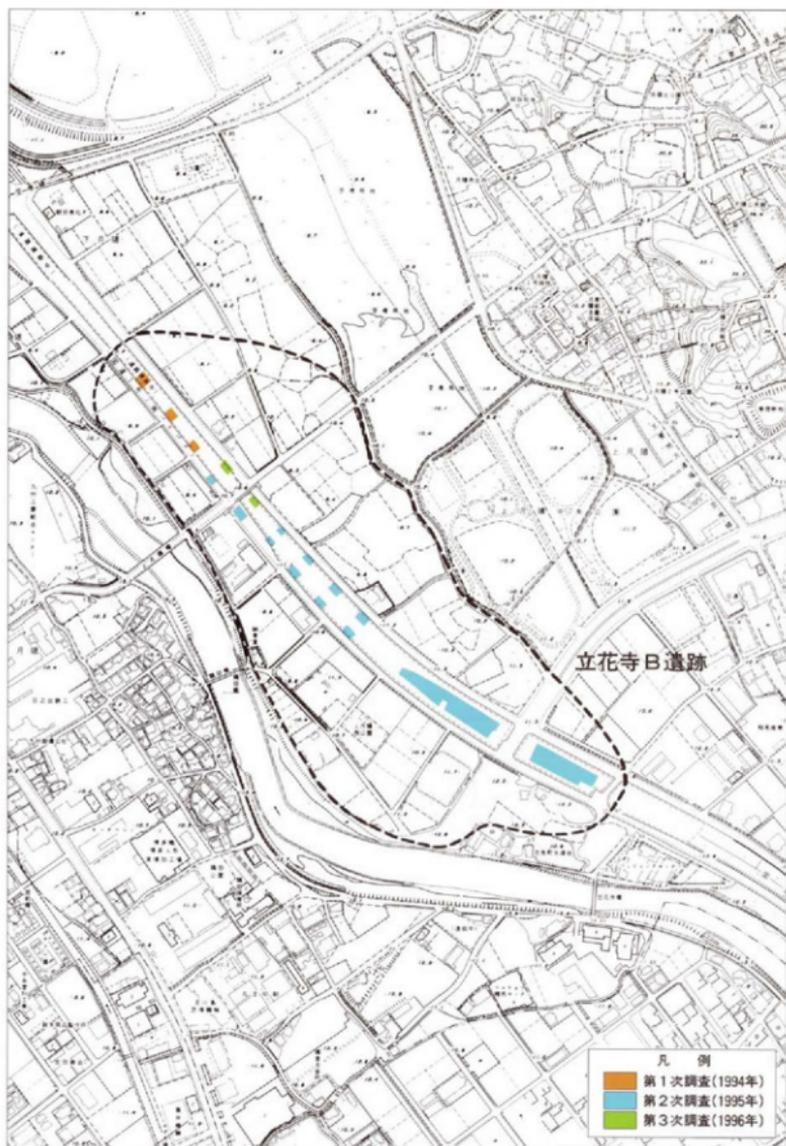


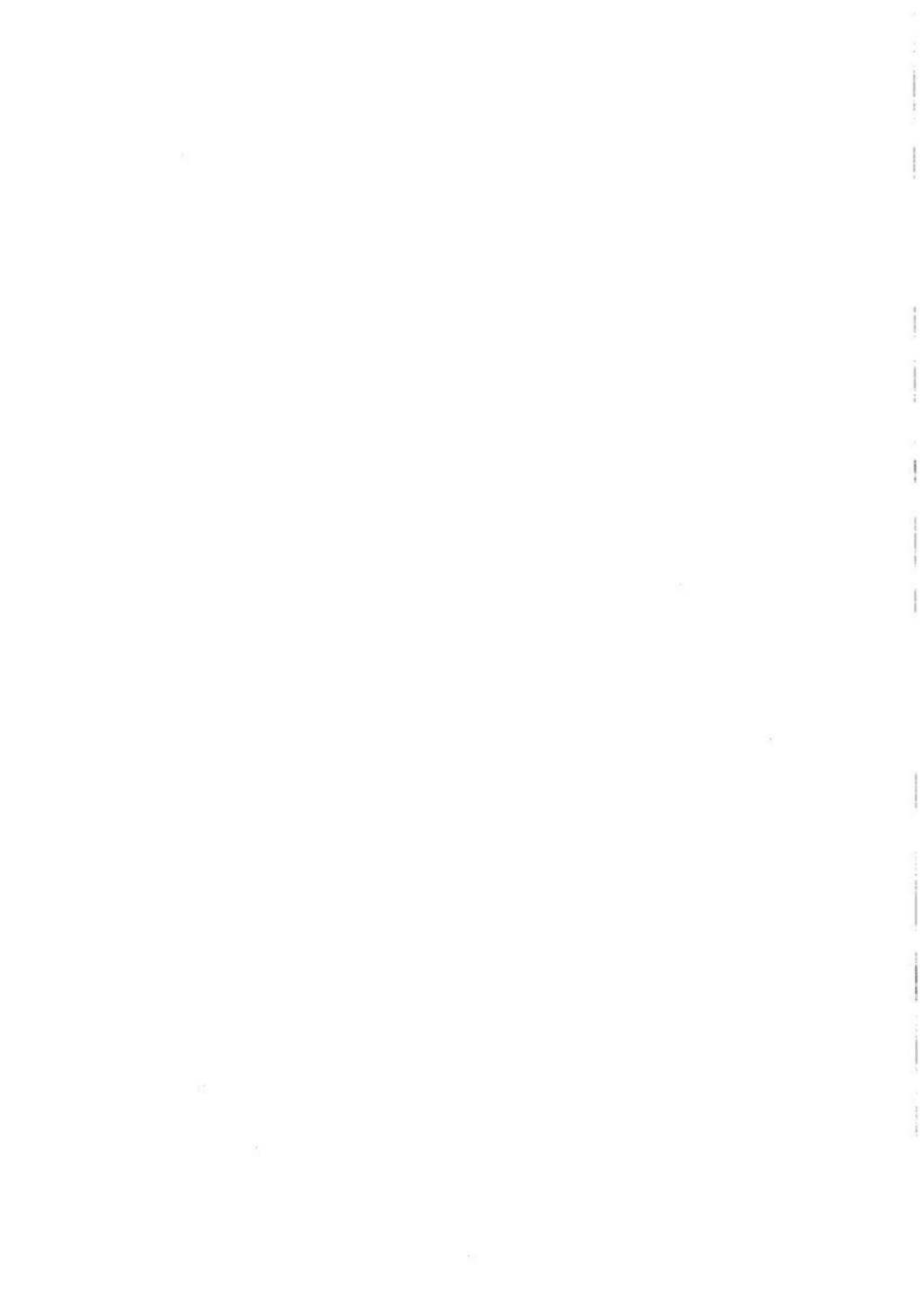
Fig. 5 調査区位置図(1/6,000)

## 【周辺遺跡関係福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書一覽】

- 立花寺遺跡**  
 第272集 立花寺 1 1992  
 第321集 立花寺 2 1993  
 第463集 立花寺 3 1996  
 第466集 立花寺 4 1996  
 第182集 立花寺古墳群 1988
- 唐田遺跡群**  
 第 44集 唐田遺跡 第一・二次発掘調査報告一 1977  
 第 45集 唐田遺跡調査報告II - 第二次発掘調査 - 3/8  
 第218集 唐田遺跡群 1990  
 第357集 唐田遺跡群 7 1994  
 第358集 唐田青木遺跡 1 1994  
 第408集 唐田青木遺跡 2 1995  
 第534集 唐田青木遺跡 3 1997  
 第 91集 久保岡遺跡 1983  
 第257集 上月隈遺跡 1991  
 第 76集 下月隈天神森遺跡 1981  
 第456集 下月隈天神森遺跡 1996  
 第457集 下月隈天神森遺跡 1996
- 板付遺跡**  
 第 8集 板付遺跡調査報告 1970  
 第 29集 板付周辺遺跡調査報告書 1 1974  
 第 31集 板付周辺遺跡調査報告書 2 1975  
 第 35集 板付 赤土層遺跡に付する発掘調査報告書 1976  
 第 36集 板付周辺遺跡調査報告書 3 1976  
 第 38集 板付周辺遺跡調査報告書 4 1977  
 第 39集 板付 板付55号墳跡に付する発掘調査報告書 1977  
 第 48集 板付 板付55号墳跡に付する発掘調査報告書 2 1979  
 第 49集 板付周辺遺跡調査報告書 5 1979  
 第 57集 板付周辺遺跡調査報告書 6 1980  
 第 65集 板付周辺遺跡調査報告書 7 1981  
 第 73集 板付 - 板付全館跡に付する発掘調査報告書 - 1981  
 第 83集 板付周辺遺跡調査報告書 8 1982  
 第 98集 板付周辺遺跡調査報告書 9 1983  
 第115集 板付周辺遺跡調査報告書 10 1985  
 第135集 板付周辺遺跡調査報告書 11 1986  
 第154集 板付周辺遺跡調査報告書 12 1987  
 第171集 板付周辺遺跡調査報告書 13 1987  
 第210集 板付周辺遺跡調査報告書 14 1989  
 第216集 板付周辺遺跡調査報告書 15 1989  
 第362集 板付周辺遺跡調査報告書 16 1994  
 第519集 板付周辺遺跡調査報告書 17 1997  
 第410集 板付遺跡 - 板付空堀遺跡群調査書一 1995  
 第439集 板付遺跡 - 環境整備報告書一 1995  
 第 72集 那珂深クサ遺跡 1981  
 第 82集 那珂深クサ遺跡 1982  
 第106集 那珂深クサ遺跡 1984  
 第208集 那珂深クサ遺跡 1989  
 第517集 那珂深クサ遺跡 1997  
 第133集 那珂久平遺跡 1986  
 第163集 那珂久平遺跡 1987
- 那珂遺跡**  
 第153集 那珂遺跡 - 第8次調査の報告一 1987  
 第222集 那珂遺跡 2 1990  
 第253集 那珂遺跡 3 1991  
 第254集 那珂遺跡 4 1991  
 第290集 那珂遺跡 4 1992  
 第291集 那珂遺跡 5 1992  
 第292集 那珂遺跡 6 1992  
 第323集 那珂遺跡 7 1993  
 第324集 那珂遺跡 8 1993  
 第364集 那珂遺跡 9 1994  
 第365集 那珂遺跡 10 1994  
 第366集 那珂遺跡 11 1994  
 第367集 那珂遺跡 12 1994
- 那珂遺跡**  
 第398集 那珂遺跡 13 1995  
 第399集 那珂遺跡 14 1995  
 第454集 那珂遺跡 15 1996  
 第455集 那珂遺跡 16 1996  
 第518集 那珂遺跡 18 1997  
 第525集 那珂遺跡 19 1997  
 第141集 那珂河川横古墳 1986  
 第400集 東那珂遺跡 1 1995  
 第460集 東那珂遺跡 2 1996
- 比恵遺跡**  
 第 94集 比恵遺跡 - 第6次調査 - 遺構編一 1983  
 第116集 比恵遺跡 - 第8次調査概報一 1985  
 第130集 比恵遺跡 - 第6次調査 - 遺物編一 1986  
 第145集 比恵遺跡 - 第9・10次調査報告一 1986  
 第174集 比恵遺跡群 8 1888  
 第289集 比恵遺跡群 11 1992  
 第325集 比恵遺跡群 12 1993  
 第388集 比恵遺跡群 13 1994  
 第369集 比恵遺跡群 14 1994  
 第401集 比恵遺跡群 15 1995  
 第427集 比恵遺跡群 16 1995  
 第403集 比恵遺跡群 17 1995  
 第404集 比恵遺跡群 18 1995  
 第442集 比恵遺跡群 19 1996  
 第451集 比恵遺跡群 20 1996  
 第452集 比恵遺跡群 21 1996  
 第453集 比恵遺跡群 22 1996  
 第520集 比恵遺跡群 23 1997  
 第530集 比恵遺跡群 24 1997
- 井相田周辺遺跡**  
 第 69集 三笠遺跡 - 次郎丸遺跡 1981  
 第152集 井相田C遺跡 1987  
 第179集 井相田C遺跡 1988  
 第458集 井相田C遺跡 - 第5次一 1996  
 第519集 井相田C遺跡 - 第6次一 1996  
 第241集 影汐浦古墳群 1991  
 第275集 支野 A 1992  
 第164集 支野B遺跡群 - 第1次調査一 1987  
 第358集 支野B遺跡群 1994  
 第107集 支野D古墳遺跡 1984  
 第276集 雑納限遺跡 1992  
 第528集 雑納限周辺遺跡群 1997  
 第128集 南八幡遺跡群 トナシ遺跡 1986  
 第277集 南八幡遺跡群 2 1992  
 第361集 中・南館 3 1994
- 雀居遺跡**  
 第322集 雀居遺跡 1 1993  
 第406集 雀居遺跡 2 1995  
 第407集 雀居遺跡 3 1995
- 鴻巣館跡**  
 第270集 鴻巣館跡 1 1991  
 第315集 鴻巣館跡 2 1992  
 第355集 鴻巣館跡 3 1993  
 第372集 鴻巣館跡 4 1994  
 第416集 鴻巣館跡 5 1995  
 第486集 鴻巣館跡 6 1996  
 第487集 鴻巣館跡 7 1996
- 金隈遺跡周辺**  
 第 7集 金隈遺跡 - 第1次調査概報一 1970  
 第 7集 金隈遺跡 - 第2次調査概報一 1971  
 第123集 金隈遺跡群 - 発掘調査の経緯と調査報告書一 1985  
 第151集 金隈遺跡群発掘調査報告書 1987
- 多々良遺跡周辺**  
 第 20集 多々良遺跡調査報告書 1972  
 第 53集 多々良込田遺跡 II 1980  
 第121集 多々良込田遺跡 III 1985  
 第189集 戸原夷尾遺跡 I 1988  
 第201集 戸原夷尾遺跡 II 1989  
 第217集 戸原夷尾遺跡 III 1990
- 博多遺跡群**  
 第 66集 博多 1 1981  
 第 86集 博多 2 1982  
 第105集 高志坑遺跡関係文化財調査報告 - 博多 - 1984  
 第118集 博多 3 1985  
 第119集 博多 4 1985  
 第120集 博多 5 1985  
 第126集 高志坑遺跡関係文化財調査報告 - 博多 - 1986  
 第144集 博多 6 1986  
 第147集 博多 7 1987  
 第148集 博多 8 1987  
 第149集 博多 9 1987  
 第150集 博多 10 1987  
 第156集 高志坑遺跡関係文化財調査報告 - 博多 - 1987  
 第176集 博多 11 1988  
 第177集 博多 12 1988  
 第183集 博多 博多遺跡群 博多東部埋蔵文化財調査報告 1988  
 第184集 博多 博多遺跡群 博多東部埋蔵文化財調査報告 1988  
 第193集 高志坑遺跡関係文化財調査報告 - 博多 - 1988  
 第205集 博多 博多遺跡群 博多東部埋蔵文化財調査報告 1989  
 第214集 博多 博多遺跡群 博多東部埋蔵文化財調査報告 1989  
 第228集 博多 13 1990  
 第229集 博多 14 1990  
 第230集 博多 15 1990  
 第244集 博多 16 1991  
 第245集 博多 17 1991  
 第246集 博多 18 1991  
 第247集 博多 19 1991  
 第248集 博多 20 1991  
 第249集 博多 21 1991  
 第250集 博多 22 1991  
 第251集 博多 23 1991  
 第252集 博多 24 1991  
 第280集 博多 25 1992  
 第281集 博多 26 1992  
 第282集 博多 27 1992  
 第283集 博多 28 1992  
 第284集 博多 29 1992  
 第285集 博多 30 1992  
 第286集 博多 31 1992  
 第287集 博多 32 1992  
 第288集 博多 33 1992  
 第326集 博多 34 1993  
 第327集 博多 35 1993  
 第328集 博多 36 1993  
 第329集 博多 37 1993  
 第330集 博多 38 1993  
 第331集 博多 39 1993  
 第332集 博多 40 1993  
 第370集 博多 41 1994  
 第371集 博多 42 1994  
 第382集 博多 43 1995  
 第393集 博多 44 1995  
 第394集 博多 45 1995  
 第395集 博多 46 1995  
 第396集 博多 47 1995  
 第397集 博多 48 1995

# 立花寺B遺跡

— 第 1 次 調 査 —



## 2. 第1次調査の記録

### (1) 調査の概要 (Fig. 1)

調査の対象である都市高速道路予定地は、1級国道3号線南バイパスの中央線地部分にあたり、高架道路の橋脚建設により地下が破壊される部分のみを調査対象とし、他は現状保存される。第1次調査は3ヶ所の橋脚建設予定地について実施し、北から1、2、3区と命名した。

調査に先立ち、施工業者による山留め工事（欠板打ち）を行い、平成6年7月1日の表上除去（業者による）をもって調査を開始した。人力による掘削は7月13日から開始し、8月末日をもって全ての調査を完了した。

発掘調査は南の3区から開始し、順次北側へと移行した。調査面積は以下の通りで、工事面積に等しいが、欠板を一部にしか施さなかった3区では建設予定範囲よりやや広めに調査区を設定した。

1区 163㎡

2区 169㎡

3区 102㎡

遺構の基盤土は粘質土、シルト、砂などの沖積土であり、遺構検出面の標高は8.5~8.7m、旧地表面の標高は9.2mを割り、現在はこれに0.7mの盛土がなされている。

検出遺構は古代の掘立柱建

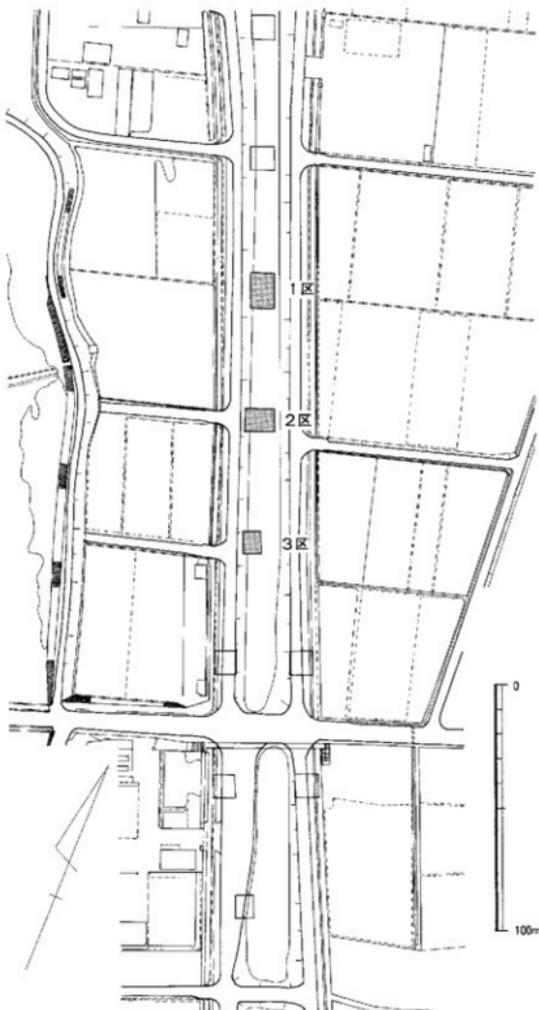


Fig. 1 第1次調査区位置図(1/2,000)

物2棟、溝状遺構4条、土坑6基、及び中世の河川1条、溝状遺構3条、土坑2基、水田跡（畦畔、足跡）である。

#### A. 1区の概要 (Fig. 2)

南北15.5m、東西10.5mの約163㎡を掘削した。基盤土は砂ないしシルトで、遺構検出面の標高は8.6mを測る。明確な時期は不明だが、少なくとも中世以降と考えられる水田と河川の跡を検出した。水田跡は主に調査区の北側に見ることができ、水田の畦畔の一部と人や牛の足跡が残っていた。河川SD-02は調査区の南端にその一部がかかり、1～2区間に流路の主体が存在するものと見られる。

また、2、3区で検出した古代の遺構は全く見られず、古代集落は2区以南に展開しているものと考えられる。

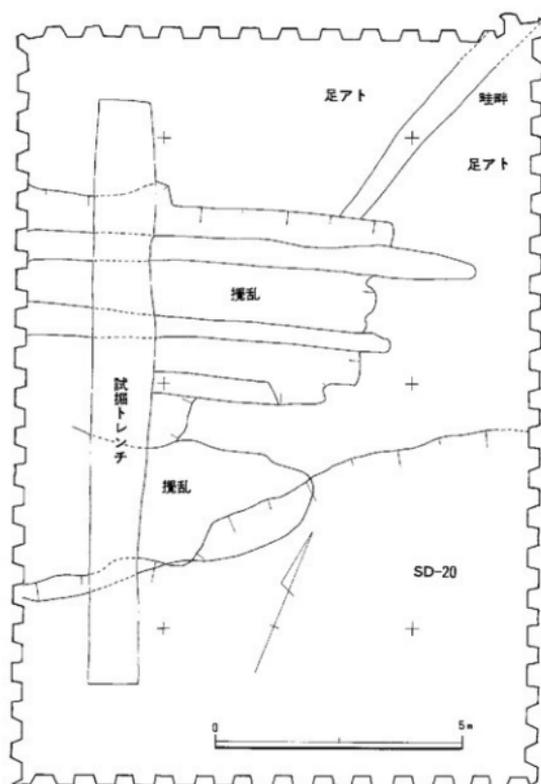


Fig. 2 1区全体図(1/100)

## B. 2区の概要 ( Fig. 3 )

13×13mの169㎡を掘削した。基盤土は粘質土で、遺構検出面の標高は8.7m弱である。古代の集落跡とその廃絶後に造営された中世の水田跡を検出した。3ヶ所の調査区のうちでは最も遺構が濃密ではあるもの、発掘区が狭い上、区内の南北には巨大な攪乱坑があって、遺構は断片的にしか確認できなかった。

古代の集落は掘立柱建物2棟、溝状遺構4条、土坑6基、中世の溝状遺構1条からなる。遺構には若干の切り合いが見られる。掘立柱建物は攪乱坑のため一部を確認したのみであるが、南北に並ぶものと見られる。溝状遺構はおおむね南北を向くが、うちSD-07はL字形にめぐる。土坑は小型のものが多く、SK-16のみは大型で素掘りの井戸の可能性がある。出土遺物は、SK-16より柄杓状の曲物と木簡が出土した。木簡にはかすかに墨跡を認めることができるが文字は判読できない。その他、日常土器以外に中国産の陶磁器や瓦類が若干出土している。

中世の水田跡は古代の集落の廃絶後にこれを整地して造営されているが、遺構としての残りは悪く、一部で足跡を検出したのみである。

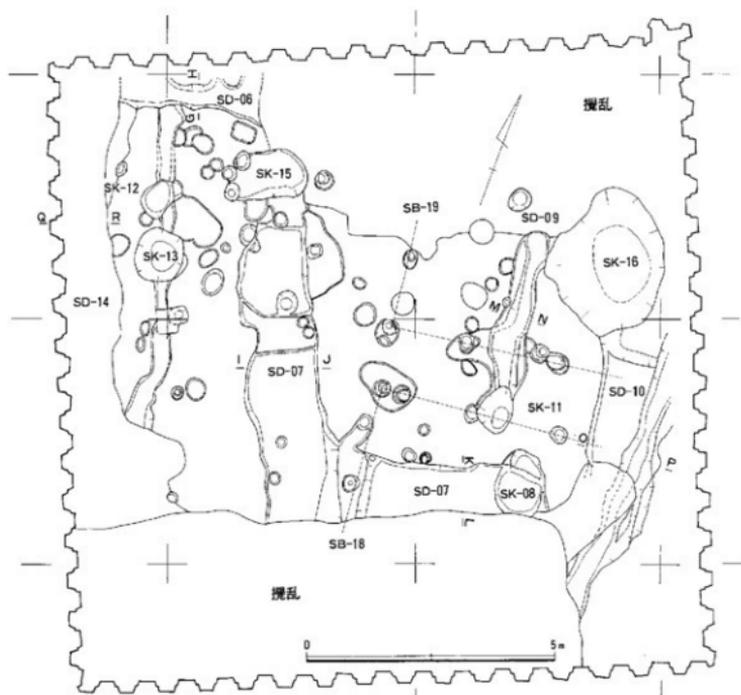


Fig. 3 2区全体図(1/100)

### C. 3区の概要 ( Fig. 4, 5 )

矢板は西側のみ打たれ、他は実際の工事予定範囲よりも広めに取っている。南北14.5m、東西9.3mを対象としたが、法面保護のため傾斜を取り、調査区下端では南北11.2m、東西9.1m、面積103㎡を測る。基盤土は粘質土で、遺構検出面の標高は8.7m強を測る。

検出した遺構は溝状遺構2条、土坑3基である。溝状遺構は南北方向の1条にT字形に他の1条が取り付くもので、おそらく水田の水路ではないかと考えられる。3区の遺構の覆土からは主に古代の遺物が出土しているがいずれもローリングが著しく、遺構の時期はこれより下る中世と見られる。

遺構検出面は中世の遺物包含層に覆われており、包含層は南に向かって厚さを増している。この層は中世水田の整地層と思われ、耕作上であるシルト層と床土である粘質土層が交互に堆積している。層中からは白磁片などが出土した。

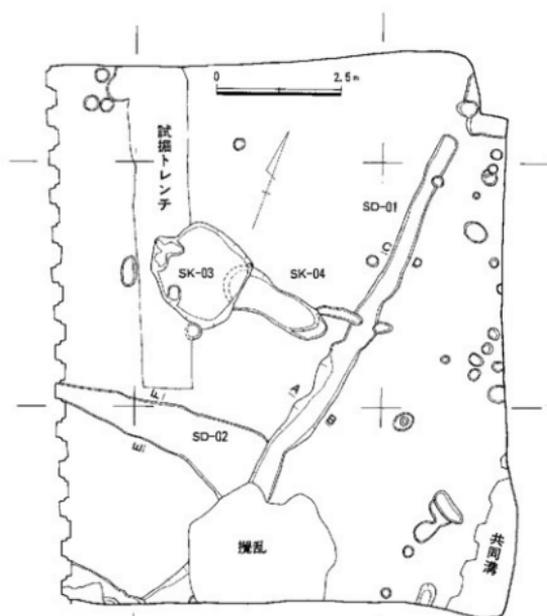


Fig. 4 3区全体図(1/100)

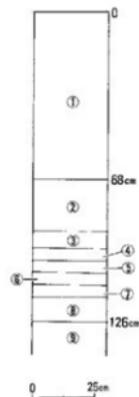


Fig. 5 3区土層  
柱状図(1/20)

- ① 盛土
- ② 耕作土
- ③ 床土
- ④ 黄褐色粘質土(床土)
- ⑤ 灰褐色シルト(耕作土)
- ⑥ 黄褐色粘質土(床土)
- ⑦ 灰褐色シルト(耕作土)
- ⑧ 灰褐色粘質土
- ⑨ 灰褐色シルト

## (2) 遺構と遺物

## A. 掘立柱建物

## SB-18 (Fig. 6, PL. 3)

2区で検出した掘立柱建物であるが、溝状遺構や攪乱坑に切られて全容が明らかでない。現状で2間以上×1間以上である。主軸方位をN-85°-Wにとる。東西長375cmを測り、柱間は東から180cm、195cm。南北の柱間は204cmである。柱穴掘り方は円～不整楕円形プランを呈し、径は36～44cm、深さは24～38cmを測る。柱底跡はない。柱穴掘り方からは計30点の土師器片が出土した。いずれも細片にすぎず図化できたものは1点である。古代の遺構であるが詳細な時期は決し難い。

## SB-18出土遺物 (Fig. 7)

1は土師器坏で高台が付く。小片のため分量は不明。焼成不良。

## SB-19 (Fig. 6, PL. 3)

SB-18の北側に約1m離れて検出した掘立柱建物である。やはり全容は不明で、現状で2間以上×1間以上である。主軸方位はN-82°-Wで、SB-18にはほぼ等しい。東西長337cmを測り、柱間は東から181cm、156cm。南北の柱間は148cmである。柱穴掘り方は円～楕円形プランを呈し、径は36～60cm、深さは25～44cmを測る。柱底跡はない。

柱穴掘り方から土師器片29点、須恵器片1点、黒曜石チップ1点が出土した。土器は全て小片で図化できたものは2点である。SB-18と同様、古代の遺構である。

## SB-19出土遺物 (Fig. 7)

2は内面を施す黒色土器A類もしくは土師器の高台付坏である。3は土師器碗の細片である。ともに焼成が不良である。

## B. 溝状遺構

## SD-O1 (Fig. 4・8)

3区で検出した。ほぼ南北に軸を取り、西側へ緩く湾曲している。北端は削平され消失している。幅0.4～0.6m、深さ0.1mを測り、北流する。覆土からは土師器片60点が出土したが、図化できるものはない。土器はいずれも著しくローリングを受けており、中世の遺構ではないか考えられる。

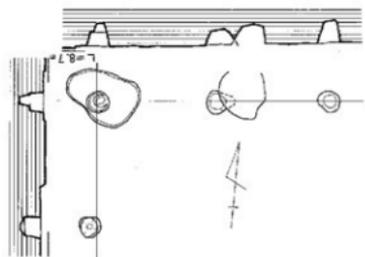


Fig. 6 SB-18・19実測図(1/80)

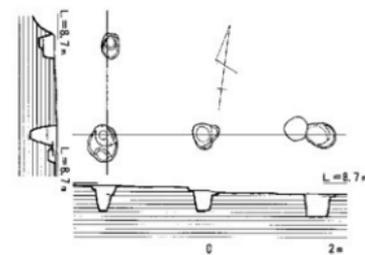


Fig. 7 SB-18・19出土遺物実測図(1/3)

## SD-02 (Fig. 4・8)

SD-01 の中途から両側に直角に伸びる浅い溝である。幅1.5~0.4mで西へ狭まる。深さは0.05mで極めて浅い。調査時にはSD-01 に切られると判断したが、同時期の遺構かも知れない。

土師器片24点、須恵器片1点が出土した。中世の遺構であろう。

## SD-06 (Fig. 3・8)

2区の北西隅で一部を検出した。L字形に曲がり、幅0.45m、深さ0.2m。古代の遺構を切り、中世の遺構(SD-14)に切られている。土師器片41点、須恵器片1点が出土しており、出土遺物は全て古代に属する。土師器3点を図化した。

## SD-06 出土遺物 (Fig. 9, PL. 4)

4、5は土師器環である。4は体部が内湾し、底部はヘラ切りである。焼成は不良。底径6.5cm。5は体部が直線的に開き、底部ヘラ切り。器面が剥落して調整不明。焼成不良。口径12.8cm、器高3.8cm、底径7.9cm。6は土師器碗で、器面が剥落しているため明瞭でないが黒色土器の可能性もある。

## SD-07 (Fig. 3・8, PL. 3)

2区の中央部をL字形に囲む溝で、掘立柱建物の柱穴を切っている。東端と北端で途切れており、溝の基底面にはかなりの凹凸があり、水路とは考えにくい。幅1.5m前後で、深さは0.15mを測る。土師器片251点、須恵器片24点、白磁片2点、越州窯系青磁片1点、鉄滓1点が出土した。古代。

## SD-07 出土遺物 (Fig. 9, PL. 4)

7は土師器高台付環で、高台は外底縁に付く。胎土に雲母粒を僅かに含み、焼成はやや不良。底径7.8cm。8は黒色土器A類碗で、内面に粗いヘラミガキを加える。胎土に雲母粒を含み、焼成不良。底径は不正確ながら7.2cm。9は土師器甕である。口縁部外面横ナデ、内面板ナデ、胴部内面はヘラ割りを施す。胴部外面は器面が剥落している。胎土に砂粒・雲母粒を多量に含む。口径24.7cm。

## SD-09 (Fig. 3・8, PL. 3)

2区中央やや東寄りに検出した。南北に軸を取り、北端は攪乱坑に切られているが、南側は中途で途切れSK-11に切られている。幅0.5m、深さ0.2m弱である。溝ではなく、細長い土坑とすべきか。土師器片265点、須恵器片2点、越州窯系青磁片1点、瓦片2点が出土した。古代の遺構である。

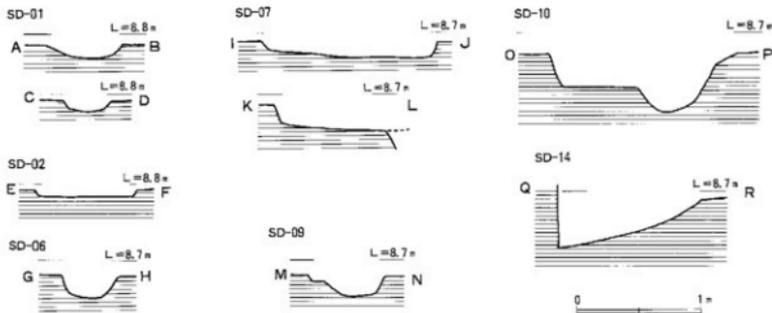


Fig. 8 溝状遺構断面図(1/40)

## SD-O9出土遺物 (Fig. 9, PL. 4)

10~15は土師器杯である。いずれも体部は直線的に開く。10、12は底部と体部の境が明瞭で、他は丸みを持つ。底部はへら切りで、11、14は板圧痕が残る。胎土はいずれも精良である。口径は12.2~12.5cm、器高は3.1~3.9cm、底径は6.8~8.0cmの間の数値を示す。16~18は土師器甕である。16、17は口縁が強く屈曲して開くが内面に稜はない。18は緩く屈曲するもので、胴が張らない。いずれも口縁内外を横ナデ、胴部外面をハケ目、胴部内面をへら削りしている。16の口径は25.7cmである。19は須恵器で平瓶の胴部片か。算盤玉状に胴部を作り、頸部を外側から被せて接合する。胴部中位以下に同転へら削りを施す。20は丸瓦の小片である。端部には切断痕がある。凸面に縄目叩き、凹面に布目痕が残る。

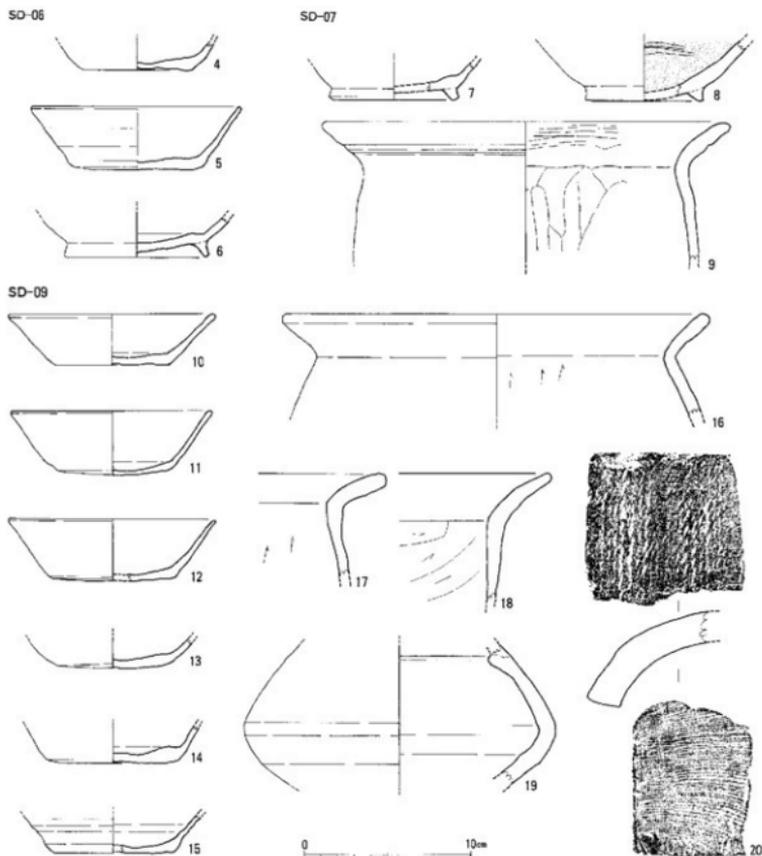


Fig. 9 溝状遺構出土遺物実測図 I (1/3)

SD-10



21



22



23



24



25



29



30



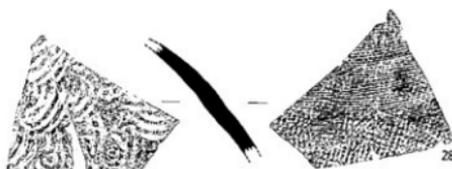
31



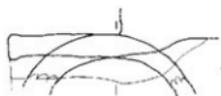
26



27



28

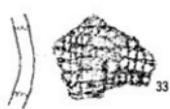


32

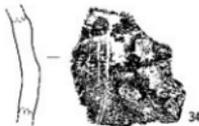
SD-14



35



33

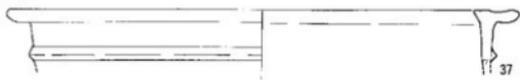


34



36

SD-20



37



38

0 10cm

Fig. 10 溝状遺構出土遺物実測図II(1/3)

**SD-10 (Fig. 3・8, PL. 3)**

2区東壁際に検出した水路で、南北端を攪乱等に切られる。南北に軸を取り北流する。幅1.5m、深さ0.5mを測る。覆土は粘質土である。土師器片465点、須恵器片20点、越州窯系青磁4点、緑釉陶器1点、製塩土器2点、滑石片2点、砥石片1点が出土した。

**SD-10出土遺物 (Fig.10, PL. 4)**

21,22は土師器坏である。体部は丸味を持って立ち上がり、底部をヘラ切りする。21は口径12.4cm、器高3.5cm、底径6.7cm。22は口径13.0cm、器高4.0cm、底径8.0cm。23は土師器坏で、丸い体部に高台が付く。底部ヘラ切り、他は横ナテ調整。底径8.1cm。24は黒色土器A類椀で、器面があれて調整不明。底径8.0cm。25は緑釉陶器の皿である。胎土は軟質で黄白色を呈し、外底を除いて暗緑色の釉を薄くかける。26は土師器甕である。口縁外面ナテ、内面横ハケ、胴外面ハケの後ナテ、内面ヘラ削りで、内外面に炭化物が付着する。口径26.3cm。27、28は須恵器甕の胴部片である。27は外面格子叩き、内面平行線文のアテ具痕、28は外面が目の細かい格子叩きの後カキ目、内面には同心円文のアテ具痕が残る。29は須恵器壺か。上げ底気味の平底で、底径8.8cm。30、31は越州窯系青磁碗の口縁部片で、精製品である。31は口縁端部が外反する。胎土は灰白色を呈し密で、全面に施釉する。32は丸瓦の玉縁片である。四面に布目があるが、凸面は器面が剥落している。33、34は製塩土器である。33は外面に粗い格子叩き、内面にアテ具痕が残り、2次加熱を受けている。34は外面叩きの後、半ナテ消しか。

**SD-14 (Fig. 3・8)**

2区西端で一部を確認した。西側へ深く、覆土は砂である。大水路の一部と見られる。土師器片31点、須恵器片1点、陶器片2点、緑釉陶器片1点、黒曜石片1点が出土した。中世の遺構であろう。

**SD-14出土遺物 (Fig.10)**

35は土師器皿で、底部は回転ヘラ削りか。底径10.7cm。36は土師器甕口縁部片である。口縁内外横ナテ、胴部外面縦ハケ、内面ヘラ削りを施す。

**SD-20 (Fig. 3)**

1区南半に検出した中世の河川である。大河川の一部で、覆土は砂である。弥生土器片1点、土師器片2点、白磁片1点、黒曜石片1点、ホタテ貝の貝殻1点が出土した。

**SD-20出土遺物 (Fig.10, PL. 4)**

37は弥生時代中期の変形土器の口縁部片で、口縁が逆L字形に屈曲し、口縁直下に断面三角形の突帯を貼り付ける。38は白磁碗の底部片である。外底は露胎。

**C. 土坑****SK-03 (Fig.11)**

3区中央部のやや西寄りに検出した土坑である。SK-04を切っている。平面プランは不整な凹形を呈し、長径2.2m、短径1.9m、深さ0.25mを測る。壁はほぼ直に立ち、底面にはビット2個がある。土師器片39点、須恵器片4点、白磁片2点が出土した。中世の遺構であろう。

**SK-03出土遺物 (Fig.12, PL. 4)**

39は黒色土器B類椀の底部片で、高台径は6.0cm。40は須恵器脚である。41、42は白磁小片で、接合しないが同一個体か。胎土は乳白色で密、釉は緑味のある透明釉で、外面下端は露胎である。

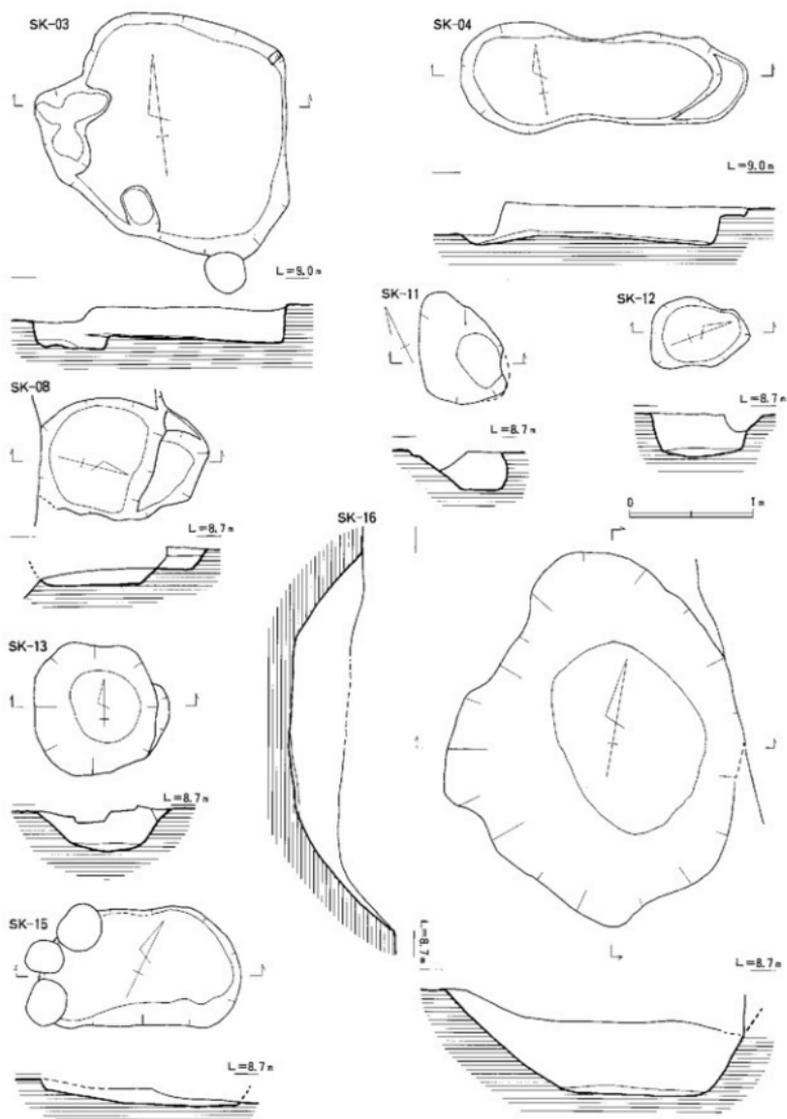


Fig. 11 土坑実測図(1/40)

## SK-O4 (Fig.11, PL. 2)

SK-O3の東隣に位置し、これに切られる。平面プランは東西に長い楕円形を呈し、長径2.3m、短径0.7m、深さ0.3mを測る。底面は平坦で、中央部が若干高い。土師器片41点、須恵器片2点、滑石製石鍋の小片1点が出土したが、小片のため図化できる遺物はない。時期は中世か。

## SK-O8 (Fig.11, PL. 3)

2区の南東寄りに位置し、SD-O7に切られる。南北に長い楕円形プランを呈し、長径1.4m強、短径1.0m、深さ0.3m。土師器片7点が出土したが図化し得ない。古代の土坑であろう。

## SK-11 (Fig.11, PL. 3)

SK-O8の北西側に位置する。南北に長い楕円形プランをなし、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.3mで、壁が南東側へ袋状にえぐれる。覆土には馬糞状の腐植土が詰まっていたため、土壌を採取して水洗選別を行った結果、数点の種子を得た。科学分析を行っていないため明確でないが、肥料を詰めた土坑である可能性がある。土師器片52点、白磁細片1点が出土した。古代の土坑である。

## SK-11出土遺物 (Fig.12, PL. 4)

43は土師器坏で、底部はヘラ切りし、板圧痕が残る。底径6.4cm。44は土師器の小形甕で、別は張らず口縁は緩く外反する。口縁内外横ハケ、胴部外面ハケ目、内面は上半をヘラ削り、下半をナデ調整する。胴部外面に炭化物が付着する。

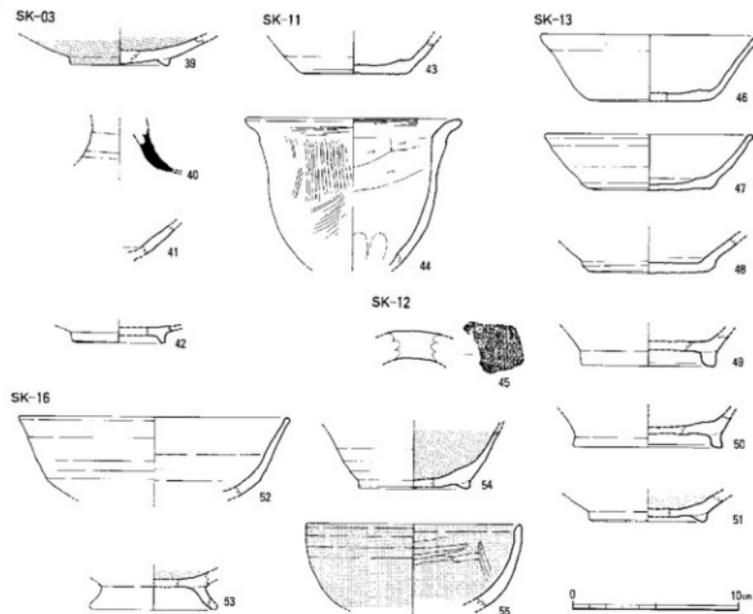


Fig.12 土坑出土遺物実測図(1/3)

**SK-12** (Fig.11, PL.3)

2区北西寄りに位置し、溝状遺構に切られる。南北に長い楕円形プランを呈し、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.35mである。土師器片34点、須恵器片1点、緑釉陶器片1点、瓦片1点が出土した。

**SK-12 出土遺物** (Fig.12)

45は丸瓦の小片である。凸面はナデ調整で、内面には布目が残る。古代。

**SK-13** (Fig.11, PL.3)

SK-12の南側に位置し、溝状遺構に切られる。平面プランは略円形で、長径1.15m、短径1.0m、深さ0.35mである。黒色土器A類を含む土師器片103点、須恵器片2点が出土した。

**SK-13 出土遺物** (Fig.12, PL.4)

46～48は土師器坏で、底部はヘラ切りである。体部は丸味を持って底部から立ち上がり、直線的につく。46は口径13.3cm、器高4.0cm、底径7.5cm、47は口径12.7cm、器高3.4cm、底径7.4cm、48は底径7.2cmである。49、50は土師器高台付坏の底部片である。49は黒色土器A類の可能性もある。底径は49が8.0cm、50が9.0cmである。51は黒色土器A類碗である。高台は低く断面三角形を呈する。

**SK-15** (Fig.11, PL.3)

SK-12の東に2m離れて位置し、東側は掘乱坑に削られている。平面プランは東西に長い楕円形で、長径1.6m、短径1.0m、深さ0.2mである。土師器片29点、須恵器片1点が出土したが、いずれも著しくローリングを受けており、また細片であるため図化し得ない。古代の土坑である。

**SK-16** (Fig.11, PL.4)

2区の東端に位置する大型の土坑である。東端は一部調査区外に及ぶ。SD-10との切り合い関係ははっきりせず、調査時には同時に掘り下げている。平面プランは南北に長い不整な楕円形を呈し、長径3.0m、短径2.5m前後、深さ0.8mを測る。調査時にかなりの湧水があり、素掘りの井戸である可能性もある。土師器片40点、須恵器片6点、柄杓状の曲物、木筒、及び種子類が出土した。なお、遺物の一部をSK-17の遺構番号で取り上げた。古代の土坑である。

**SK-16 出土遺物** (Fig.12)

52は土師器碗である。体部は丸く立ち上がり、直線的に開く。丁寧な造りで軽量である。53は小片のため明確でないが黒色土器A類の碗であろうか。高めの高台を付ける。54は黒色土器A類碗で、低い高台を付ける。内面にヘラミガキを施す。55は黒色土器B類碗で、体部が内湾して開く特異な器形をなす。口唇外面をナデで浅く窪ませる。内面にヘラミガキ、外面には雑なヘラミガキを施す。

なお、曲物は取上げ後に崩壊してしまった。

**3. 小 結**

第1次調査で出土した遺物のうち、時期的に最も古いものはSD-10から出土した弥生時代中期の甕形土器であるが、これは他所からの流入品と見られる。人間の生活痕跡は古代（8世紀末）以降に見ることができ、日常土器のほか、瓦、製塩土器、輸入陶磁器、木筒等が出土した。当該期の遺構は南側の第2次調査で多数が確認されており、当地点が古代集落の北限に位置することを示している。また、古代集落は東側の雀居遺跡でも確認されており、ここでは駅路との関わりが指摘されている。

第 1 次 調 査

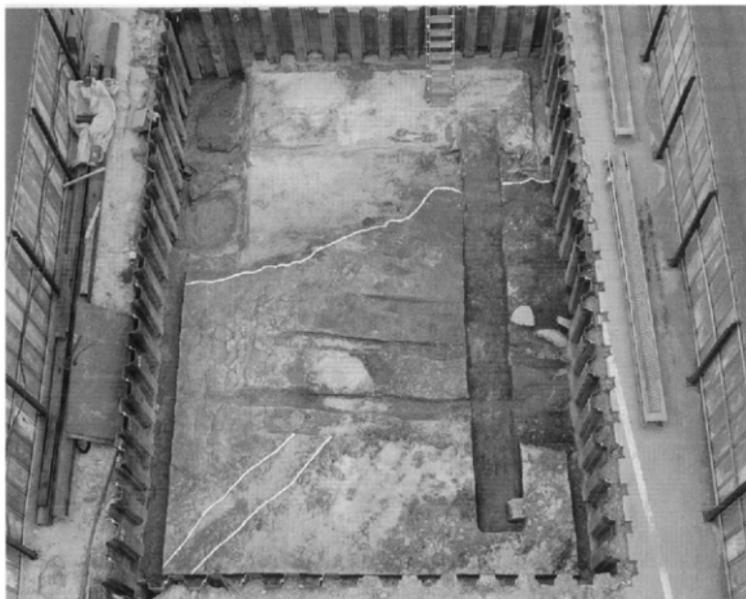
図 版

PLATES

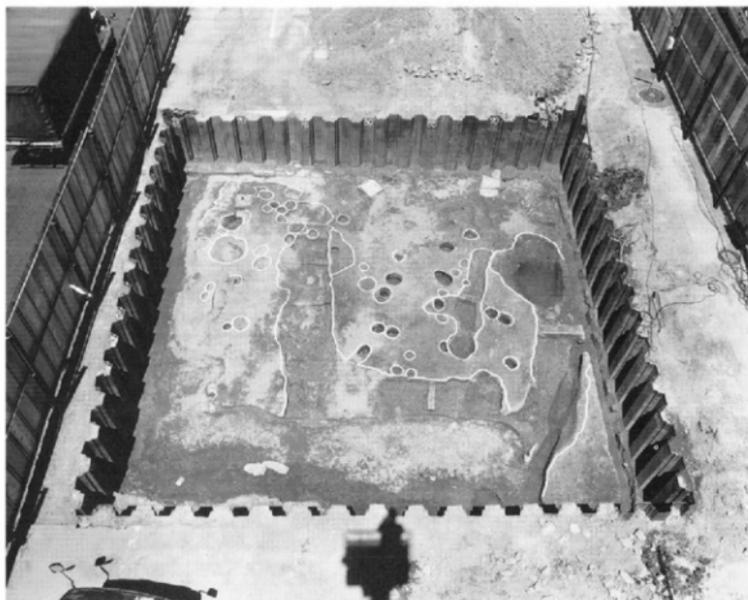




(1) 第1次調査地区全景(南から)



(2) 1区全景(北から)



(1) 2区全景(南半)



(2) 3区全景(南半)



(1) SB-18・19(西から)



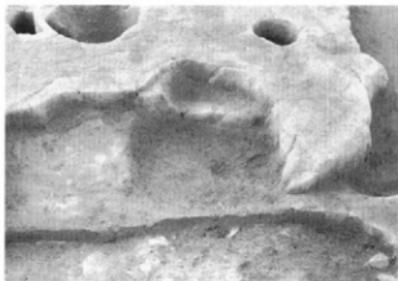
(2) SD-07(北から)



(3) SD-09(北から)



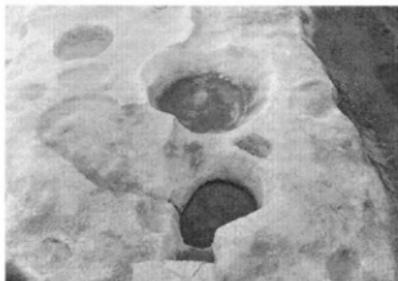
(4) SD-10(南から)



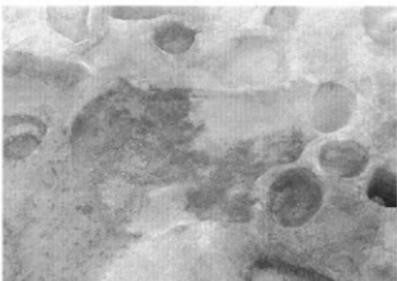
(5) SK-08(南から)



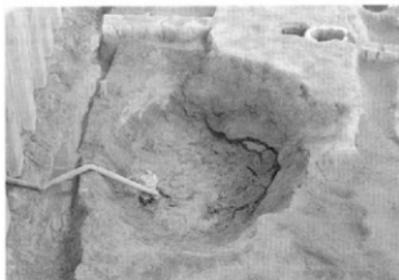
(6) SK-11(西から)



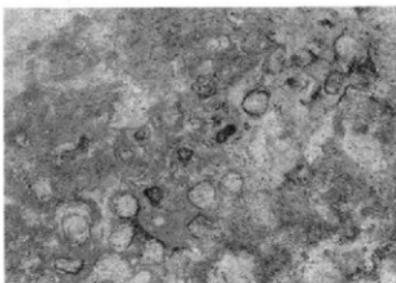
(7) SK-12・13(北から)



(8) SK-15(北から)

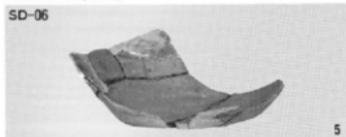


(1) SK-16(北から)



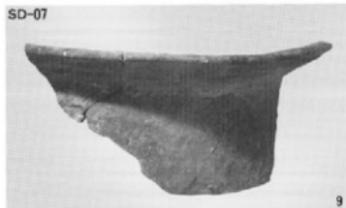
(2) 1区北端の水田足跡

SD-06



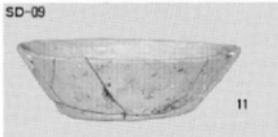
5

SD-07

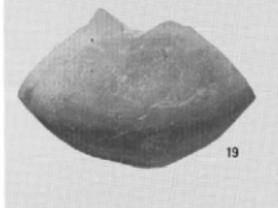


9

SD-09



11



19



20

SD-20

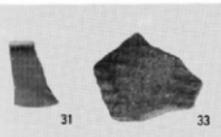


38

SD-10

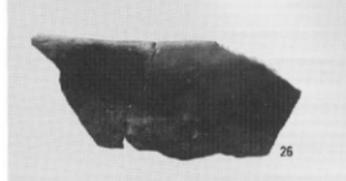


22



31

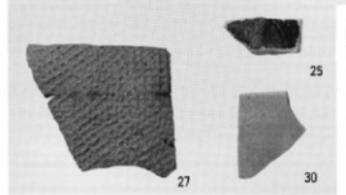
33



26



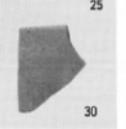
34



27



25



30

SK-03

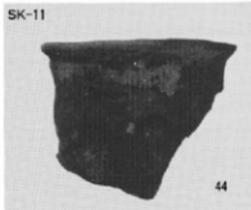


40

41

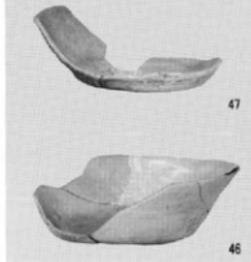
42

SK-11



44

SK-13



47



48

(3) 第 1 次 調 査 出 土 遺 物

# 立花寺 B 遺跡

— 第 2・3 次調査 —



## 1. 第2・3次調査の記録

### (1) 概要

調査地区の名称はFig.1に示すように、橋脚基礎部分の調査地区名は工事地区名をそのまま用い、地上道路部分については北からA区、B区、C区とした。さらに、A区については分区し、西半部をA-I区、東半部をA-II区とした。

調査地の層序は、現地が水田であった上に道路を建設しているため、基本的にならから造成土、耕作土・床土、黄褐色土、暗茶灰色～暗茶褐色砂質土、黄灰色～灰褐色砂質土である。遺構検出は地表下1.8m、旧耕作土下0.5mの黄灰色～灰褐色砂質土層上面で行い、標高は調査地の西で9.1m、東で10.1mを測る。この黄灰色～灰褐色砂質土層は、調査地の南に位置するB・C区ではやや砂の割合が多くなる。遺構検出面上層の暗茶灰色～暗茶褐色砂質土は、10～13世紀の中国産陶磁器や国内産線轆を多く含む遺物包含層で、調査地の南に従って層厚は薄くなり、B・C区では僅かに認められる程度であった。

調査では、建物跡、井戸、溝、土竈墓、土坑などが発見され、9世紀後半～10世紀前半と12世紀～14世紀の二時期に区分される。遺構の密度は調査地南半部のAII区、B区、C区で高く、井戸の大半が集中していた。遺物はコンテナに212箱が出土したが、越州窯系青磁の碗、壺が多量に出土している。

調査は、第2次調査を1995年5月22日～1996年3月15日、第3次調査を1996年7月22日に行ない、出土遺物の整理、報告書の刊行は1996年4月～1997年3月に行った。



Fig. 1 第2・3次調査区位置図(1/3,000)

## (2) 遺構 (PLAN 1~21, PL.2~23)

遺構は、下記に示すように掘立柱建物、井戸、溝、土壇墓、土坑、柱穴などが検出された。

調査地区	検出遺構
173-L	顕著な遺構は認められない
173-R	"
174-L	"
174-R	"
175-L	溝 6, 土坑 3, 柱穴
175-R	溝 1, 柱穴
176-L	溝 9, 土坑 10, 柱穴
176-R	溝 2, 土坑 5, 井戸 1, 柱穴
177-L	溝 2, 土坑 3, 柱穴
177-R	土坑 3, 枕列
A1-L	溝 4, 土坑 1, 井戸 1, 柱穴
A1-R	土坑 獲 2, 柱穴
A-I	溝 18, 土坑 31, 土壇墓 1, 柱穴
A-II	溝 17, 土坑 44, 井戸 4, 柱穴, 水田
B	溝 21, 土坑 61, 掘立柱建物 2, 井戸 12, 土壇墓 1, 柱穴
C	溝 3, 土坑 10, 井戸 4, 土壇墓 3, 柱穴

以下、遺構の調査所見を種類別に記していく。

## 【掘立柱建物 - SB-】

## SB1195 (C区: PLAN 8, PL. 8)

C区調査区の南辺部に位置する、桁行3間、梁間2間の掘立柱建物で、棟筋は北西-南東にとる。柱間寸法は、桁行7尺(210~215cm)、梁間5.5尺(165cm)を測る。柱槽形は楕円形~隅丸長方形の平面形を呈し、底には板石を礎板を置いている。

## 【井戸 - SE-】

## SE50 (176-R区: PLAN 8, PL. 9)

調査区の東隅部で検出した井戸で、掘形は径1.4~1.5mの円形である。中央部には底板を取り除いた曲物(径33~35cm)を三段以上に重ねて井筒としている。曲物の重ね方は下段に位置するに従って径の小さい曲物を配置している。調査を行った時が水位の高い時期であったために湧水がはげしく、井戸底を確認することはできなかった。井戸からは、土師器碗・小皿、瓦器碗などが出土している。

## SE153 (A1-L区: PLAN 8, PL. 9)

調査区の南隅部に位置する井戸で、掘形は径2.5mの円形である。中央上部には、方0.5mを測る井戸枠を長さ60~70cm、径5cm前後の樺材や板材を用いて組まれ、その中央下部には底板を取り除いた曲物(径35~37.5cm)を二段以上に重ねて井筒としている。樺材の内では一本は獣の柄を転用したものである。井戸底は、湧水がはげしくて確認することができなかった。

## SE341 (A-II区: PLAN 9, PL.10)

調査区南半部中央に位置する井戸である。掘形は径2.2~2.5mの円形で、二段掘りになっており、大きさの異なる数頭川錐形を重ねたような形態である。掘形は深さ1.4mで径0.8mと小さくなる。検出面下2.3mの底には、底板を取り除いた曲物(径45cm)を井筒としている。井戸枠などの上部構成物は残っていないが、井筒の0.5m上では板材や細い丸丸の破片が見られることから、これらが樺材

の一部であった可能性がある。井戸底の標高は7.4m。井戸からは、土師器碗・小皿・甕、瓦器碗・鉢、白磁合子杯などが出土している。白磁合子片は、S E 352出土片と同一個体であった。

#### S E 352 (A-II区: PLAN10, PL.11)

調査区東隅、S E 341の南東20mに位置する井戸である。掘形は径1.4mの円形で、底に近づくにしたがって狭くなり、深さ1.2mを測る。このため、断面形は截頭円錐形を逆にした形態である。井戸底には、底板を取り除いた曲物(径42cm)の井筒が残る。井戸底の標高は8.55m。井戸枠などの上部構成物は残っていない。井戸からは、土師器杯・小皿、瓦器碗、滑石製石鍋、白磁合子杯などが出土している。白磁合子は、S E 341出土の白磁合子片と接合した。

#### S E 512 (A-II区: PLAN10, PL.11)

調査区東隅、S E 341の南14mに位置する井戸である。掘形は二段掘りになっており、径の異なる円柱を重ねたような形態である。上面では径3mを測る円形の掘形であるが、深さ1.3mの上部掘形の中央底では径1mと小さくして下段の掘形を掘っている。井戸底から下段の掘形内には、底板を取り除いた径の異なる三個の曲物(径47~63cm)を三段に重ねた井筒が残る。井戸底の標高は7.8m。井戸枠などの上部構成物は残っていないが、最上段の井筒の周囲に幅15~25cmの板材が方80cmであることから、これらが井戸枠になる可能性が高い。井戸からは、土師器小皿・杯・碗・甕、緑釉陶器碗、瓦器碗・鉢、黒色土器碗、須恵器甕、青磁碗、白磁碗などが出土している。

#### S E 516 (A-II区: PLAN10, PL.11)

調査区中央南辺、S E 512の北西10mに位置する井戸である。掘形は1.3m×1.5mの楕円形で、底に近づくにしたがって狭くなり、深さ1.1mを測る。このため、断面形は截頭円錐形を逆にした形態である。井戸底には、底板を取り除いた曲物(径36cm)の外側に一回り大型の曲物(径45cm)を配して二重にした井筒が残る。井戸底の標高は8.75m。井戸枠などの上部構成物は残っていない。井戸からは、土師器小皿・甕、瓦器碗・鉢、黒色土器碗、須恵器甕、青磁小皿、平瓦などが出土している。

#### S E 752 (B区: PLAN11, PL.12)

調査区南半部中央に位置する方形隅柱縦板組の井戸である。掘形は二段掘りになっており、径の異なる円柱を重ねたような形態である。上段の上面では径1.1mを測る円形の掘形であるが、深さ0.35mの上部掘形の中央底では方0.85mの隅丸方形に小さくして下段の掘形を掘っている。井戸底には、径10cmの丸太柱を方0.5mに配し、柱間を径7cmの棒材を椀木として固定し、その周囲に板材を立てた井戸枠と中央底に径39cmの井筒が残る。隅柱にはホゾ溝が彫られていることから、板材を横位に重ねて井戸枠とした可能性もあるして井戸底の標高は9.1m。井戸からは、土師器小皿・杯、瓦器碗などが出土している。

#### S E 811 (B区: PLAN11, PL.12)

調査区中央、S E 752の西17mに位置する井戸で、S E 813・1227・1232の各井戸を壊して作られている。掘形は径3mの円形で、白色粗砂の地面に1mの深さである。井戸底には、底板を取り除いた曲物(径45cm)の上に底板を取り除いた桶(底径40cm・高さ30cm)を重ねた井筒が残る。井戸底の標高は9m。井戸枠などの上部構成物は残っていない。井戸からは、土師器杯・小皿・甕、瓦器小皿・碗、青磁碗、白磁碗などが出土している。

#### S E 813 (B区: PLAN11, PL.12)

調査区中央、S E 811の南1.5mに位置する井戸で、S E 811に壊され、S E 1227の井戸を壊して作られている。掘形は1.2m×1.5mの楕円形で、黄灰色粗砂の地面を掘り込み、1mの深さである。井戸底には、底板を取り除いた曲物(径36cm)二個を二段に重ね、上段曲物の下半部から下位を底板を

取り除いた大型の曲物（径39cm・高さ27cm）を置いて二重にした井筒が残る。掘形内には別の大型曲物の側板が残っている。井戸底の標高は9.1m。井戸枠などの上部構造物は残っていない。井戸からは、土師器甕、瓦器椀などが出土している。

#### SE872（B区：PLAN12, PL.13）

調査区西半部北辺部に位置する井戸である。掘形は径1.3mの円形で、底に近づくにしたがって狭くなり、深さ0.75mを測る。このため、断面形は截頭円錐形を逆にした形態である。井戸底には、底板を取り除いた桶（径57cm）の井筒が残る。桶は、その上部を欠失しているが、底側を下方に配置していたことを知る。井戸底の標高は9.35m。井戸枠などの上部構造物は残っていないが、桶を重ねて構成したものと推定される。井戸からは、土師器杯・甕、青磁碗などが出土している。

#### SE1023（B区：PLAN5）

調査区南半部北辺に位置する井戸で、掘形の一部は調査区外に広がる。掘形は径1.2mの円形で、底に近づくにしたがって狭くなり、截頭円錐形を逆にした形態である。深さ0.5mを測る。井戸底には、篋（径42cm）が残る。このため、井筒として桶を使用していたと考えられる。井戸底の標高は9.6m。井戸枠などの上部構造物は残っていない。井戸からは、土師器小皿が出土している。

#### SE1119（B区：PLAN12, PL.13）

調査区東隅部、SE752の東12mに位置する方形隅柱の井戸である。掘形は方1.3mの隅丸方形を呈し、深さ1.9mを測る。井戸枠は、径10cm前後を測る丸太の隅柱を底面の方0.6m、上面の方0.8mに配し、各柱の間を径3～4cmの棒材を椀木として二段に固定している。隅柱と椀木の接合は、隅柱に3cm×5cmの長方形の穴を彫り、その穴に両端を尖らした椀木を差込ませて固定している。掘形の周囲壁面には、葎と考えられる植物を簾状に編んだ物や柱の間には径3～4cmの棒が配されている。このため、通常は板などが使用されている井戸枠の周囲に簾状の編物を使用したことを知る。井戸底には曲物は残っていない。井戸底の標高は8.2m。井戸からは、土師器小皿・椀・甕、褐釉水注などが出土している。

#### SE1225（B区：PLAN13, PL.14）

調査区東半部中央に位置する井戸である。掘形は0.9m×1.1mの楕円形で、底に近づくにしたがって狭くなり、深さ0.65mを測る。このため、断面形は截頭円錐形を逆にした形態である。井戸底には径49cmの篋だけが残る。井戸底の標高は9.35m。井戸枠などの上部構造物は残っていないが、桶を重ねて構成したものと推定される。井戸からは、土師器小皿・杯・甕、瓦器椀、青磁小皿・碗、褐釉壺などが出土している。

#### SE1227（B区：PLAN11, PL.12）

調査区中央、SE813に東接する位置にあり、SE811・813に先行する井戸である。掘形は、その大半がSE811・813に壊されているために全形を知ることはできないが、残存部から1.6m前後の円形が推定される。黄灰色粗砂の地面を掘り込み、0.7mの深さである。井戸底には、底板を取り除いた曲物（径33cm）を置いて井筒としている。井戸底の標高は9.3m。井戸枠などの上部構造物は残っていない。井戸からは青磁碗などが出土している。

#### SE1232（B区：PLAN11, PL.12）

調査区中央、SE811に北接する位置にある井戸である。SE811築造時に掘形が壊されているために全形を知ることはできないが、残存する掘形から1m×1.5m前後の楕円形が推定される。黄灰色粗砂の地面を掘り込み、0.7mの深さである。井戸底には、井筒に使用されたと考えられる篋（径45cm）だけが残っていた。井戸底の標高は9.2m。井戸枠などの上部構造物は残っていない。

**SE1274 (B区: PLAN5)**

調査区中央部、SE811の北東8mに位置する井戸である。掘形は2.5m×3.2mの楕円形で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がれる。黄褐色砂質土の地面を掘り込み、0.8mの深さである。井戸底中央には、井筒に使用されたと考えられる箍(径66cm)だけが残っていた。このため、桶を重ねて井筒としたことが考えられる。井戸底の標高は9.2m。井戸枠などの上部構造物は残っていない。井戸からは、土師器小皿・椀・甕、瓦器椀、白磁碗などが出土している。

**SE1300 (C区: PLAN13, PL.14)**

調査区東部隅に位置する井戸である。掘形は径1.1mの円形で、壁面は直に立上がる。黄褐色砂質土の地面を掘り込み、0.7mの深さである。井戸底中央には、井筒に使用されたと考えられる箍(径66cm)だけが残っていた。このため、桶を重ねて井筒としたことを知る。井戸底の標高は9.55m。井戸枠などの上部構造物は残っていない。井戸からは須恵器杯、土師器小皿・椀・甕、青磁碗、白磁碗、褐釉合子蓋などが出土している。

**SE1302 (C区: PLAN13, PL.14)**

調査区中央南辺で検出した井戸で、南半分は調査区外に広がる。掘形は径2.8mの円形で、白色粗砂の地面に1.3mの深さである。井戸底には、曲物と桶とを重ねた井筒が残る。井筒は、底板を取り除いた曲物(径35cm・器高24cm)の外側に一回り大きい曲物(径39cm・器高13cm)を上端部の高さを同じくして置き、その上に底板を取り除いた桶(底径37cm・広径42cm・器高33cm)を正置の状態を重ねる。さらに、別の底板を取り除いた大型の曲物(径42cm・器高25cm)で曲物と桶との間を囲むようにしている。三個の曲物口縁には径3~4mm木釘がそのまま残っている穴が認められることから、これらの曲物が転用品であり、さらに正置の状態で置かれていることを知る。桶は幅6~8cm、長さ33cm、厚さ8mmの16枚の板と二条の箍からなっている。痕跡から、桶の上には桶を重ねていた可能性が高い。井戸底の標高は8.9m。井戸からは、土師器小皿・椀・甕、瓦器椀・鉢、青磁碗などが出土している。

**SE1307 (C区: PLAN14, PL.15)**

調査区中央南辺、SE1302の北東7mに位置する井戸である。掘形は方2.3mの隅丸方形で、底に近づくにしたがって狭くなり、断面形は半円形である。深さ1.2mを測る。井戸底には、底板を取り除いた径を同じくする三個の曲物を三段に重ねた井筒が残る。下段曲物は径39cm・器高18cm、中段曲物は径39cm・器高21cm、上段曲物は上部を欠き、径39cm・残存高15cmを測る。上段と中段の曲物口縁は接しているが、中段と下段の曲物口縁の間には5cm程の間隔が空いている。しかし、この空間を囲むように一条の箍(径46cm)が残っていることから、中段と下段の曲物の間に桶が使用されていた可能性が高い。井戸底の標高は9.05m。井戸からは、土師器小皿・杯・椀・支脚、瓦器椀、青磁碗、白磁碗などが出土している。

**SE1356 (C区: PLAN14, PL.15)**

調査区北隅、SE1300の西8mに位置する井戸である。掘形は1.6m×2.1mの楕円形で、壁面は井筒の位置する南西部は直に立ち上がるのに対し、その他の面は緩やかに弧を描くように立ち上がる。深さ0.7mを測る。井戸底南西辺には、底板を取り除いた曲物の井筒が設置されている。曲物は径51cm・器高33cmを測る。井筒を径2cm~4cmの竹で65cm×85cmの楕円形状に連続的に囲み、曲物口縁と同じ高さの間には小石を敷き重ねている。また、曲物を中心にして方55cm×60cmの位置には、径4cm~5cmで先の突った竹が打ち込まれている。このことから、上部の井戸枠は隅柱を太い竹、周囲を編物で築いていたことが考えられる。井戸底の標高は9.5m。井戸からは、土師器小皿・杯・甕、瓦器椀、青磁碗、白磁碗などが出土している。

## 【土坑 -SK-】

## SK187 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区中央に位置する土坑で、長辺2.5m、短辺2.1mの隅丸長方形の平面形を呈する。深さは35を測る。土師器小皿・杯・椀・甕、須恵器杯、瓦器椀・鉢、青磁小皿・碗、白磁碗、平瓦などが出土している。

## SK245 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区中央部南辺に位置する土坑で、長辺1.5m、短辺1.1mのやや不整形の隅丸方形の平面形を呈する。深さは20を測る。土師器小皿・杯・甕、瓦器椀、青磁碗などが出土している。

## SK250 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区中央部北辺に位置する土坑で、長辺3.1m、短辺2.1mの隅丸方形の平面形を呈する。深さは35cmを測る。土師器小皿・杯・甕、須恵器杯・甕、瓦器椀・鉢、青磁碗、白磁碗・合子、滑石製石鍋、丸瓦などが出土している。

## SK263 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区中央部に位置する土坑で、北辺部を試掘トレンチで欠き全形を知りえないが、長辺3.6m、短辺2.4mの不整形な長方形の平面形を呈する。深さは20cmを測る。土師器小皿・杯・椀、瓦器椀・鉢、滑石製石鍋などが出土している。

## SK305 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区西辺部に位置する土坑で、長径2.1m、短径1.5mの楕円形平面形を呈する。深さは48cmを測る。土師器小皿・椀・甕、瓦器椀・鉢、須恵器甕、青磁碗、白磁碗、平瓦などが出土している。

## SK306 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区西辺部、SK305の南4mに位置する土坑で、北辺部をSK307・310に壊されている。土師器小皿・杯・椀・甕、須恵器杯・甕、瓦器椀・鉢、越州窯系青磁碗、青磁小皿・碗、滑石製石鍋などが出土している。

## SK310 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区西辺部、SK306に西接する土坑で、北辺部をSK307に壊されている。土師器甕、瓦器椀などが出土している。

## SK312 (A-I区:PLAN3, PL.16)

調査区西辺部に位置する土坑である。土師器小皿・杯・椀・甕、緑釉陶器杯、瓦器椀、須恵器甕、越州窯系青磁碗、白磁碗などが出土している。

## SK317 (A-I区:PLAN15, PL.16)

調査区西半部中央に位置する土坑で、平面形は1.7m×1.8mの楕円形を呈する。深さは2.2mを測る。底は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。土師器小皿・椀・杯、須恵器甕、内黒椀、瓦器椀、平瓦、羽口、砥石、などが出土しているが、特に中層から上層にかけて集中的に出土している。井戸の可能性も残る。

## SK344 (A-II区:PLAN4, PL.17)

調査区西半部中央、SK347の南2mに位置する土坑である。径1.2mの円形の平面形を呈する。深さは0.8mを測る。土師器杯・椀、須恵器甕などが出土している。

## SK346 (A-II区:PLAN16, PL.17)

調査区東半部中央に位置する土坑で、平面形は3.8m×3.3mの不整形な楕円形を呈する。深さは2.2mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかな直線的な斜面を呈する。埋土上層には黒色の厚い藁灰層が認

められ、この土層から多量の土師器小皿・灯明皿・杯・椀・甕、瓦器椀、青磁碗、白磁碗などが出土している。土坑の底面からは土師器杯・甕、下駄、編錘などが出土している。

**SK347** (A-II区:PLAN16, PL.17)

調査区東半部中央、SK346の北西5mに位置する土坑で、平面形は方2.5mの隅丸方形を呈する。深さは1.1mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。埋土上層には黒色の厚い炭灰層が認められ、この土層から多量の土師器小皿・灯明皿・杯・椀・甕、須恵器甕、瓦器椀、青磁碗、白磁碗、滑石製石鍋などが出土している。土坑の底面からは土師器杯・甕、木槌、未製品下駄などが出土している。

**SK350** (A-II区:PLAN17, PL.18)

調査区東半部中央に位置する土坑で、平面形は径1.4mの円形を呈する。深さは0.8mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。箆、菅傘などが出土している。

**SK353** (A-II区:PLAN4, PL.18)

調査区東辺に位置する土坑で、平面形は径0.7mの円形を呈する。深さは1.8mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。土師器小皿・椀、須恵器甕、青磁碗、白磁碗などが出土している。

**SK354** (A-II区:PLAN4)

調査区東辺部中央、SK350の南5mに位置する土坑で、溝上に細長い平面形を呈する。土師器小皿・杯・椀・甕、瓦器鉢、青磁碗、白磁小皿・碗、滑石製石鍋などが出土している。

**SK355** (A-I区:PLAN17, PL.18)

調査区中央部南辺に位置する土坑で、平面形は径1.5mの円形を呈する。深さは0.75mを測る。底から壁面にかけては緩やかな弧を描きながら立ち上がる。土師器小皿・杯・椀、須恵器甕、瓦器椀、朝鮮半島産もしくは越州窯系青磁碗、平瓦などが出土している。

**SK360** (A-I区:PLAN3, PL.18)

調査区中央部、SK263の南東4mに位置する土坑で不整形な平面形を呈する。土師器小皿・杯・椀、須恵器甕、内黒椀、瓦器椀、越州窯系青磁碗、滑石製石鍋、平瓦などが出土している。

**SK528** (A-II区:PLAN4, PL.18)

調査区東半部中央に位置する土坑で、平面形は径2.4mの円形を呈する。深さは0.95mを測る。底は平坦で、壁面は直線的な斜面を呈する。土師器小皿・杯・甕、須恵器甕、瓦器椀、青磁碗、白磁小皿・碗・壺、滑石製石鍋などが出土している。

【土 墳 墓 - SK-】

**SK421** (A-I区:PLAN18, PL.19)

調査区の中央部南辺に位置する土墳墓であるが、木棺墓の可能性もある。墓塚は長辺110cm・短辺80cmの隅丸長方形で、長軸を北東-南西に持って掘られ、壁面はやや傾斜を有する。深さ30cm程が残る。蓋材などは確認できなかった。墓塚内には、棺材と副葬品の白磁碗が遺り、人骨は認められなかった。墓塚底には、幅10cm・長50cm・厚2~3cmの4枚の板を墓塚軸に直行するように15cm~20cm間隔で置き、その上に幅2~3cmの薄い板を全面に敷き詰めている。4枚の板が位置する部分は他の面より下がった位置にあるが、これが意図的に掘り下げたものか、自然に下がったものかは不明。副葬品の白磁碗は、この敷き詰めた板上に位置する別の薄板上に正置した状態で出土した。

### S K 769 (B区: PLAN19, PL.20)

調査区の西半部中央に位置する馬の土壌墓である。墓壇は、長辺1.9m×短辺1.2mの隅丸長方形を呈し、さらに南部に掘り足し部分がある。北東-南西方向に長軸を有し、深さ0.2mである。墓壇内には頭を南に向け、背を南東にして右側を上にして横臥し、2頭の馬が上、下に重なった状態で検出された。下に位置する馬は頭部からはほぼ全身の骨格が遺り、上に位置する馬は胸部と左側の後肢以外は遺っていない。本来は2頭とも全身が遺っていたと考えられるが、周辺の状況から削平を受けた可能性が高い。

### S K 1295 (C区: PLAN20, PL.21・22)

調査区の北半部中央に位置する土壌墓である。墓壇は長径110cm・短径80cmの楕円形で、長軸を北東-南西に持って掘られ、壁面はやや傾斜を有する。深さ30cm程が残る。蓋材などは確認できなかった。墓壇内には、一体の男性成人骨と副葬品の龍泉窯青磁碗が遺っていた。人骨は、頭を北東にして、身体を東に向ける左側臥屈葬で埋葬されていた。副葬品は、右肩の上部位置に方27cm～30cmの薄板を置き、その上に置いている。

### S K 1345 (C区: PLAN21, PL.23)

調査区の西半部中央、S K 1295の南西7mに位置する木棺墓である。墓壇は1.2m×1.9mの隅丸長方形、深さ18cm程が残る。木棺は幅58cm×長さ138cmを測り、墓壇のほぼ中央に小口を南北方向にして位置する。板材は粘土化していたが、小口の長さが棺幅より僅かに広いことや地山面に板材痕跡が残っていることから、棺は組合式と考えるのが妥当である。また、棺内の人骨上で薄い板が確認されており、蓋を板でしている。棺内には、性別不明の一体の人骨と副葬品の龍泉窯青磁碗、土師器小皿が遺っていた。人骨は、頭を北にして、身体を西に向ける右側臥屈葬で埋葬されていた。副葬品は頭辺部、棺の北西隅に集中していた。

## (3) 遺物 (Fig. 2～115, PL.24～41)

### A. 土師器・陶磁器・石製品等

#### [175-L区] (Fig. 2・3, PL.24)

3は土師器碗で内面は黒色。高台の核合部に櫛目で凹凸を施し、粘土紐を貼り付ける。1は龍泉窯青磁碗で、S D 02出土。6はS D 04出土の越州窯系青磁碗。7・8・10は遺構検出面出土の龍泉窯青磁碗。9は越州窯系青磁の壺の底部で、遺構検出面出土。

#### [176-R区] (Fig. 4, PL.24)

17は越州窯系青磁碗。底部は平底で中央部を底上げし、周縁を畳付とする。内面にはくすんだオリーブ色の釉と日土が残る。16は土師器小皿。底部の切離しは篋切り。

#### [176-L区] (Fig. 5, PL.24)

12・13は土師器環。口縁は直線的にやや外傾しながら立ち上る。底部の切離しは篋切り。14は須恵器環。15は越州窯系青磁壺。口縁はやや内傾しながら立ち上り、端部は肉厚で日土が残る。口径8cm。

#### [177-R区] (Fig. 6・7, PL.24・25)

35・40・41は緑釉陶器の環である。35・40は灰色～暗青灰色の胎土に暗緑色の釉を薄く内外面に施している。40の器面には丁寧な艶磨きが施され、見込には重焼の跡が残る。41は底部に糸切り痕が残る。Fig. 7の遺物は全て越州窯系青磁の碗で、包含層からの出土である。36は輪花碗で、口縁部は強く外反し、端部は丸くおさま、刻みをもつ。他の碗は、高台の整形技法の違いにより3種に分類される。平底で中央部を底上げして周縁を畳付とし、縁は無調整(39)。平底で中央部を底上げし、底面と縁



Fig. 2 175-L区溝出土遺物(1/3)

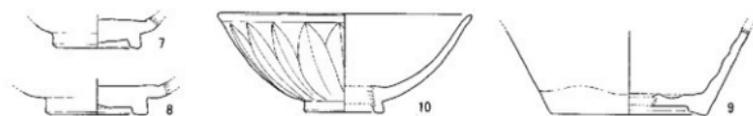


Fig. 3 175-L区遺構映出面・包含層出土遺物(1/3)

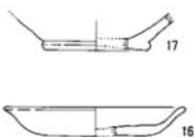


Fig. 4 176-R区出土遺物(1/3)

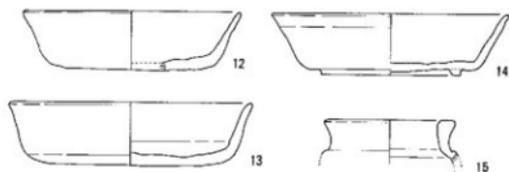


Fig. 5 176-L区出土遺物(1/3)

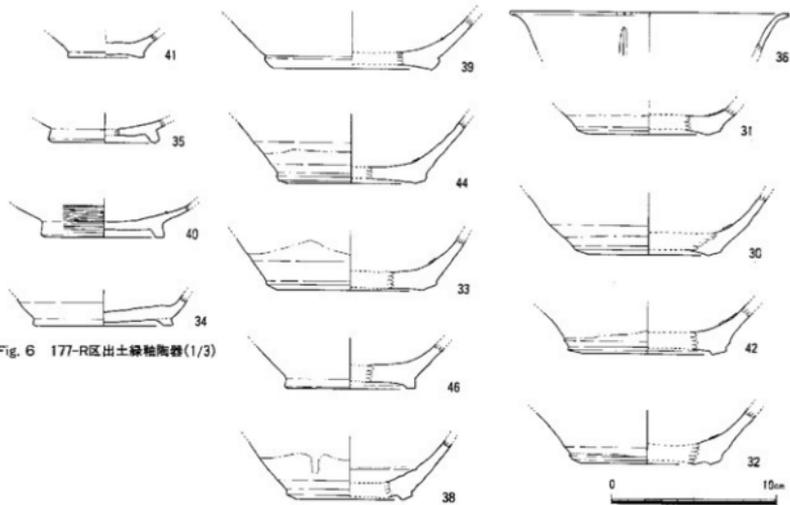


Fig. 6 177-R区出土緑釉陶器(1/3)

Fig. 7 177-R区出土越州窯系青磁(1/3)



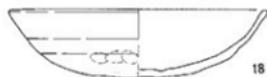


Fig. 8 177-L区SK131出土遺物(1/3)

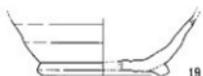


Fig. 9 177-L区SK134出土遺物(1/3)

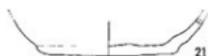


Fig. 10 177-L区SD137出土遺物(1/3)

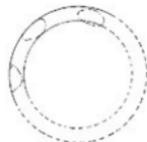
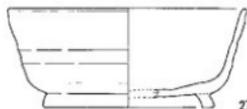


Fig. 11 177-L区透模検出面出土遺物(1/3)



Fig. 12 A1-R区SK157出土遺物(1/3)

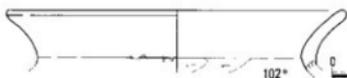


Fig. 13 A1-R区SK158出土遺物(1/4)

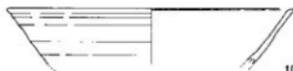
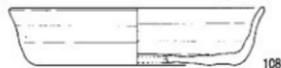


Fig. 14 A1-R区包含層出土遺物(1/3)

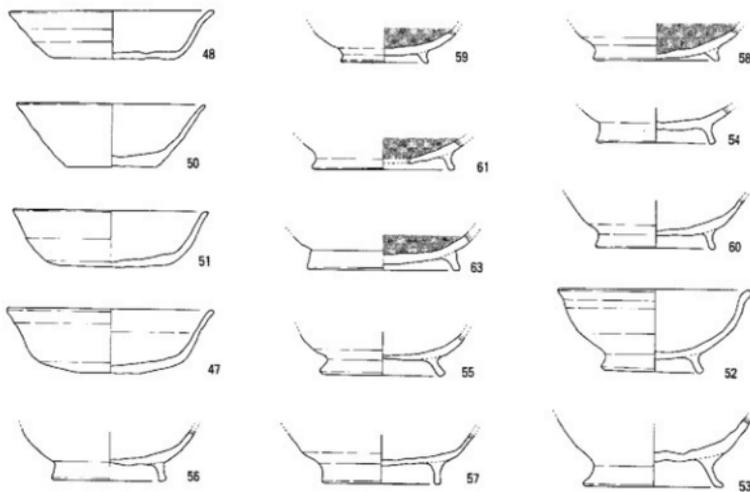


Fig. 15 A1-L区SD154出土遺物(1/3)



Fig. 16 A1-L区SD154出土緑釉陶器(1/3)

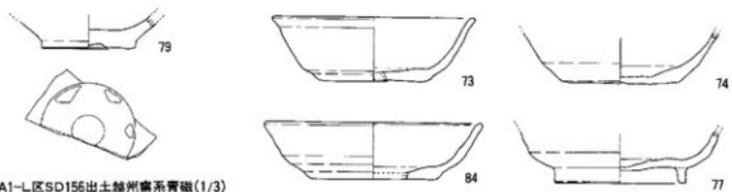


Fig. 17 A1-L区SD156出土越州窯系青磁(1/3)

Fig. 18 A1-L区SK155出土遺物(1/3)



Fig. 19 A1-L区SK155出土越州窯系青磁(1/3)



Fig. 20 A1-L区SK155出土緑釉陶器(1/3)

Fig. 21 A1-L区包含層出土緑釉陶器(1/3)

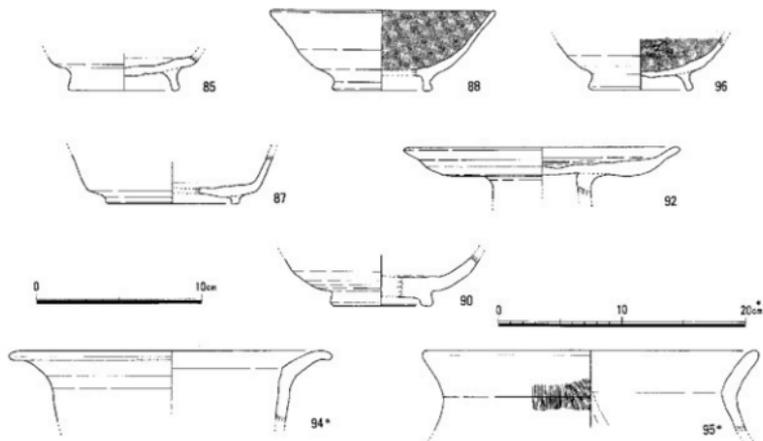


Fig. 22 A1-L区包含層出土遺物(1/3・1/4\*)

は篋削り調整で周縁を面取 (30~33・44)。削り出し調整で輪高台 (38・42・46)。施釉および焼成方法の違いでは2種に分かれる。46は器面全面に施釉し、壺付を拭き取り。底部に目土が残る。他の碗は、くすんだオリーブ色~灰色の釉薬を内面全面と体部外面上半部にだけ施す。また、壺付および見込には目跡もしくは目土が残る。

[177-L区]

S K 131 (Fig. 8, PL.25)

18の底部は丸底で、口縁は外傾しながら立上り、端部は丸くおさめている。底部の切離しは篋切り。

S K 134 (Fig.9)

19の環は胎土に暗赤褐色の砂粒を多く含む。20は焼成温度が低かった須恵器の環。高台は粘土紐の張付けによる。

S D 137 (Fig.10)

21は平底で、口縁は外傾しながら立ち上がる。底部の切離しは篋切り。22は内面には磨きが施されている。外面は灰褐色、内面は黒色。

遺構検出面 (Fig.11, PL.25)

23は土師器環で、口縁は外傾しながら直線的に立ち上がる。底部の切離しは篋切り。27は須恵器環で、口縁は僅かに外傾するが直に立上り、端部は丸くおさめている。28は越州窯系青磁の碗である。肉厚の体部、口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は平底であるが、周縁を高くして壺付とする。周縁部は篋削りによる面取調整。くすんだオリーブ色の釉薬を青灰色の胎土の内面全面と体部外面上半部に施す。見込と壺付には、それぞれ7か所の目跡もしくは目土が残る。

[A1-R区]

S K 157 (Fig.12.)

98~100は須恵器の環と蓋である。100の端部は下方に屈曲し、断面形は三角形をなす。

## S K 158 (Fig.13)

102は土師器の甕で、口縁部は体部から「く」の字状に折れ曲がり、端部は横ナデにより丸く仕上げられる。外面は刷毛目調整、内面は篋削りによる。

## 包含層 (Fig.14)

103は緑釉陶器の環で、暗青灰色の胎土に暗緑色の釉を薄く内外面に施している。器面には丁寧な篋磨きが施され、見込には重焼の跡が残る。104・105は白磁の碗である。口縁端部が、104は外側に先細るのに対し、105は上方に先細る。その他に、褐釉水注の破片が出土している。

## 〔A1-L区〕

## S D 154 (Fig.15-16, PL.25・26)

50は土師器の環で、胎土には赤褐色の砂粒を多く含む。口後に対して底部径は小さい。口縁は直線的に外傾しながら立ち上り、端部は丸く仕上げられる。58・59は内面に篋磨きを施し、黒色にいぶいている。65～67は緑釉陶器の環で、胎土は灰色を呈し、器面全面に暗緑色の釉を施している。体部内外面に丁寧な篋磨きを施す。見込にはいずれも重焼の跡が残る。この他に移動式甕、越州窯系青磁の碗・壺、凸面に斜格子印目が残る粘土板桶巻作りによる平瓦も出土している。

## S D 156 (Fig.17)

79は蛇の日高台の越州窯系青磁の碗である。肉厚の体部、口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は篋削りによる調整を施し、中央部を径2cmの小円状に削り、蛇の日高台とする。くすんだオリープ色の釉薬を灰色の胎土の内面全面と体部外面上半部に施す。壺付には目跡および目土が残る。

## S K 155 (Fig.18・19・20)

73・74・77・84は土師器の環と碗である。全ての底部の切離しは篋削りによる。83は越州窯系青磁の碗である。口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は平底であるが、周縁を高くし、中央部を底上げして壺付とする。底部、周縁部は横ナデ調整。胎土は暗青灰色を呈し、黄色を帯びたオリープ色の釉薬を内面全面と体部外面上半部に施す。見込と壺付には目跡もしくは目土が残る。81も越州窯系青磁の碗である。肉厚の体部、口縁部が直線的に外傾しながら立ち上り、端部は丸く仕上げられる。平底で中央部を底上げして壺付とし、底部周縁を篋削りによる面取調整する。胎土は灰色を呈し、くすんだオリープ色の釉薬を内面全面と体部外面上半部に施す。見込と壺付には目跡もしくは白色の目土が10～12か所に残る。82は緑釉陶器の碗である。体部は丸味を持ち、口縁は外傾しながら立ち上がる。胎土は暗青灰色を呈し、器面全面に暗緑色の釉を施している。体部内外面に丁寧な篋磨きを施している。底部の切離しは篋削りによる。高台は粘土紐の張付けによる。

## 包含層 (Fig.21・22, PL.26)

86・89は緑釉陶器の碗である。86は胎土は灰色を呈し、底部も含む器面全面に暗緑色の釉を施している。体部内外面に丁寧な篋磨きを施す。見込には重焼の跡が残る。89は胎土は青灰色を呈し、体部内外面に濃緑色の釉を施している。現状でも器面に光沢を有する。体部内面にだけ丁寧な篋磨きを施す。見込には重焼の跡が残る。85・88は土師器の碗で、口縁は外傾しながら直線的に立ち上がる。胎土には長石・石英砂粒を多く含む。87は須恵器の環で、口縁は直に立ち上がり、端部は先細。92は土師器の高環で、脚部を欠く。口縁は外傾しながら立上る。底部は篋削り調整を行う。胎土には赤褐色砂粒を多く含む。96は体部内面に細かい篋磨きを施し、黒色。90は青磁の碗で、暗青灰色の胎土。底部から体部下半部は削り調整している。濃いオリープ色の釉薬を壺付と底部以外の全面に施している。高台は削り出しによる。この他に、越州窯系青磁の輪花碗、須恵器の甕、平瓦、白磁の碗、龍泉窯系青磁の碗などが出土している。

## 〔A 区〕

## S D 197 (Fig. 23)

127は白磁の碗で下半部露胎。見込の境には沈線を施す。胎土は乳灰色で、釉は灰色。

## S D 218 (Fig. 24, PL. 26)

129は土師器の小壺。丁寧な仕上げ。128は越州窯系青磁の碗で、口縁部が外傾しながら立上る。底部は平底であるが、中央部を底上げし、沈線を巡らして畳付とする。一見は高台風である。底部、口縁部は横ナテ調整。胎土は暗セピア色を呈し、黄色を帯たオリーブ色の釉薬を内面全面と体部外面上半部に施す。見込と畳付には目跡もしくは白色の目土が残る。

## S D 246 (Fig. 25, PL. 26)

133は輪高台の越州窯系青磁の碗である。肉厚の体部、口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は削り出しにより輪高台とする。胎土は青灰色を呈し、灰色がかったオリーブ色の釉薬を薄く器面全面に施す。畳付の釉の除去の削りは不十分である。目跡および目土は認められない。134は白磁の碗で、口縁玉緑をなすが薄い。釉は黄色がかった灰色。

## S D 247 (Fig. 26)

136は土師器の高台付皿である。135は土師器の碗である。

## S D 333 (Fig. 27, PL. 26)

282は土師器の碗。281・282は土師器の環で、丁寧な磨きを体部内外面に施す。284は器面全面黒色の黒色土器の碗である。底部外面には篋記号が。286は青磁の碗で、体部外面には磨削、内面は無文。胎土は青灰色、釉はオリーブ色を呈する。体部の下半は露胎。287越州窯系青磁の碗である。口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は削り出しにより低い輪高台とする。胎土は青灰色を呈し、灰色がかったオリーブ色の釉薬を薄く器面全面に施す。畳付の釉の除去は削り。見込と畳付には白色土の目跡もしくは目土が残る。288～290は白磁の碗。289・290は口縁の玉緑が折返して断面が三角形。釉は灰色がかったオリーブ色。体部外面下半は露胎。288は高台が露胎。施釉後に見込の釉を輪状に削り取り、重ね焼している。釉は青みがかった灰色。

## S D 434 (Fig. 28)

236・237は須恵器の環。236は口縁が外傾しながら直線的に立ち上り、端部は丸くしあげる。

## S E 341 (Fig. 29, PL. 27)

291は土師器の小皿で、底部の切離しは篋切りによる。292・293は黒色土器の碗で内面は黒色。底部は丸みを持ち、口縁は外傾しながら立ち上がり、端部は外反する。体部内面には幅の広い篋による磨き調整を施す。295は白磁合子の杯。外面全面に施釉した後、体部の釉を削る。胎土は白色、釉はガラス質で薄い緑がかった透明色。S E 352出土の破片と接合。

## S E 352 (Fig. 30, PL. 27)

481～483は土師器の小皿で、底部の切離しは篋切りによる。481は灯明皿。484は黒色土器の碗で、口縁は外傾しながら立ち上がり、端部はやや外反する。器面内外面は黒色で、粗い磨きが施されている。485は白磁合子の杯。見込には小杯との接合痕が残る。S E 341出土の破片と接合。

## S E 512 (Fig. 31～33, PL. 27)

506～509は土師器の小皿で、底部の切離しは篋切りによる。512～514は土師器の環で、体部は丸みを持ち、口縁は外傾しながら立ち上がる。端部は外反する。内面は篋とは異なる工具による磨き調整を施す。515も口縁は外傾しながら立ち上がる。端部は外反する。内面は篋とは異なる工具による磨き調整を施す。519・521は黒色土器で、器面の内外面に磨きを施す。519は高台端部が外反するの



Fig. 23 A-I区SD197出土遺物(1/3)

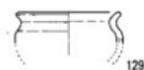


Fig. 24 A-I区SD218出土遺物(1/3)



Fig. 25 A-I区SD246出土遺物(1/3)

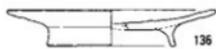


Fig. 26 A-I区SD247出土遺物(1/3)

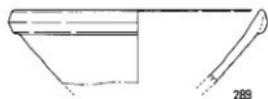
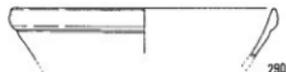
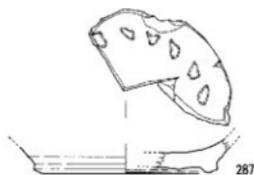
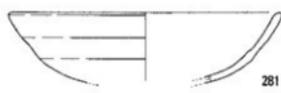
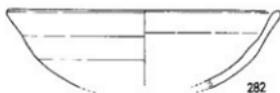


Fig. 27 A-I区SD333出土遺物(1/3)

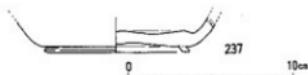


Fig. 28 A-II区SD434出土遺物(1/3)

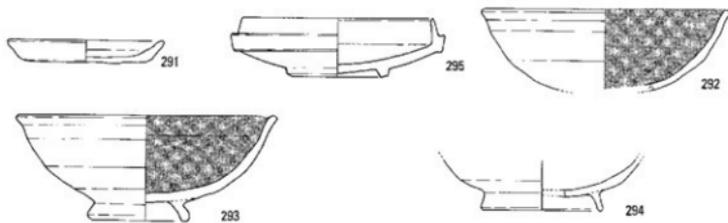


Fig. 29 A-II区SE341出土遺物(1/3)

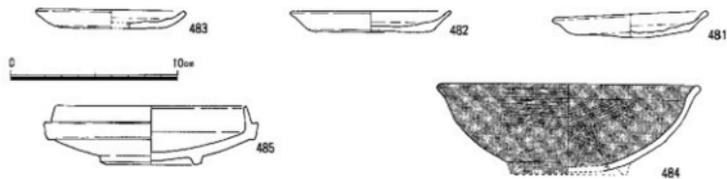


Fig. 30 A-II区SE352出土遺物(1/3)

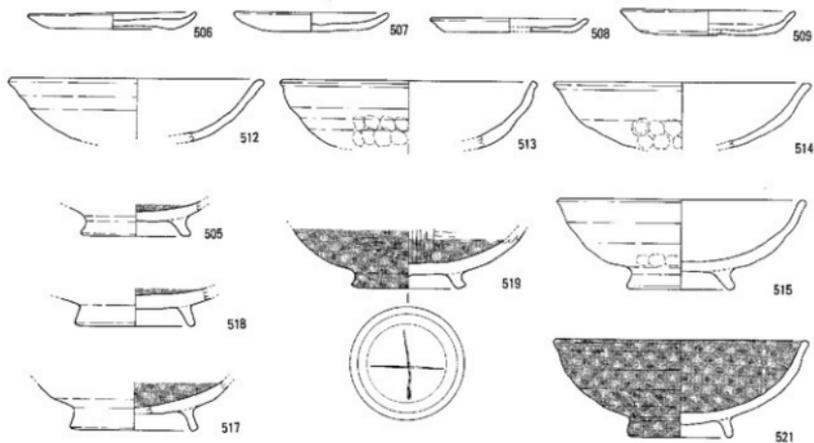


Fig. 31 A-II区SE512出土遺物(1/3)

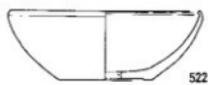


Fig. 32 A-II区SE512出土越州麻系青磁(1/3)

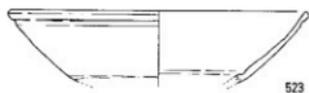


Fig. 33 A-I区SE512出土白磁(1/3)

対し、521は直立的である。522は越州窯系青磁の碗で、平底の底部から体部は外傾しながら立ち上がり、口縁端部は内湾する。底部は中央を底上げして畳付けとする。胎土は茶灰色を呈する。オリーブ色の釉を器面全面に施し、底部は露胎。目土が底部に残る。523は白磁の碗で、体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部には幅の狭い玉縁。見込との境には沈線を描く。淡い緑がかかった灰色の釉を施し、体部下半は露胎。この他に緑釉緑彩の碗が出土している。

**S K 169・171・172・174・179** (Fig.34, PL.28)

109は土師器碗で、底部に丸味を持つ。体部内外面には粗い磨きを施している。110は内面だけ黒色の黒色土器で、体部内外面には粗い磨きを施している。111は土師器杯で、底部の切離しは糸切りによる。112~114は土師器小皿で、底部の切離しは糸切りによる。113は胎上に金雲母を多く含む。

**S K 180** (Fig.35)

117は黒色土器の碗で、内面は黒色、器面調整は不明。

**S K 187** (Fig.36, PL.28)

119は同安窯系青磁の平底皿で、広い見込から口縁が外傾しながら立ち上がる。見込には櫛描を施す。釉は灰色がかかったオリーブ色で、体部下半は露胎。底部には墨書がのこる。120・123は白磁の碗。121・122は龍泉窯系の青磁碗。121の内面には片切彫りの蓮花折枝文を施す。釉はガラス質で厚く、濃いオリーブ色を呈する。体部内外面に施釉の後に、畳付けの釉を削る。122の内面は無文。外面に蓮弁を彫刻。釉はガラス質で厚く、濃いオリーブ色を呈する。

**S K 188** (Fig.37)

124は土師器小皿で、底部の切離しは糸切りによる。125は白磁の碗で、体部下半は露胎。施釉後に釉を輪状に削り取り、重ね焼している。釉は黄色がかかった灰色。126は越州窯系青磁の鉢。

**S K 245** (Fig.38)

130・131は土師器の小皿・杯で、底部の切離しは糸切りによる。

**S K 250** (Fig.39)

140は同安窯系青磁の碗。釉は薄く、濃いオリーブ色を呈する。141は白磁の碗で、下半部露胎。

**S K 260** (Fig.40)

143の瓦器碗の体部内外面には幅2mmの寛磨きを粗く施している。口縁端部付近のみ黒色。

**S K 263** (Fig.41, PL.28)

144は青磁の碗で、無文。145は瓦質の鉢。146は褐釉の壺。口縁は内傾しながら立上り、端部は直に立つ。釉は剥離している。

**S K 305** (Fig.42)

148は土師器の小皿で、底部の切離しは糸切りによる。149は白磁の碗で下半部露胎。見込の境には沈線を描く。胎土は乳灰色で、釉は灰色。

**S K 306** (Fig.43, PL.28)

151は土師器の杯で、底部の切離しは糸切りによる。152は越州窯系青磁の碗で、口縁部が外傾しながら立上る。胎土は青灰色。釉葉は剥離して不明。153は龍泉窯系の青磁碗。体部内面と見込には片切彫りの蓮花折枝文を施す。外面には櫛描と片切彫りによる蓮弁を施文。釉はガラス質で厚く、青みがかかった淡いオリーブ色を呈する。体部内外面に施釉の後に、畳付けの釉を削る。154は無釉陶質の大型の鉢である。体部は直線的に外傾しながら立上り、口縁部は内側に折れ曲がり直立する。端部は平坦で、内側に2条の凸帯が巡る。

## S K307 (Fig. 44, PL. 28)

156は同安窯系青磁の平底皿で、広い見込から口縁が外傾しながら立ち上がる。見込には櫛溝を施す。釉は青みがかった灰色で、底部は露胎。157・158は青磁の碗である。158は外面に片切彫による蓮弁を彫刻。内面は無文。釉は灰色がかったオリーブ色を呈する。159は土師器の鍋で、外面には煤が厚く付着している。160は滑石製石鍋の底部。褐釉壺も出土している。

## S K308 (Fig. 45, PL. 28)

161～165の土師器環・小皿の底部の切離しは糸切りによる。166は白磁の碗。169は砥石、170は滑石製品で土器の研磨用品と考えられる。

## S K310 (Fig. 46, PL. 28)

172は土師器の鍋で、外面には煤が厚く付着している。外面は刷毛目調整。

## S K311・313 (PL. 28)

173は変岩の砥石。175は砂岩製の砥石。

## S K315 (Fig. 47, PL. 28)

178は黒色土器の碗で内外面とも黒色で、丁寧な篋磨きを内外面に施す。179～181は黒色土器の碗で、体部内面だけ黒色。粗い篋磨きを内面に施す。182は越州窯系青磁の碗である。薄い口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は平底であるが、周縁を高くし、中央部を底上げして畳付とする。底部、周縁部は削り調整し、周縁は面取り。胎土は暗青灰色を呈し、灰色を帯たオリーブ色の釉薬を内面全面と体部外面上半部に施す。見込と畳付には16ヶ所の目跡もしくは目土が残る。183・184は緑釉陶器の碗である。胎土は灰色を呈し、底部も含む器面全面に薄い暗緑色の釉が残る。体部内外面に篋磨きを施す。見込には重燒の跡が残る。

## S K317 (Fig. 48, PL. 29)

187は土師器の環で、底部の切離しは篋切りによる。188・191は土師器の碗で、高台は外側に開き、体部内面は磨きを施す。189・190は黒色土器の碗で、体部内面だけ黒色。緻密な篋磨きを内面に施す。192は黒色土器の碗で器面全面が黒色で、丁寧な篋磨きを体部内外面に施す。

## S K321 (Fig. 49)

194・195は土師器の碗。体部内面には磨きを施す。196は黒色土器の碗で、体部内面だけ黒色。粗い篋磨きを内面に施す。197は黒色土器の碗で器面全面が黒色で、丁寧な篋磨きを体部内外面に施す。

## S K325 (Fig. 50)

199は土師器の碗。高台は外に開く。胎土に赤褐色砂粒を多く含む。200は青磁の碗。肉厚で、口縁は外傾しながら立上り、端部は丸くおさめる。灰白色の胎土に、暗いオリーブ色の釉を施している。

## S K328 (Fig. 51, PL. 29)

208・269～273は土師器小皿、274は環で、いずれも底部の切離しは糸切りによる。275～280は白磁の碗である。275の高台は露胎。施釉後に見込の釉を輪状に削り取り、重ね焼している。釉はオリーブ色がかった灰色。276の高台は直立ぎみに削り出す。釉は黄色がかった灰色で、体部下半は露胎。277・278は口縁に折返して断面が三角形の玉縁。釉は灰色がかったオリーブ色。体部外面下半は露胎。279・280は口縁が直線的に外傾しながら立ち上がる。釉は灰色で、体部外面下半は露胎。

## S K346 (Fig. 52～54, PL. 30)

302～333・336・339・340・967は土師器の小皿で、全て底部の切離しは篋切りによる。341～353・356～361・363・365は土師器の環で、底部は丸みを持ち、口縁は外傾しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げられる。体部内面は磨き調整を施す。全ての底部には、篋切りによる切離し痕跡と板目片痕が残る。

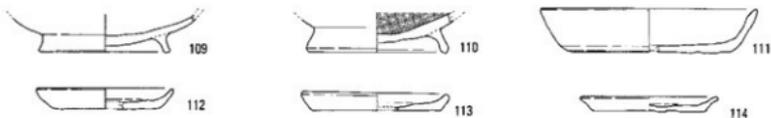


Fig. 34 A-I区169・171・172・174・179出土遺物(1/3)



Fig. 35 A-I区SK180出土遺物(1/3)

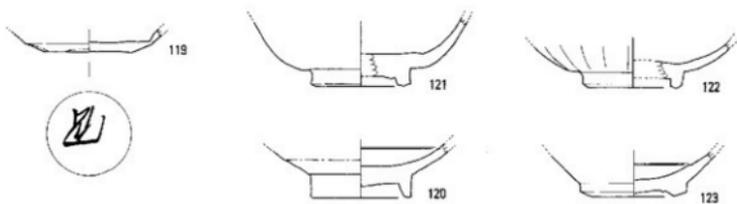


Fig. 36 A-I区SK187出土遺物(1/3)



Fig. 37 A-I区SK188出土遺物(1/3)

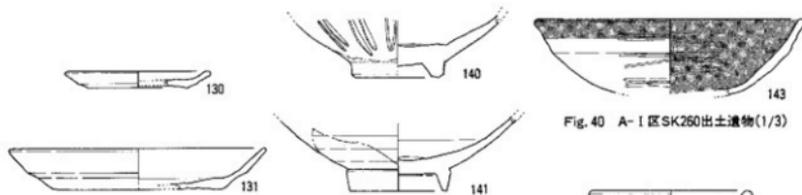


Fig. 38 A-I区SK245出土遺物(1/3)

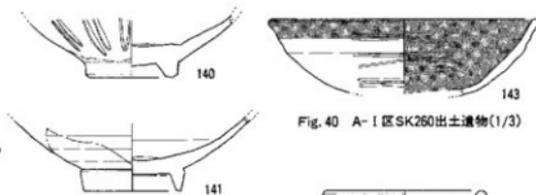


Fig. 39 A-I区SK250出土遺物(1/3)

Fig. 40 A-I区SK260出土遺物(1/3)

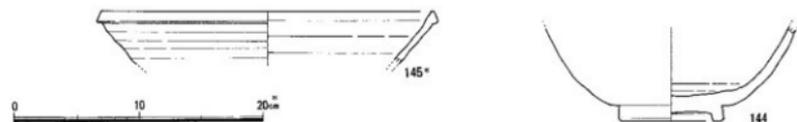


Fig. 41 A-I区SK263出土遺物(1/3-1/4\*)

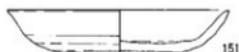


148

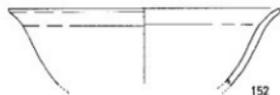


149

Fig. 42 A-I 区SK305出土遺物(1/3)



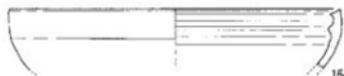
151



152

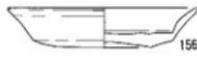


153

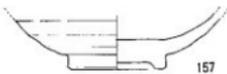


154\*

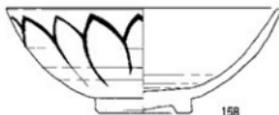
Fig. 43 A-I 区SK306出土遺物(1/3・1/4\*)



156



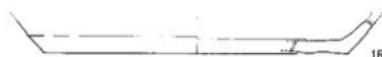
157



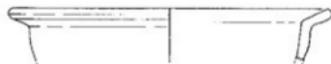
158



10cm



160\*

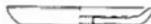


169\*

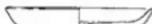
Fig. 44 A-I 区SK307出土遺物(1/3・1/4\*)



161



162



163



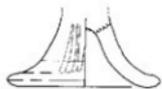
164



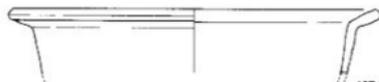
165



166

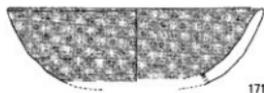


168



167\*

Fig. 45 A-I 区SK308出土遺物(1/3・1/4\*)



171



172\*



10

20cm

Fig. 46 A-I 区SK310出土遺物(1/3・1/4\*)

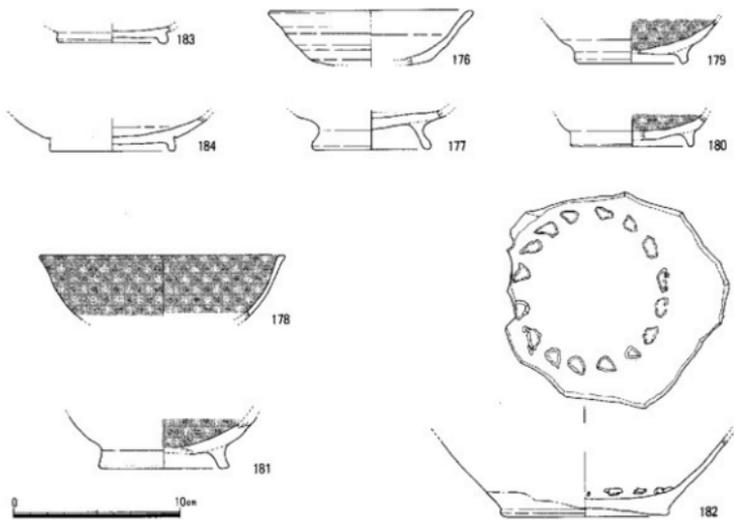


Fig. 47 A-I区SK315出土遺物(1/3)

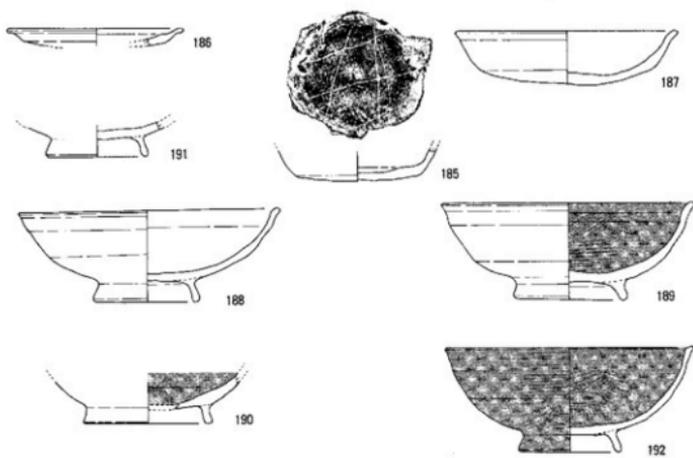


Fig. 48 A-I区SK317出土遺物(1/3)

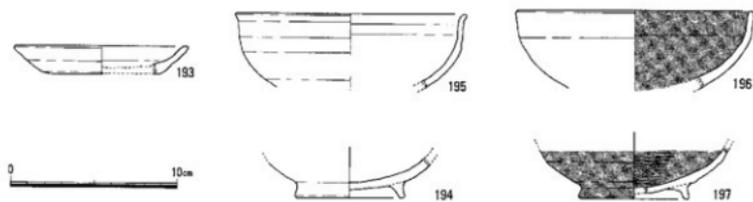


Fig. 49 A-I区SK321出土遺物(1/3)



Fig. 50 A-I区SK325出土遺物(1/3)

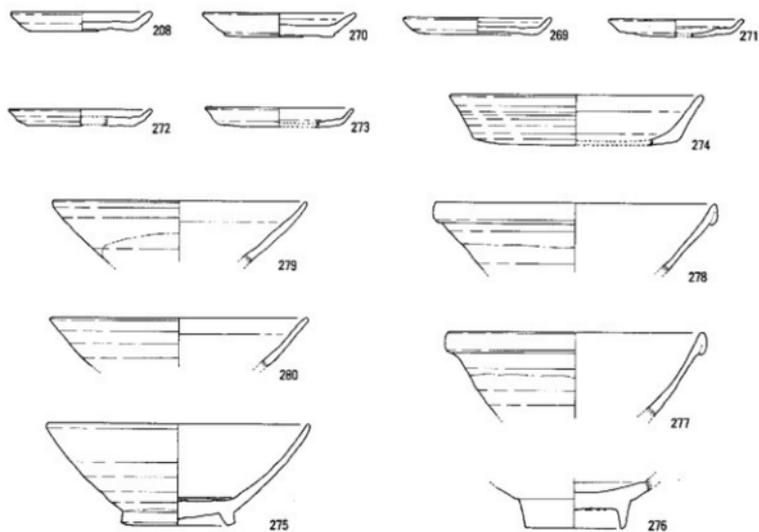


Fig. 51 A-II区SK328出土遺物(1/3)

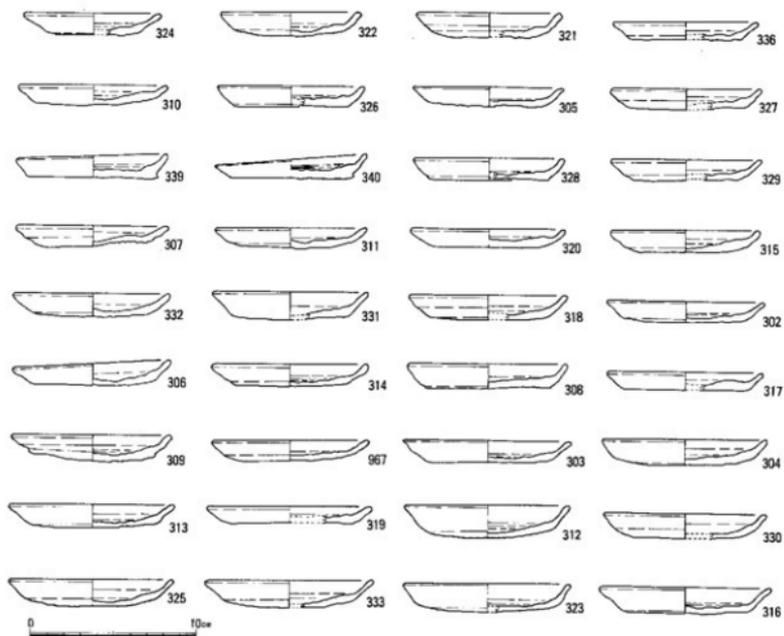


Fig. 52 A-II区SK346出土遺物(1/3)

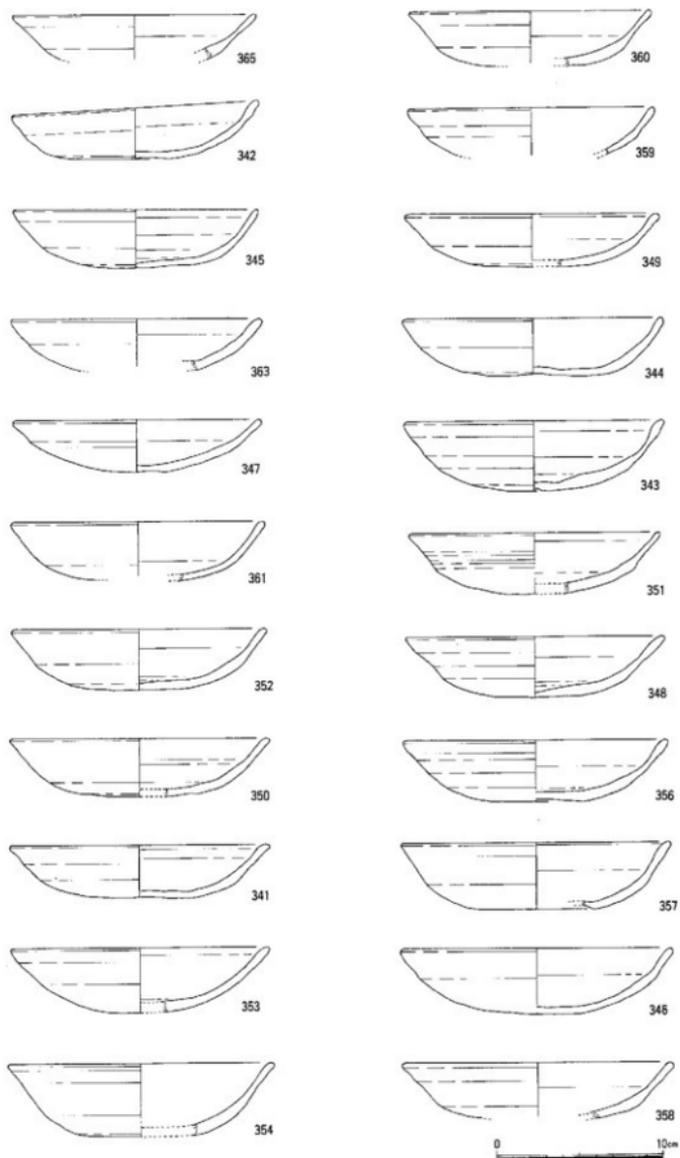


Fig. 53 A-II区SK346出土遺物(1/3)

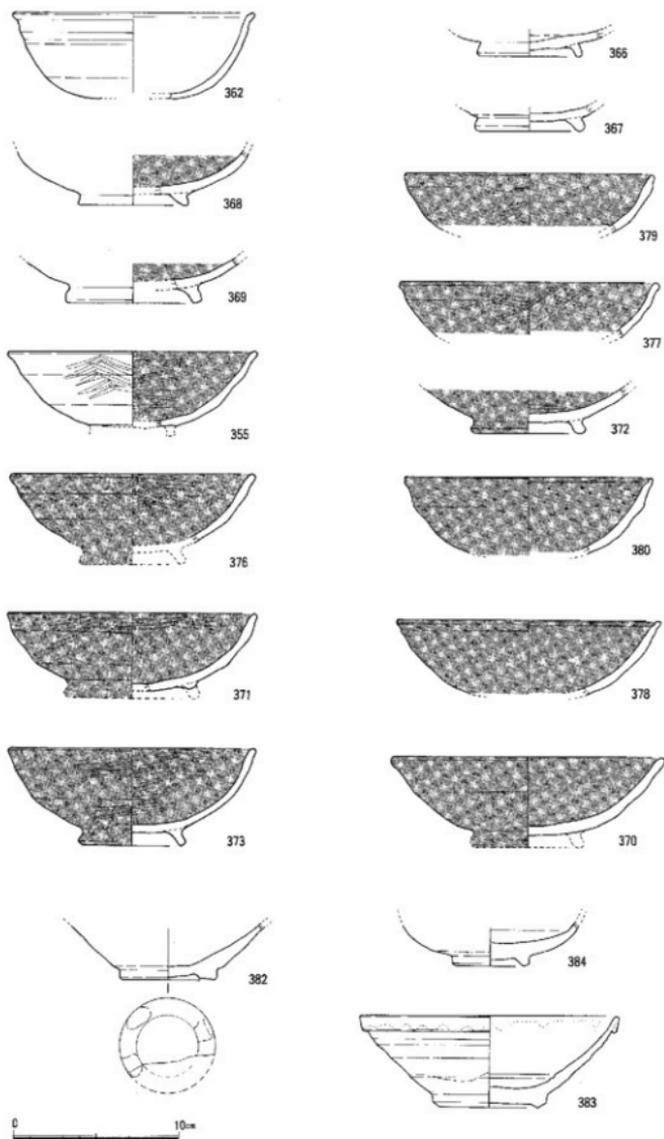


Fig. 54 A-II区SK346出土遺物(1/3)

354・362・366・367は土師器の椀で、体部内面には篋磨きを施す。355・368・369・377・379は黒色土器の椀で、体部内面だけ黒色。粗い篋磨きを内面に施す。370・373・376・377・379は黒色土器の椀で器面全面が黒色で、丁寧な篋磨きを体部内外面に施す。378・380は瓦質土器の椀で、器面全面に細かく緻密な篋磨きを施す。382は青磁の碗で、狹い見込から口縁は直線的に外傾しながら立上る。高台は削り出しによる輪高台。胎土は青灰色を呈する。オリーブ色の釉薬を器面全面に施す。髹付の釉の除去の削りは不十分である。髹付には白色土の目土が残る。越州窯系青磁を模倣した朝鮮半島産青磁の可能性がある。S K 343出土の破片と接合した。383・384は白磁の碗である。383は口縁の玉縁が折返して断面が三角形。釉は灰色がかったオリーブ色。体部外面下半は露胎。384は器面に白色土の化粧掛けを行い、その後薄い黄色の釉を施す。高台は露胎。

#### S K 347 (Fig.55・56, PL.31)

386～416・422・423・432・434・435・439～441は土師器の小皿。398だけ底部の切離しは糸切りにより、他は全て篋切りによる切り離し。397・435は灯明皿。442～445・448・449・451～459土師器の坏で、底部は丸みを持ち、口縁は外傾しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げる。体部内面には篋とは異なる工具による磨き調整を施す。全ての底部には篋切りによる切離し痕跡と板目圧痕とが残る。461・462・464～466は黒色土器の椀で、体部内面だけ黒色。粗い篋磨きを内面に施す。467～469・471・472は黒色土器の椀で器面全面が黒色で、丁寧な篋磨きを体部内外面に施す。474・475は白磁の碗で、下半部露胎。見込の境には沈線を施す。胎土は灰色で、釉は灰色がかったオリーブ色。

#### S K 350 (Fig.57)

477・479は土師器の椀で、口縁は外傾しながら立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。器面の内外面には粗い篋磨きを施す。胎土は灰白色を呈する。いずれも黒色土器と同じ製作技法である。478は内面黒色の黒色土器で、器面の内外面には粗い篋磨きを施す。480は内外面黒色の黒色土器で、器面の内外面には粗い篋磨きを施す。

#### S K 353 (Fig.58)

2110は白磁の壺で、肩部丸く、口縁は直立する。胎土は灰白色で、薄い青色がかった灰色の釉を施している。同じ器形の壺がS K 528から出土している。

#### S K 354 (Fig.59, PL.33)

486～489は土師器の小皿と坏で、底部の切離しは糸切りによる。491は瓦質の鉢。体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁端部は面をなす。胎土は灰色で、1mm前後の砂粒を多く含む。493は口禿の白磁の高台付皿で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁は外反する。体部と見込との境には一条の沈線を巡らす。胎土は白色を呈し、釉は僅かに青みがかった灰色で、体部下半は露胎。口縁部は釉を削り取る。494は白磁の碗で、口縁は直線的に立ち上がる。胎土は灰白色を呈し、釉は乳灰色で体部過半は露胎。492も白磁の碗で、体部は直線的に立ち上がる。胎土は青灰色を呈し、釉は乳灰色で体部過半は露胎。施釉後に見込の釉を輪状に削り取り、重ね焼している。髹付と底部、見込には目土と目跡が残る。495は青磁の碗で、口縁は外傾しながら立ち上がる。外面には片切彫による鑿を持つ蓮弁を彫刻。内面は無文。胎土は青灰色を呈し、釉は灰色がかったオリーブ色。

#### S K 355 (Fig.60)

202は土師器の椀。203は越州窯系青磁の碗で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。

#### S K 360 (Fig.61, PL.33)

211・222は土師器坏で、底部の切離しは篋切りによる。216・217・226・227・229・230は体部内面が黒色

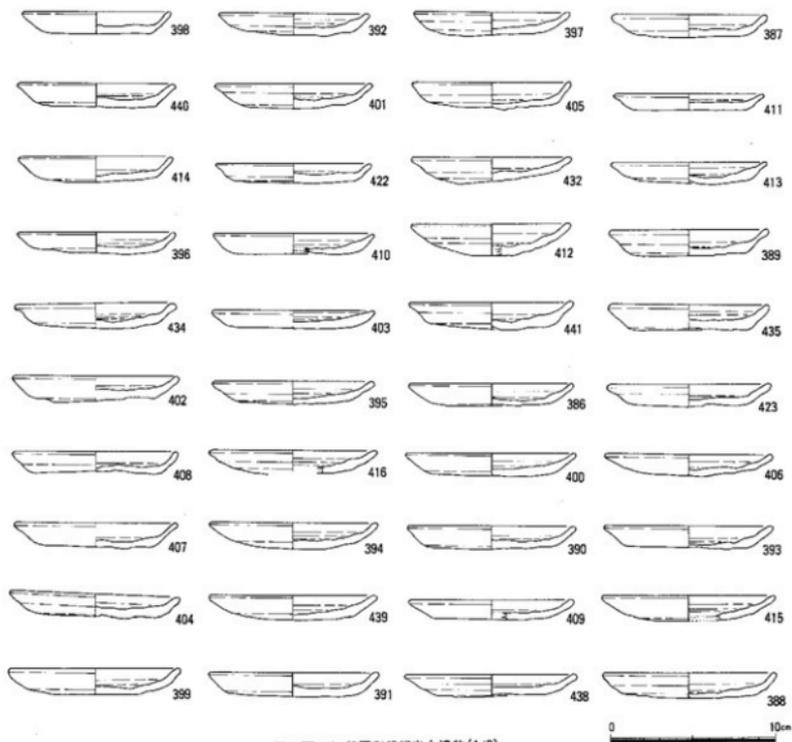


Fig. 55 A-II区SK347出土遺物(1/3)

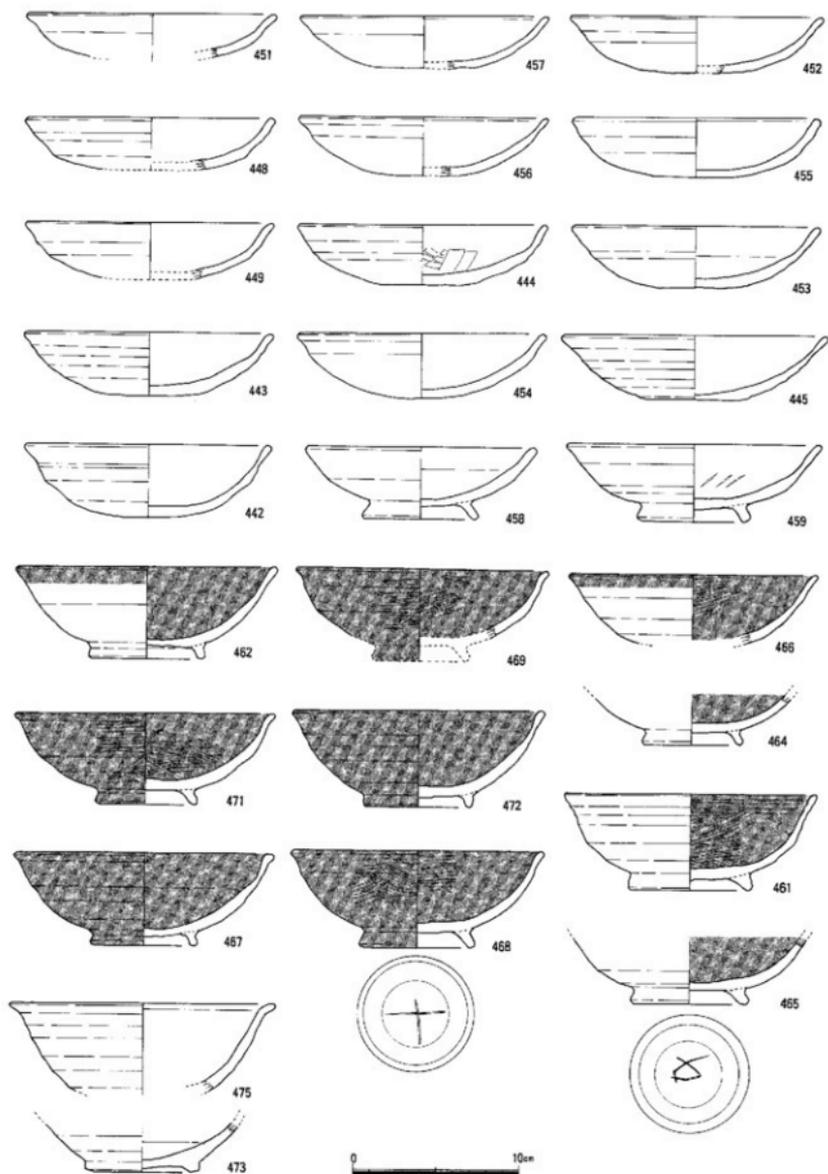


Fig. 56 A-II区SK347出土遺物(1/3)

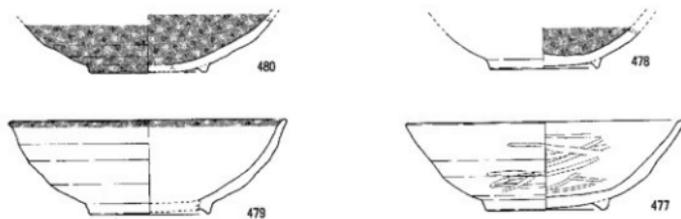


Fig. 57 A-II区SK350出土遺物(1/3)

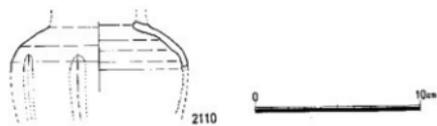


Fig. 58 A-II区SK353出土遺物(1/3)

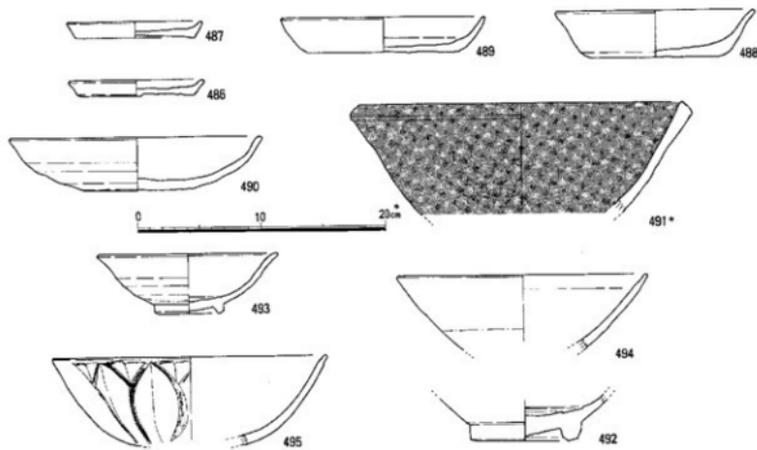


Fig. 59 A-II区SK354出土遺物(1/3・1/4\*)



Fig. 60 A-I区SK355出土遺物(1/3)

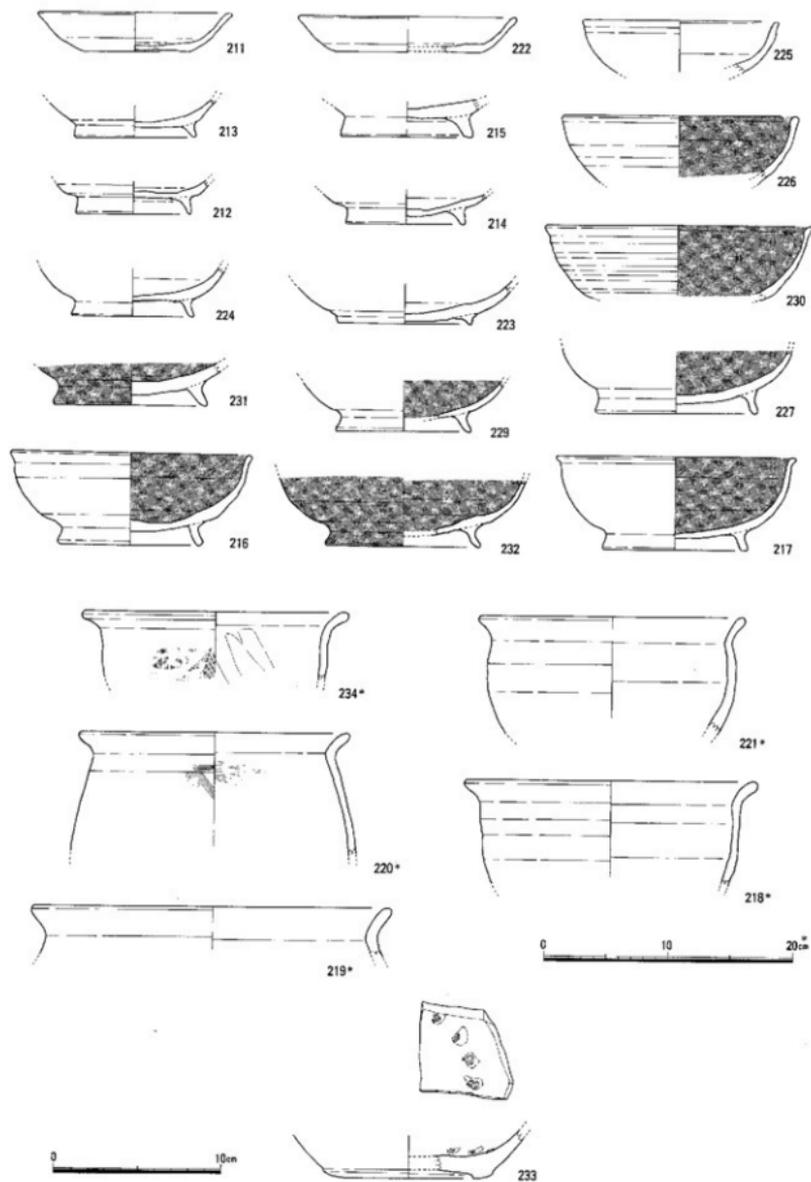


Fig. 61 A-I 区SK360出土遺物(1/3-1/4\*)



Fig. 62 A-I区SK421出土遺物(1/3)

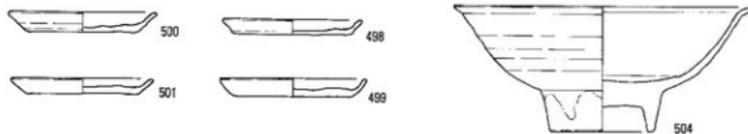


Fig. 63 A-II区SK511出土遺物(1/3)

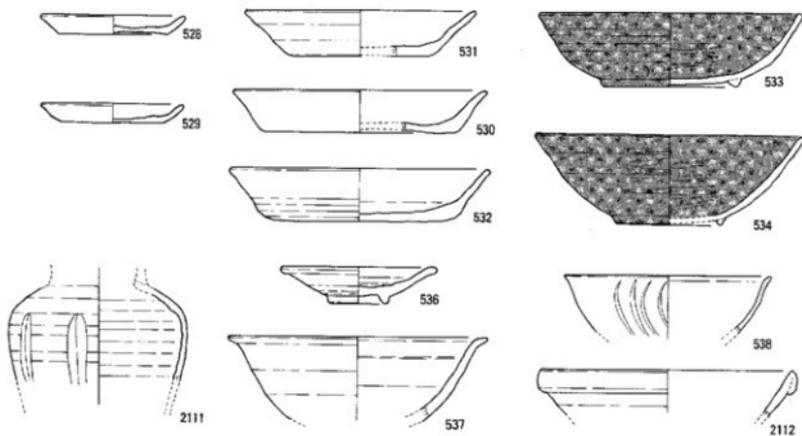


Fig. 64 A-II区SK528出土遺物(1/3)

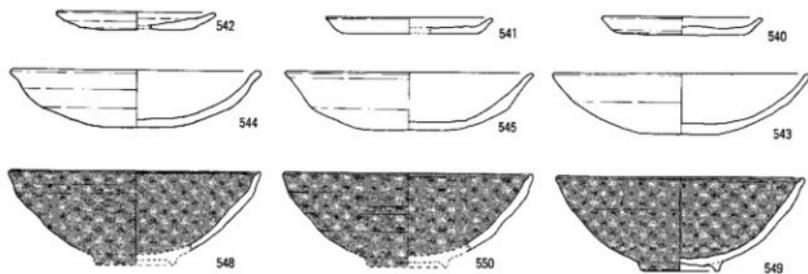


Fig. 65 A-II区SK537出土遺物(1/3)

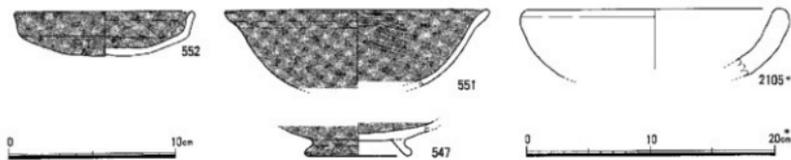


Fig. 66 A-II区SK537出土遺物(1/3・1/4\*)

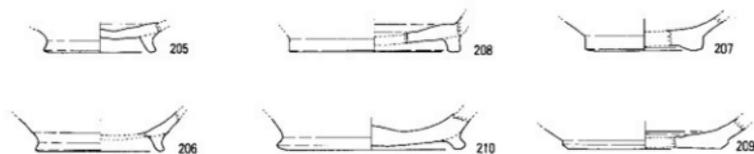


Fig. 67 A-I区SX356出土遺物(1/3)

の黒色土器で、内面には粗い篋磨きを施す。231・232は器面全面黒色の黒色土器。233は輪高台の越州窯系青磁の碗である。肉厚の体部、口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は削り出しにより輪高台とする。胎土は青灰色を呈し、灰色がかかったオリーブ色の釉薬を薄く器面全面に施す。畳付の釉の除去の削りは不十分である。見込と畳付には白色上の目土が残る。220は土師器の甗で、平行目の板で叩き整形し、その後刷毛目調整している。外面には煤が付着。

#### S K 421 (Fig. 62, PL. 34)

235は白磁の碗で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁は平坦な面を持つ。口縁端部は横ナデ調整により外側に突き出す。見込との境には一糸の沈線を巡らす。胎土は薄い黄色がかかった灰色。釉は灰色で、体部下半は露胎。

#### S K 482 (PL. 34)

497は土師器の環で、口縁は外傾しながら直線的に立ち上がる。底部の切離しは糸切りによる。

#### S K 511 (Fig. 63, PL. 34)

498～501は土師器の小皿で、底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。504は白磁の碗で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁は外反する。釉は黄色がかかった灰色で、高台は露胎。503は石包丁。

#### S K 528 (Fig. 64, PL. 34)

528・529・530～532は土師器の小皿と環で、底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。533・534は黒色土器の碗で、器面の内外面には粗い篋磨きを施す。536は白磁の高台付皿で、口縁は大きく外傾しながら立ち上がる。胎土は白色を呈し、釉は灰色で体部下半は露胎。施釉後に見込の釉を輪状に削り取り、重ね焼している。537は白磁の碗で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁は大きく外反する。538は白磁の碗で、胎土は茶灰色を呈し、釉は茶灰色。体部外面には片削りによる細い蓮弁を彫刻する。2111は白磁の甗で、胎土は灰白色を呈し、釉は微かに緑がかかった灰色。2112は白磁の碗で、口縁を折返して断面が三角形の玉縁。釉は灰色がかかったオリーブ色。体部外面下半は露胎。

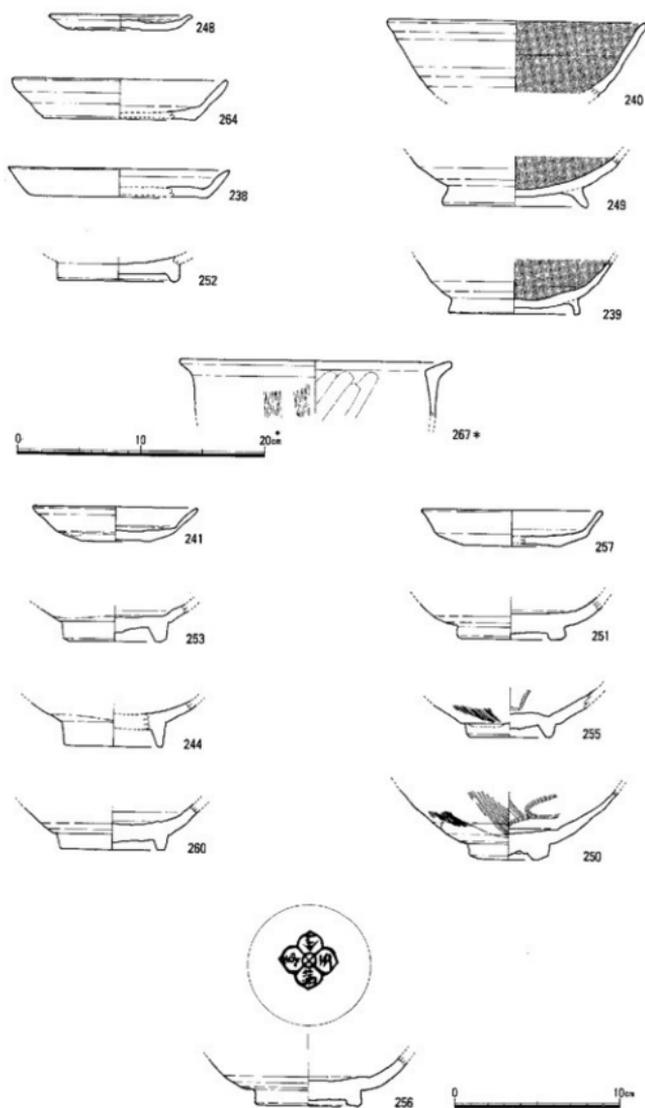


Fig. 68 A区包含層・透標検出面出土遺物(1/3・1/4\*)

## S K 537 (Fig. 65-66, PL. 34)

540～542は土師器の小皿で、底部には篋切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。541は灯明皿。534～545は土師器の環で、底部は丸く、口縁は外傾しながら立ち上がる。体部内面は篋とは異なる工具による磨き調整を施す。548～550は瓦質土器の碗である。口縁は直線的に外反しながら立ち上がる。器面全面に細かく緻密な篋磨きを施す。体部内面は回転を用いた磨きで、見込と外面は手持ちによる磨きである。高台は低い。552は瓦質土器の環である。547・551は器面全面黒色の黒色土器で、手持ちによる幅広い丁寧な篋磨きを体部内外面に施す。2105は取瓶で、胎土はきめが粗く軟質。口縁部は丸く仕上げ、器壁の厚さは1.5cmを測る。内面には銅合金が厚く付着し、外面には焼けた痕跡は認められない。

## S X 356 (Fig. 67, PL. 34)

205・206は土師器の碗。207は白磁の碗。胎土は黄色がかった灰色、釉は僅かに茶色がかった灰色で、体部下半は露胎。209は越州窯系青磁の碗。肉厚の体部、口縁部が直線的に外傾しながら立上る。底部は平底であるが、周縁を高くして畳付とする。周縁は削りによる面取り調整。胎上は黄灰色を呈し、釉はくすんだオリーブ色。208・210は須恵器の環と瓶。

## 包含層・遺構検出面 (Fig. 68-69, PL. 35)

248・264は土師器の小皿と環で、底部には篋切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。238は私益の環。252は緑釉陶器の環で、暗青灰色の胎土に暗緑色の釉を薄く内外面に施している。器面には施釉前に丁寧な篋磨きが施され、見込には重焼の跡が残る。239・240・249は黒色土器の碗である。体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。内面は黒色で、粗い篋磨きを施している。267は土師器の甕で、外面は刷毛目調整、内面は篋削り。241・257は青磁の皿。口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。釉は灰色がかったオリーブ色で、体部下半は露胎。250・255は同安窯系の青磁碗で、体部は直線的に外反しながら立ち上がる。体部と見込との境には削りの溝を巡らす。器面内外面に撫掃を施す。胎上は青灰色～灰色を呈し、釉はオリーブ色～青色がかったオリーブ色。高台もしくは体部下半が露胎。251・256は龍泉窯系青磁の碗で、肉厚である。251は無文、256は見込の中央に4枚の花弁を十字に配した中に「金玉蒲草」の文字が彫刻されている。244・253・260は白磁の碗である。244は高台が高く、先細。253・260は、体部が直線的に外傾しながら立ち上がる。胎土は灰色を呈し、釉は乳灰色で体部過半は露胎。施釉後に見込の釉を輪状に削り取り、重ね焼している。243・254・258・259・561・563・565・566は越州窯系青磁の碗である。高台の整形技法の違いにより3種に分類される。平底で中央部を底上げて周縁を畳付とし、縁は無調整(243)。底部削り出でて、底部半径の半分以下の幅の輪高台とする(254・258・259・563)。底部は篋削りによる調整を施し、中央部を底径の半分以下の径で小円状に削り、蛇の目高台とする。(565・566)。施釉および焼成方法の違いでは2種に分かれる。563・565・566は器面全面にくすんだオリーブ色(565・566)や茶色(563)の釉薬を施し、その後には畳付を拭き取り、畳付にだけ目土もしくは目跡が残る。他の碗は、くすんだオリーブ色～灰色の釉薬を内面全面と体部外面上半部にだけ施す。また、畳付および見込には目跡もしくは目土が残る。561は越州窯系青磁の皿で、平坦で広い見込から体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。高台は削り出でて、低く狭い。胎土は灰色を呈する。灰色がかったオリーブ色の釉を器面前面に施し、その後には畳付を拭き取って露胎とする。白色土の目土が畳付けと見込に残る。246・261は越州窯系青磁の壺である。246の口縁部は短く外反して立ち上がる。胎土は灰色を呈し、粗い。

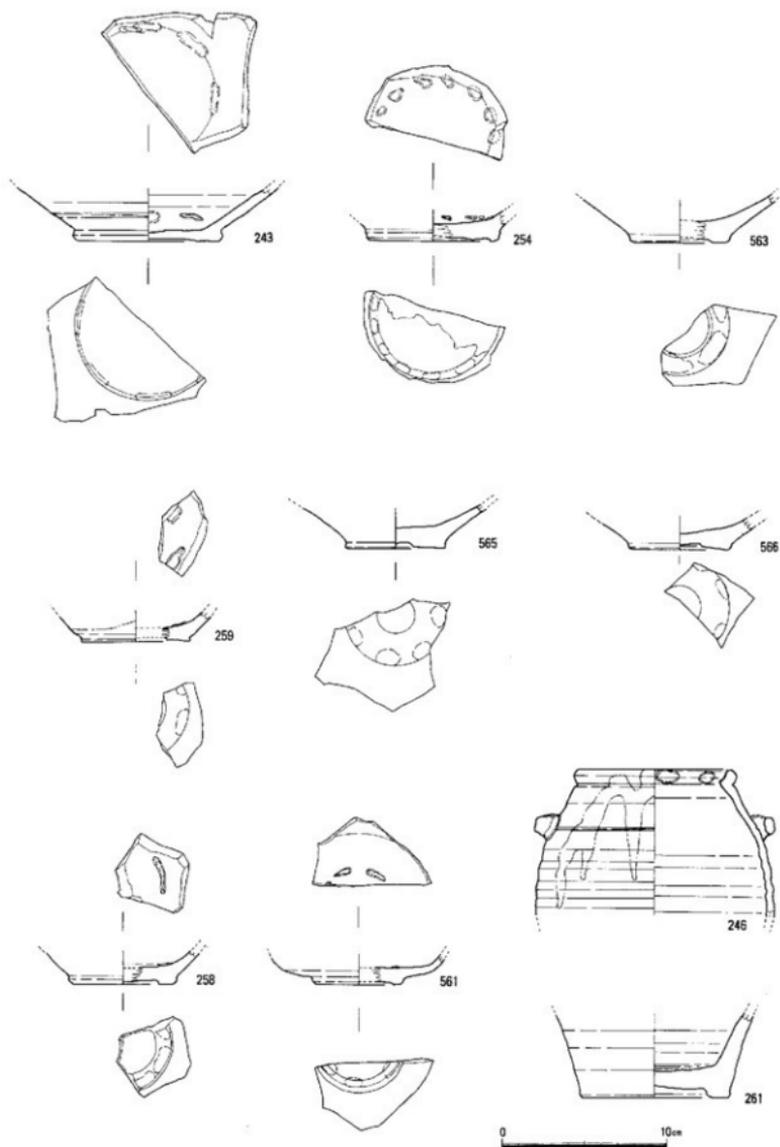


Fig. 69 A区包含層・透模検出面出土越州窯系青磁(1/3)

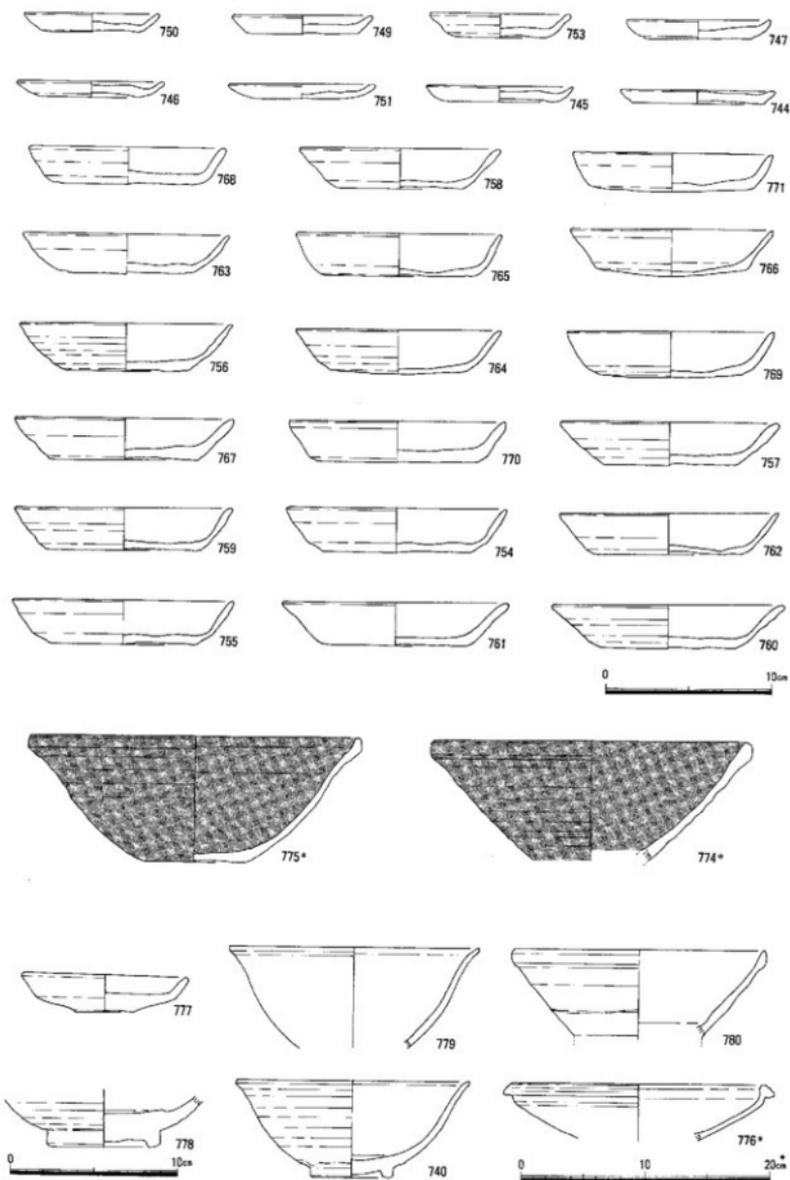


Fig. 70 B区SD879出土遺物(1/3・1/4\*)

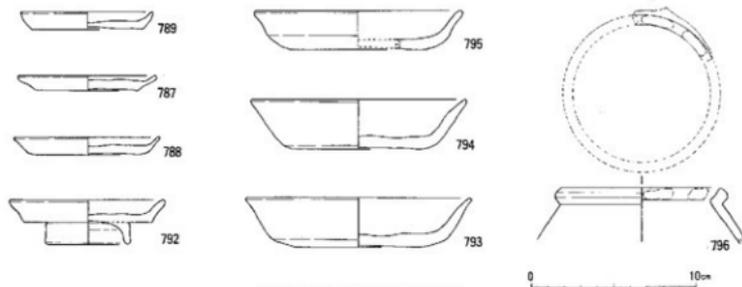


Fig. 71 B区SD919出土遺物(1/3)

## (B 区)

## SD879 (Fig. 70, PL.36)

744~747・749~751・753は土師器の小皿である。口径8cm~9cm、底径6cm~7.2cm、器高1.1cm~1.3cm。底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。754~771は土師器の環で、口径11.5cm~14cm、底径8cm~10cm、器高2.3cm~3cm。口縁の立ち上がりの違いから、2種に分かれる。口縁が短く、外傾して立ち上がる傾きも小さい群と口縁は直線的に大きく外傾して立ち上がる群である。いずれの群も、底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。774・775は瓦質の鉢である。口径25cm~26cm、底径9cm、器高10.2cm。平底の底部から体部は直線的に外反しながら立ち上がり、口縁部は断面形が三角形とする。胎土は灰色~暗灰色で、0.5mm~1mm程の砂粒を多く含む。体部外面は横ナデ調整、内面はナデによる調整。見込と体部内面下半には擦った使用痕跡が残る。底部の切離しは糸切りによる。777は龍泉窯系青磁の平底皿である。見込は平皿で広く、口縁は直線的に外反しながら短く立ち上がる。778は龍泉窯系青磁の碗である。見込と体部との境には段を設ける。内面には片切彫りによる蓮花折枝文を施す。釉はガラス質で厚く、暗オリーブ色を呈する。甗付は露胎。740・779は口禿の白磁の碗である。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁は外反する。体部と見込との境には一条の沈線を巡らす。釉は灰色で、高台露胎。口縁端部の釉は削り取る。780は口縁に低い玉縁を持つ白磁の碗である。口縁の玉縁は折返しにより、断面が三角形。体部と見込との境には一条の沈線を巡らす。釉は灰色がかったオリーブ色。体部外面下半は露胎。776は無釉陶器の鉢である。口縁は直に折れ立ち上がり、端部は「く」の字状に外反する。

## SD919 (Fig. 71, PL.36)

787~789は土師器の小皿で、底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。787は灯明皿。792は高台付小皿。口縁は短く外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。793~795は土師器の環で、体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁は少し外反する。底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。796は越州窯系青磁の壺である。口縁部は外反して短く立ち上がる。胎土は暗青灰色を呈し、釉は灰色がかったオリーブ色。口縁部内面には目土が残る。

## SD1139 (Fig. 72・73, PL.37)

861~872・874~876は土師器の小皿で口径7.2cm~9.2cm、底径4.2cm~6.4cm、器高1.1cm~1.7cm。底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕が残る。873は瓦質土器の小皿で、口径10cm、底径6.2cm、器高2.1cm。口縁は外傾しながら立ち上がり、端部は厚く丸みを持つ。底部には糸切りによる切

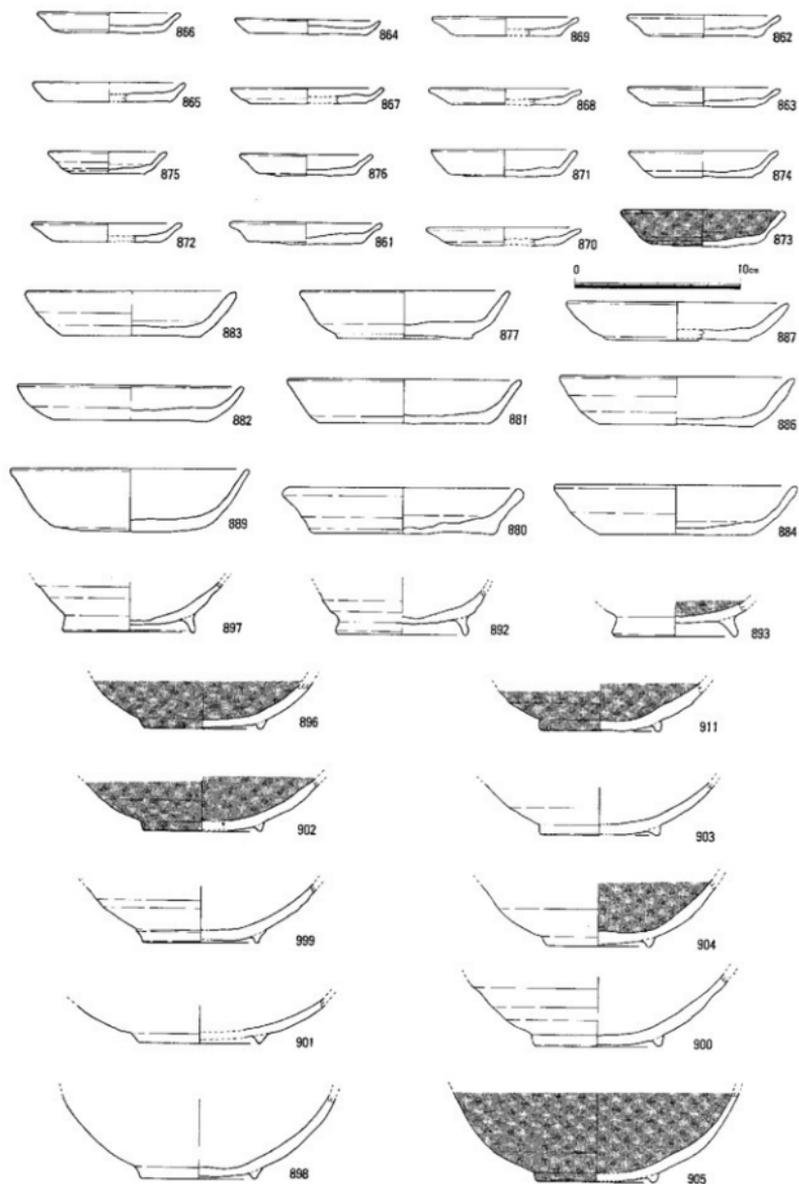


Fig. 72 B-C区SD1138出土遺物(1/3)

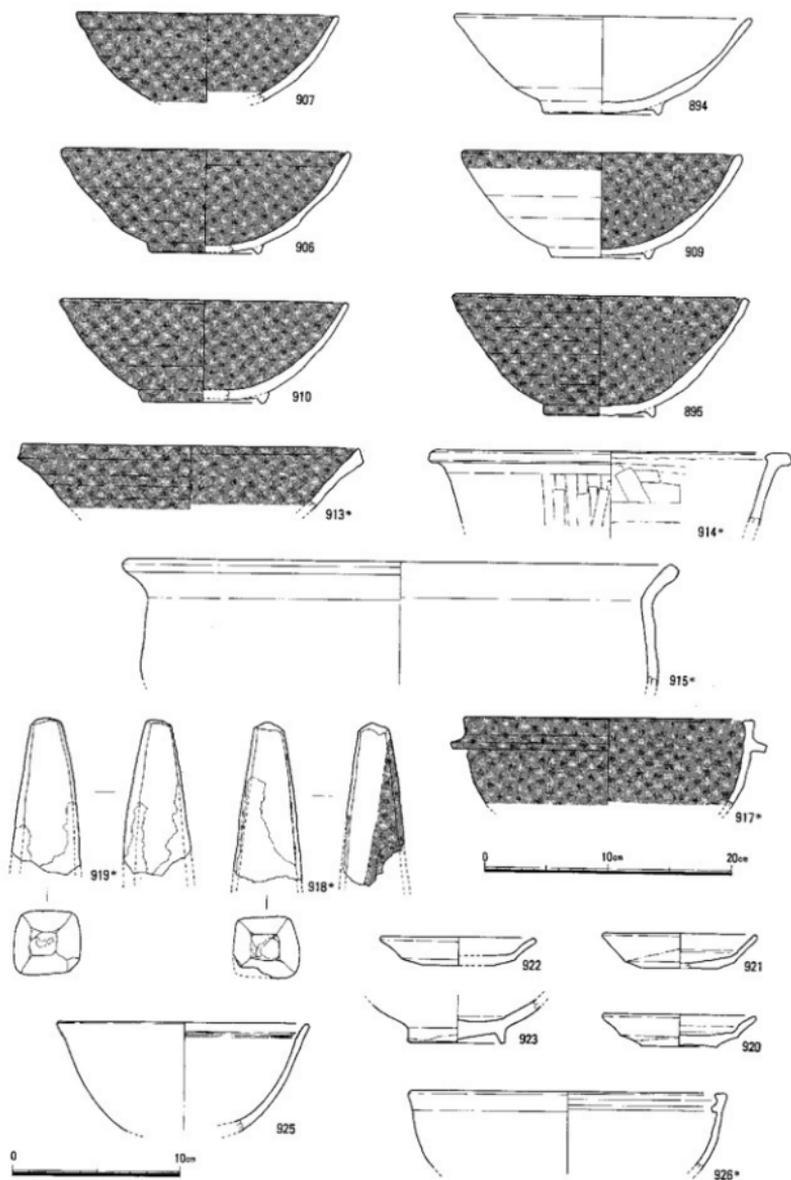


Fig. 73 B-C区SD1139出土遺物(1/3-1/4\*)

離し痕跡と板目の圧痕とが残る。877・880～884・886・887・889は土師器の坏で、口径12.5cm～15cm、底径8.2cm～11cm、器高2.2cm～3.8cm。口縁は外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。土師器の碗類は内面を磨いている。914は土師器の甕で、口縁は「く」の字状に折れ、鐙と同じ効果を持たせている。体部は内外面とも刷毛目調整。915は口径50cmの大型の土師器甕。口縁は大きく外反し、端部は丸く仕上げる。外面には厚く煤が付着。917は土師器の鍋。口縁は直立し、端部は平坦。口縁部外面下方には鐙が周る。外面には厚く煤が付着。918・919は土師器の支脚。尖頭の四角柱で、基部を欠いて全形は不明。胎土は粗く、2mm～5mm程の砂粒を大量に含む。3つの側面には火を受けた痕跡が強く残る。920～922は青磁の平底皿。見込は平坦で広く、口縁は直線的に外反しながら短く立ち上がる。釉は黄色がかかった灰色～濃いオリーブ色を呈し、体部下半は露胎。923・925は青磁の碗である。926は無釉陶器の鉢。胎土は黒褐色を呈し、1mm～2mm程の砂粒を多く含む。体部は直線的に外傾しながら立ち上り、口縁部は内側に折れ曲がり直立する。端部は平坦で、内側に2条の凸帯が巡る。

S E 752 (Fig. 74, PL. 37)

601・602は土師器の小皿と坏で、口縁は外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。

S E 811 (Fig. 75)

708・709・711～713・720・721は土師器の小皿で、底部には糸切りによる切離し痕跡と板目の圧痕とが残る。724は瓦器質の小皿で、底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。715・723・2113は瓦器質の碗で、体部内面に磨きを施す。瓦器質の水甕も出土している。

S E 1119 (Fig. 76)

849・850・2114は土師器の小皿で、底部には篋による切離し痕跡が残る。849は痕跡から灯明皿。851～853・856は土師器の坏で、体部内面には篋とは異なる工具による磨きを施す。857は褐釉の水注。口縁は僅かに外傾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。

S E 1260 (Fig. 77, PL. 37)

937～940は土師器の小皿で、底部には篋による切離し痕跡が残る。941は土師器の坏で、体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。体部内面には磨きを施す。942は器面全面黒色の黒色土器で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。器面には手持ちによる篋磨きを施している。

S E 1274 (PL. 37)

943は白磁の碗で、体部は外反しながら立ち上がり、口縁は折り返して玉縁とする。灰色の釉を施す。

S E 1277 (Fig. 78, PL. 37)

944・945は土師器の坏で、口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。946は白磁の碗で、体部は外反しながら立ち上がる。口縁は折り返して、断面形が三角形の玉縁とする。青色がかかった灰色の釉を施す。

S E 1300 (Fig. 79, PL. 41)

984は褐釉の合子蓋。口径6.8cm、器高2.1cm。天井部外面には、篋の草花文。

S E 1302 (Fig. 80)

986は瓦質の碗。器面内面だけ磨き。987は土師器の鍋。口縁はほぼ直に立ち上がり、端部は平坦な面とする。口縁部下方には、幅の1.5cmの鐙を巡らす。

S E 1307 (Fig. 81, PL. 41)

992～995は瓦質の小皿で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し



Fig. 74 B区SE752出土遺物(1/3)

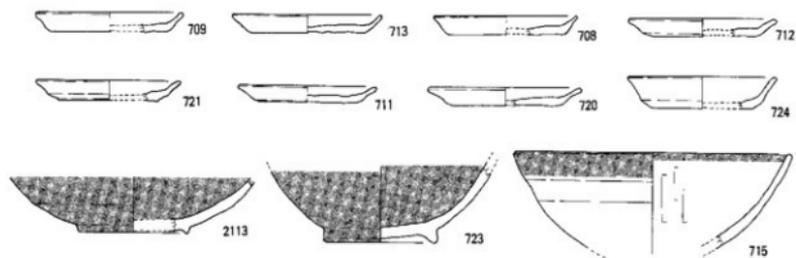


Fig. 75 B区SE811出土遺物(1/3)



Fig. 76 B区SE1119出土遺物(1/3)

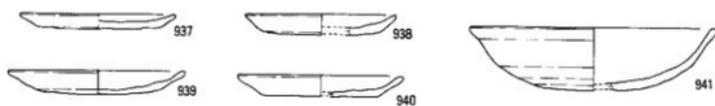


Fig. 77 B区SE1260出土遺物(1/3)

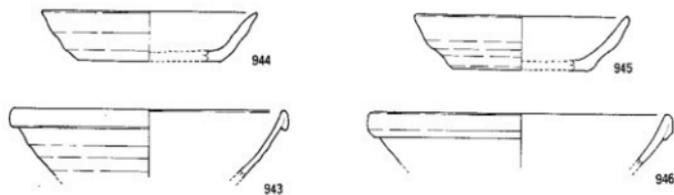


Fig. 78 B区SE1277出土遺物(1/3)



Fig. 79 C区SE1300出土遺物(1/3)

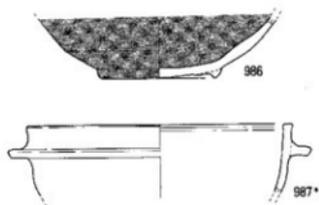


Fig. 80 C区SE1302出土遺物(1/3・1/4\*)

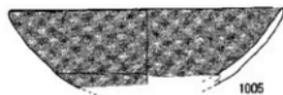
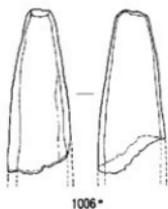
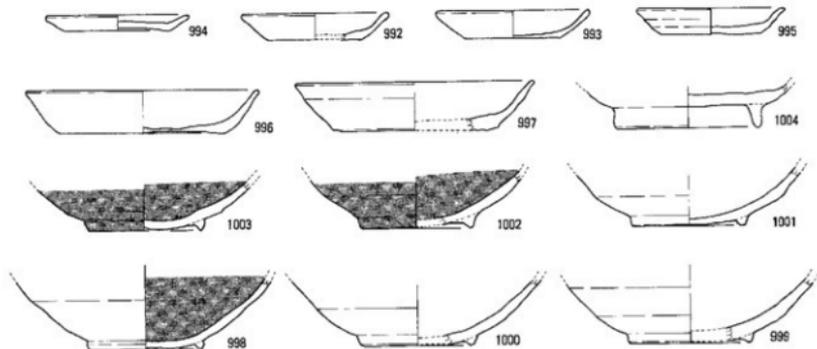


Fig. 81 B区SE1307出土遺物(1/3・1/4\*)

痕跡が残る。996は土師器の坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。胎土に赤褐色砂粒を多く含む。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。997は瓦質の坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。999～1003・1005は土師器の碗。体部内面は丁寧な磨きを施す。998は内面だけ黒色。1004は器面全面黒色。1006～1008は支脚。四角錐の形状で、固く焼き締まる。基部を欠いて全形は不明。胎土は粗く、2mm～5mm程の砂粒を大量に含む。側面に火を受けた跡が明瞭に残る。

**S K 624** (Fig. 82, PL. 38)

581は緑釉緑彩の碗である。胎土は白色で、砂粒を含み精選されていない。釉は濃い緑色を呈し、器面を余すところ無く施している。高台は端部がやや開きぎみに付ける。

**S K 713** (Fig. 83, PL. 38)

591・592は瓦質の碗。底部は丸みを持ち、体部は外傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられる。体部内外面には粗い窠磨きを施す。591の底部には墨書が残る。593は瓦器質の甕。口縁は外反しながら立ち上がる。

**S K 749** (PL. 38)

1042は瓦器質の碗。底部は丸みを持ち、体部は外傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。体部内外面には粗い窠磨きを施す。

**S K 752** (PL. 38)

619は土師器の坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。

**S K 764** (Fig. 84)

628～633・638・639は土師器の小皿と坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。629は灯明皿。

**S K 766** (Fig. 85, PL. 38)

643～645・1043～1045は土師器の小皿と坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。

**S K 772** (PL. 38)

647は土師器の坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。650は砥石。

**S K 773** (Fig. 86, PL. 38)

651は土師器の坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。653は青磁の小碗。器壁は肉厚で、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。胎土は灰色を呈する。釉は灰色がかかったオリーブ色で、全面に施巢。その後には疊付の釉を削り取る。656は越州窯系青磁の四耳壺である。

**S K 805** (Fig. 87, PL. 38)

672は褐釉の摺鉢で、体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁は途中から直に立つ。口縁端部は平坦。体部内面に6本を単位とする櫛描の沈線を彫る。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を含まない。口縁端部に褐釉を施す。

**S K 808** (Fig. 88)

673～682・684・685は土師器の小皿と坏で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。686は瓦質の碗で、口縁が外傾しながら立ち上がる。体部内面には丁寧

な磨きを施す。越州窯系青磁壺、片切彫蓮弁の龍泉窯系青磁碗、口禿の白磁碗、褐釉の鉢なども出土している。

**S K 809** (Fig. 89, PL. 38)

699~701・1046は土師器の小皿と坏で、底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。703は口禿の白磁碗で、無文。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁は外反する。見込との境には一糸の沈線を巡らす。胎土は灰色を呈呈。釉は灰色で器面全面に施し、口縁端部の釉を削り取る。高台は露胎。

**S K 874** (PL. 39)

738は器面全面黒色の黒色土器の碗である。底部は丸みを持ち、体部は外傾しながら立ち上がり、端部は僅かに外反する。器面全面に、手持ちによる磨きを施している。

**S K 921** (Fig. 90, PL. 39)

801~804は土師器の小皿と坏で、底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。805は瓦質碗で、体部は肉厚。体部内面にだけ丁寧な磨きを施す。806は瓦質の鉢。807は越州窯系青磁の鉢で、体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。底部は、削り出して畳付とする。胎土は赤褐色を呈する。釉は濃いオリープ色。体部外面には白色土の目土が廻り残る。808は青磁の碗。811は砂岩の砥石。2108は褐釉の鉢か壺。

**S K 986** (Fig. 91, PL. 39)

819~823は土師器の小皿と坏である。底部には、822は寛切り、その他は糸切りによる切離し痕跡が残る。824は口縁内折の大甕。

**S K 1021** (Fig. 92, PL. 39)

839・862土師器の小皿と坏で、底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。

**S K 1075** (Fig. 93)

842は瓦質の鉢。843は同安窯系青磁の碗。

**S K 1134** (Fig. 94, PL. 39)

860は青磁の碗で、体部は外傾しながら立ち上がる。見込を一段高くし、体部内面には構描により4区画分割し、各区画中央に窠描きしている。釉は濃いオリープ色を呈し、高台は露胎。

**S P 1035** (Fig. 95)

841は瓦質の鉢。

**S X 920** (Fig. 96, PL. 40)

797は龍泉窯系青磁の碗。体部は肉厚で、外傾しながら立ち上がる。胎土は暗青灰色を呈する。釉は濃いオリープ色を呈し、高台は露胎。体部内面には片切彫りと構描により施文する。見込は削りて一段高くする。799は褐釉の広口の壺。体部は直立気味に立ち上がり、口縁は「く」の字状に折れる。800は滑石製で、円盤の一端に摘みを持つ。土器製作（磨き）に関係するものか。

**S P 1122** (Fig. 97, PL. 40)

859は無釉陶器の鉢。胎土は黒褐色を呈し、1mm~2mm程の砂粒を多く含む。体部は直線的に外傾しながら立上り、口縁部は内側に折れ曲がり直立する。端部は平坦で、内側に2条の凸帯が巡る。

**遺構検出面** (Fig. 98, PL. 40)

955は土師器の小壺で、手押による。口縁部は僅かに直立する。961は青磁の平底皿。見込は平坦で広く、口縁は直線的に外反しながら短く立ち上がる。胎土は灰色を呈する。釉は灰色がかかったオリープ色を呈し、体部下半は露胎。962は青磁の高台付皿で、体部は肉厚。口縁部は大きく外傾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。胎土は灰色を呈する。釉は灰色がかかったオリープ色を呈し、体部



Fig. 82 B区SK624出土遺物(1/3)

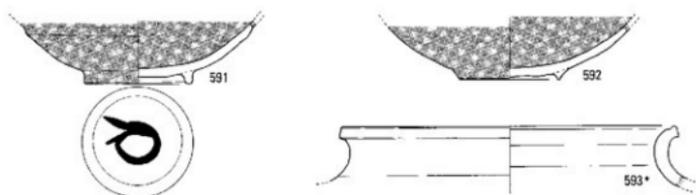


Fig. 83 B区SK713出土遺物(1/3・1/4※)

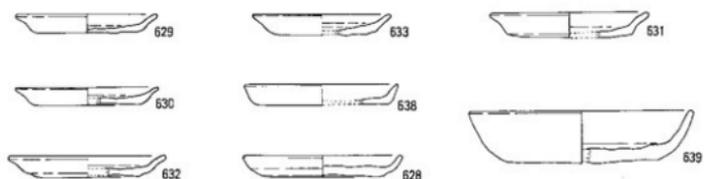


Fig. 84 B区SK764出土遺物(1/3)

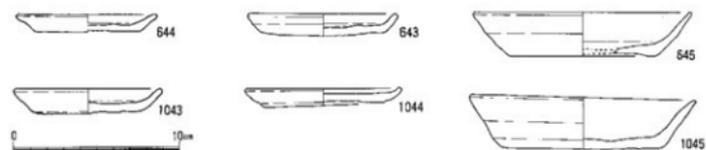


Fig. 85 B区SK766出土遺物(1/3)

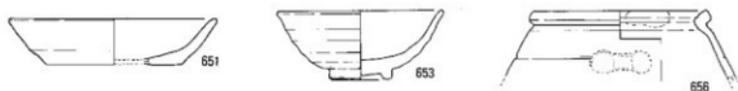


Fig. 86 B区SK773出土遺物(1/3)

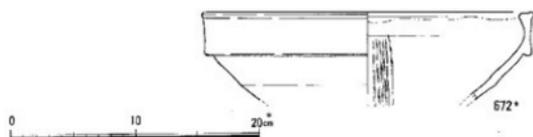


Fig. 87 B区SK805出土遺物(1/4※)

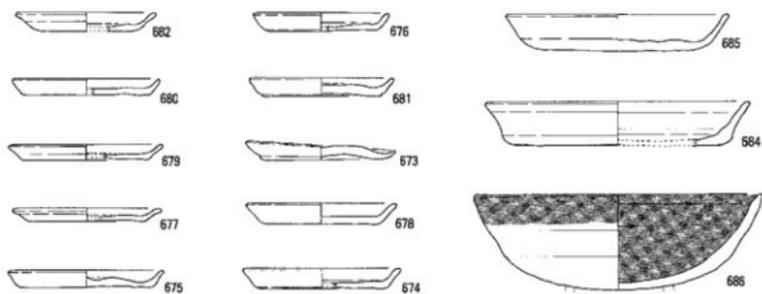


Fig. 88 B区SK808出土遺物(1/3)

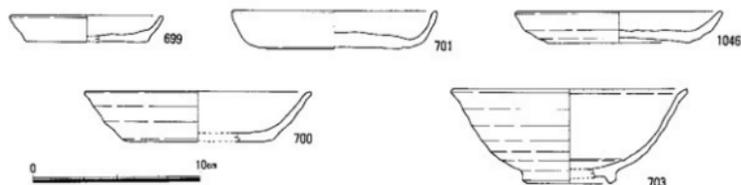


Fig. 89 B区SK809出土遺物(1/3)

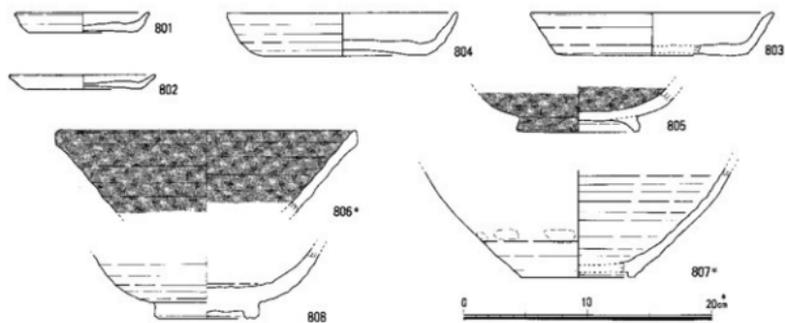


Fig. 90 B区SK921出土遺物(1/3・1/4\*)

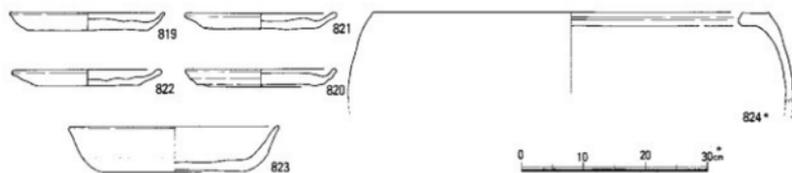


Fig. 91 B区SK986出土遺物(1/3・1/8\*)



Fig. 92 B区SK1021出土遺物(1/3)



Fig. 93 B区SK1075出土遺物(1/3・1/4\*)



Fig. 94 B区SK1134出土遺物(1/3)

Fig. 95 B区SP1035出土遺物(1/4\*)

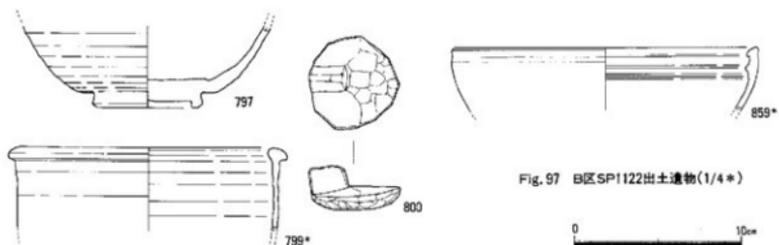


Fig. 96 B区SX920出土遺物(1/3・1/4\*)

Fig. 97 B区SP1122出土遺物(1/4\*)

0 10cm

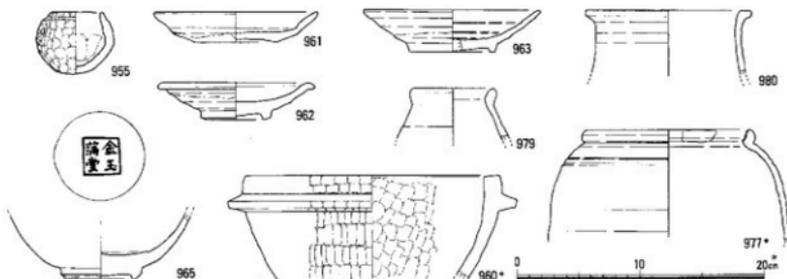


Fig. 98 B区遺構検出面出土遺物(1/3・1/4\*)

0 10 20cm

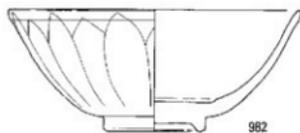


Fig. 99 C区SK1295出土遺物(1/3)

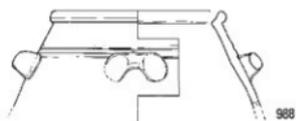


Fig. 100 C区SK1303出土遺物(1/3)

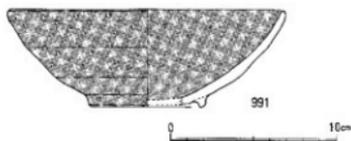
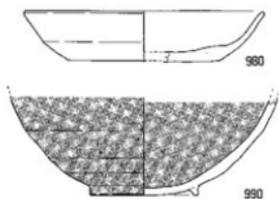


Fig. 101 C区SK1306出土遺物(1/3)

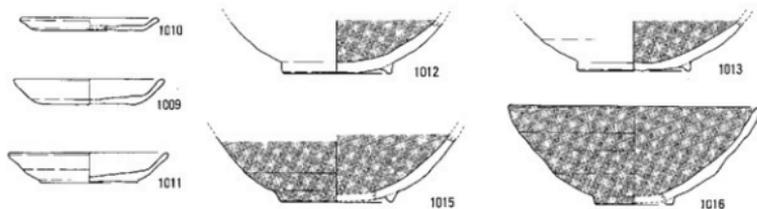


Fig. 102 C区SK1308出土遺物(1/3)



Fig. 103 C区SK1342出土遺物(1/3)

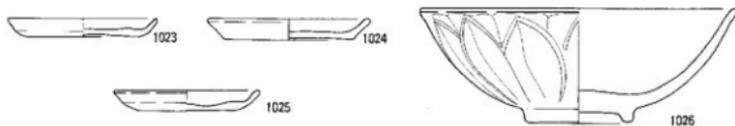


Fig. 104 C区SK1345出土遺物(1/3)



Fig. 105 C区SK1347出土遺物(1/3)

下半は露胎。963は白磁の高台付皿で、体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。胎土は黄色がかった灰色を呈する。釉は灰色を呈し、体部下半は露胎。施釉後に見込の釉を輪状に削り取り、重ね焼している。965は青磁の碗で、体部は肉厚。口縁部は外傾しながら立ち上がる。胎土は赤褐色がかった黄色を呈する。釉は暗オリーブ色で、全面に施す。高台は露胎。体部と見込との境には円形に片彫りの段を施し、中央に「金玉蒲堂」の字を陰刻している。979は褐釉の小壺。977・980は越州窯系青磁の壺と水注。960は滑石製の石鍋。

#### [C 区]

##### S K 1295 (Fig.99, PL.41)

982は青磁の碗で、体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。体部と見込との境には小さい段とする。体部外面には片切彫の蓮弁を施す。胎土は灰色を呈する。釉は暗オリーブ色で、全面に施す。高台は露胎。

##### S K 1303 (Fig.100, PL.41)

988は越州窯系青磁の四耳壺で、口縁部は外反して短く立ち上がる。胎土は暗青灰色を呈し、釉は灰色がかったオリーブ色。

##### S K 1306 (Fig.101)

980は土師器の環で、口縁は直線的に外傾しながら立ち上がる。胎土に赤褐色砂粒を多く含む。底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。990・991は土師器の碗で、口縁は外傾しながら立ち上がる。体部内面だけ磨きを施す。

##### S K 1308 (Fig.102)

1009～1011は瓦質の小皿で、底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。

##### S K 1342 (Fig.103, PL.41)

1020は瓦質の小皿、1021は土師器の環で、いずれも底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。

##### S K 1345 (Fig.104, PL.41)

1023～1025は土師器の小皿で、底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。1026は龍泉窯系青磁の碗で、口縁は外傾しながら立ち上がる。外面には片切彫による蓮を持つ蓮弁を彫刻。内面は無文。胎土は青灰色を呈し、釉は灰色がかったオリーブ色。施釉後に髷付けに付着した釉を削り取る。

##### S K 1347 (Fig.105)

1028・1029は土師器の小皿で、底部には糸切りによる切離し痕跡が残る。

#### B. 木製品

##### 曲物 (Fig.106～110, PL.24・27・32・37)

井戸の井筒として曲物容器を転用している。転用している曲物の大きさや作り方も多様である。実際には掲載以上の数量が出土したが、大半が朽ちており実測に耐えることができなかった。

##### 下駄 (Fig.111, PL.24・27・32・37)

S K 346・347から出土した。

##### 農具 (Fig.111～112, PL.32)

編籠、木桶がS K 346・347から、井戸枠の棧木に転用した鎌の柄がS E 153から出土している。

#### C. 金属製品

##### 銅銭 (Fig.113～115)

紹聖元寶、元豐通寶、熙寧元寶が出土している。

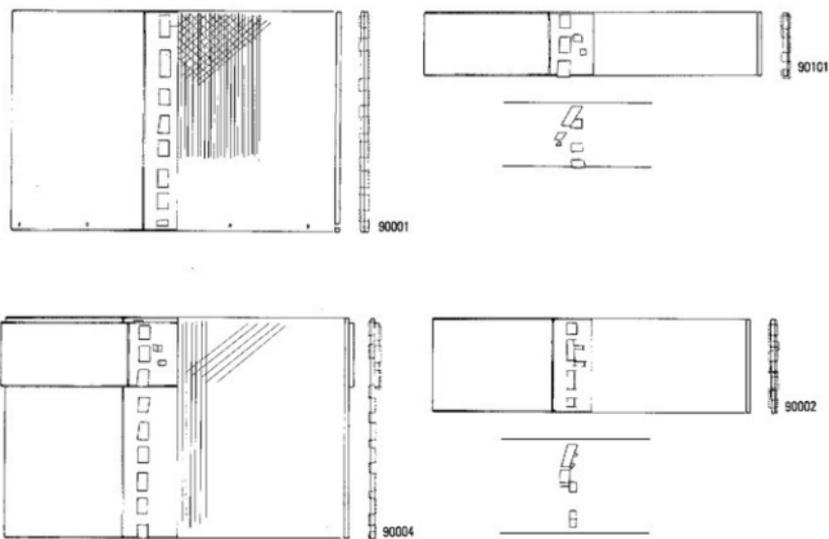


Fig. 106 176-R区SE50出土遺物(1/5)

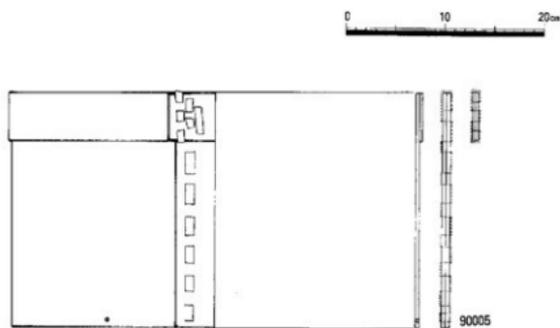


Fig. 107 A1-L区SE153出土遺物(1/5)

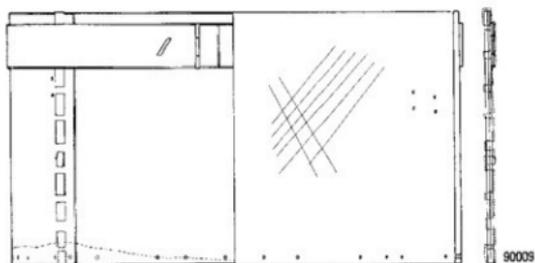


Fig. 108 A-II区SE341出土遺物(1/5)

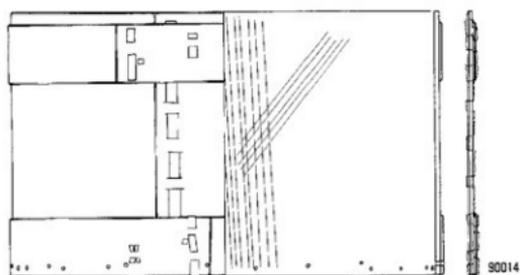


Fig. 109 A-II区SE352出土遺物(1/5)

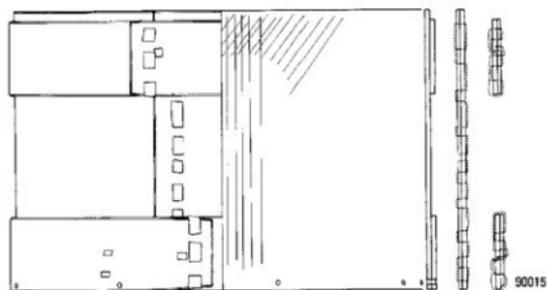


Fig. 110 B区SE752出土遺物(1/5)

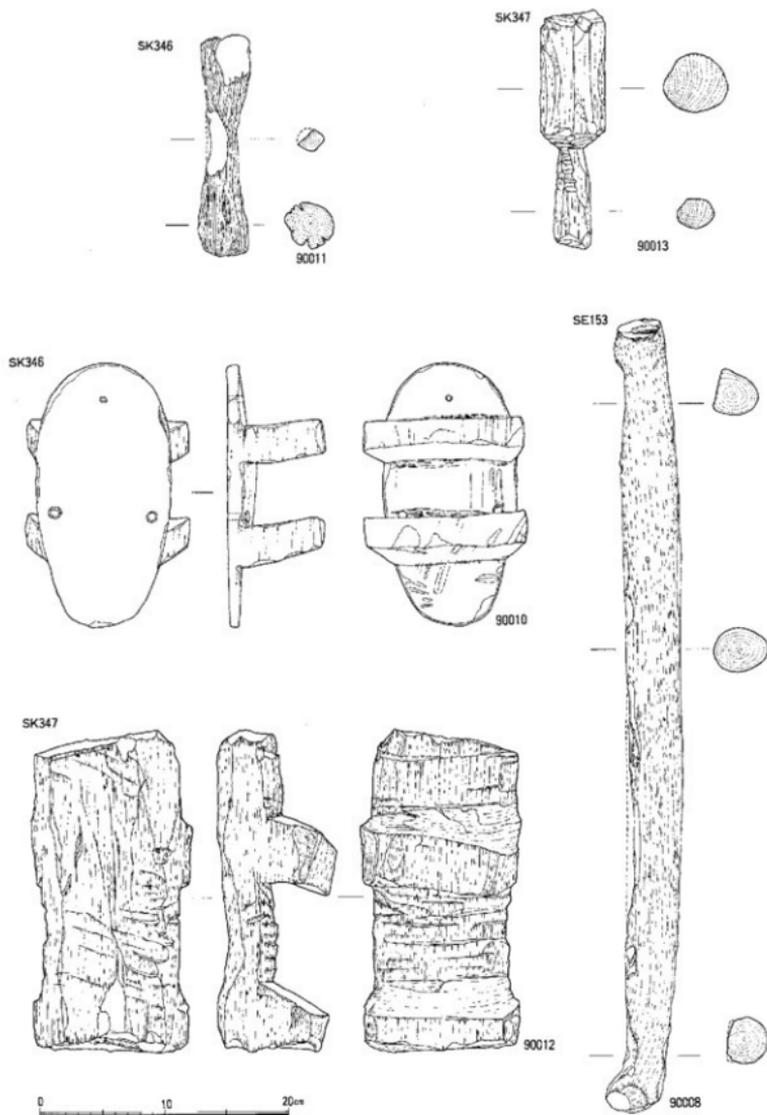


Fig. 111 SE153・SK346・SK347出土遺物(1/4)

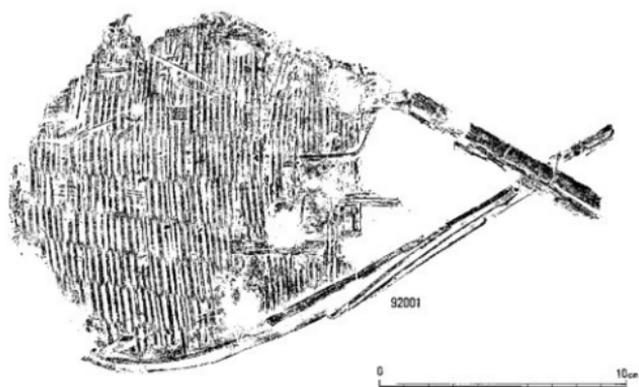


Fig. 112 B区SK350出土遺物(1/4)



Fig. 113 175-R区出土遺物(1/1)



Fig. 114 B区SK624出土遺物(1/1)



Fig. 115 B区遺構検出面出土遺物(1/1)



## IV 小 結

福岡と有明海とを結ぶ低平地、特に御笠川と月隈丘陵との間における地域は、これまで遺跡の所在さえ不明であった地域であった。今回の調査で、この低平地の微高地上に大規模な遺跡が存在することが明らかになった。しかしながら、長さ700mのトレンチを遺跡の北西-南東方向に縦断する形で入れた状態であり、遺跡の全容を明らかにするまでには至らなかった。このため、本章では調査成果と課題を述べ、今後の調査の資料としたい。

### 1. 第2次調査出土の越州窯系青磁、施釉陶器から見た遺跡

調査区は、結果的には長さ700mのトレンチを遺跡の北西-南東方向に縦断する形で入れたことになった。このため、遺物の出土状況から遺跡の内容を知るために、越州窯系青磁、施釉陶器を対象として検討を行った。統計手法的に正しい方法ではないが、越州窯系青磁、施釉陶器の出土した破片点数をそのまま扱ってみた。

A. 緑釉陶器は全て椀・環類の破片で、33点が出土している。2点は中国製、他は京都産と考えられる。177-R・A1-L・A-Iの3調査区で全体の91%が出土し、遺跡の中央部に集中していることを知る。特に177-R・A1-Lの両調査区は調査面積が全体の5%であるが、遺物の占める割合は61%と出土比率が極めて高い。

B. 越州窯系青磁は、碗、壺、水注、鉢などが出土し、172点を数える。その大半は、碗と壺で97%である。碗が遺跡の中央部に77%と集中するのに対し、壺は東半部地域に85%と集中するという結果を得た。

C. 越州窯系青磁の大半は、粗製品の範疇に属するもので、優品はほとんど認められない。

### 2. 遺跡の時期と性格

今回の調査では、遺跡の年代が出土遺物の年代および出土状況から平安時代前半期（9世紀後半～10世紀）と中世（12世紀～14世紀）に比定されるとともに、平安時代前半期遺構の中心が遺跡の中央部、中世遺構の中心は遺跡の南半部に位置することが推定される。

平安時代前半期の遺構から出土した遺物には、越州窯系青磁、白磁、緑釉・褐釉陶器、無釉陶器などがある。直接的な遺構の検出には至らなかったが、官衙的施設存在を考えるのが妥当であろう。本調査地と同様な遺跡に立花寺遺跡（第1次調査地）がある。本遺跡から東へ800m離れた丘陵斜面に立地し、遺物の内容は数量的な差があるが似ている。このことから、立花寺B遺跡と立花寺遺跡は同時期に存在した駅（立花寺B遺跡）とそれに直接関係する人々の施設（立花寺遺跡）である可能性が高い。

中世の遺構・遺物は、遺跡の南半部に集中している。特に、井戸や陶磁器の量は多く、その内容から集落的性格よりも館的性格の遺構と考えられ、土壇墓は屋敷地内埋葬と考えられる。

第 2・3 次 調 査

図 版

PLATES

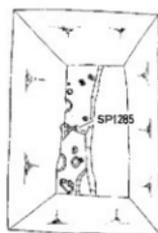


第2次調査SK1345発掘風景(南側)

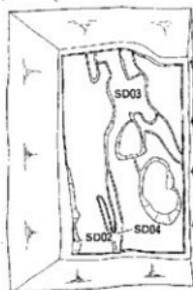




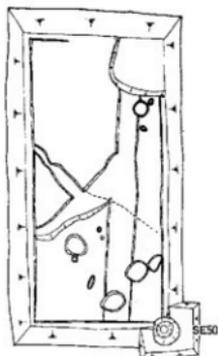
(1) 調査地周辺航空写真



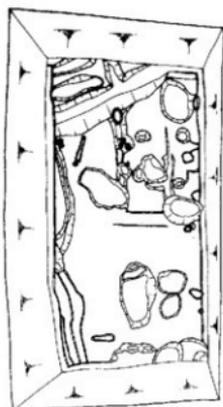
175R



175L



176R



176L

X-02.698 Y-02.980

X-02.700

Y-02.980

X-02.680

Y-02.980

X-02.700

X-02.678

Y-02.980

Y-02.980

X-02.680

X-02.680

Y-02.980

X-02.680

Y-02.980

X-02.680

Y-02.980

Y-02.980

X-02.680

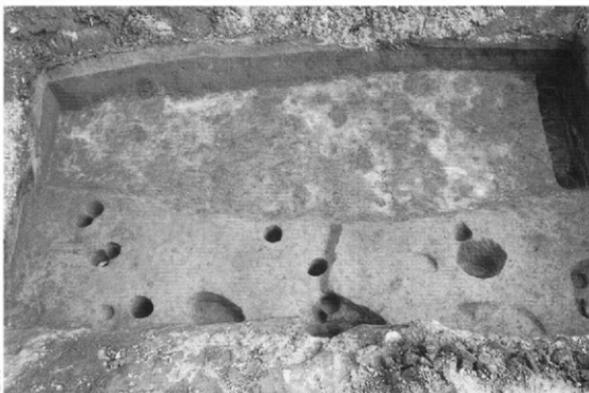
Y-02.980

Y-02.980

X-02.680



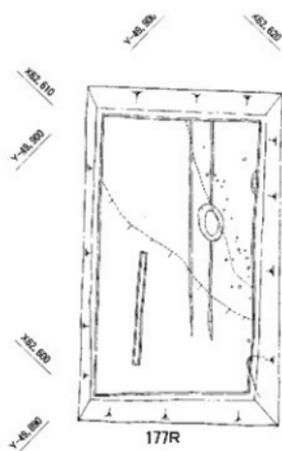
(1) 調査地全景  
(北西から)



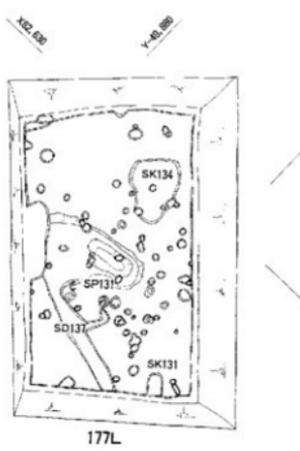
(2) 175-R調査区全景  
(南西から)



(3) 175-L調査区全景  
(南西から)



177R



177L

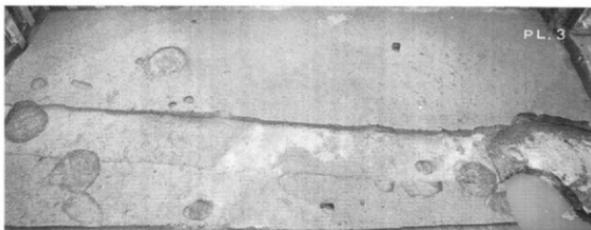


AIR

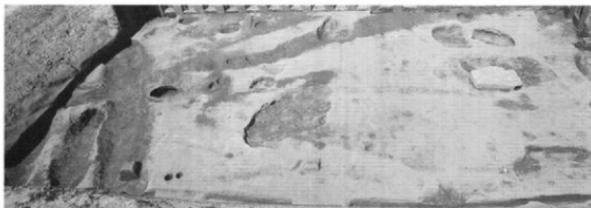


AIL

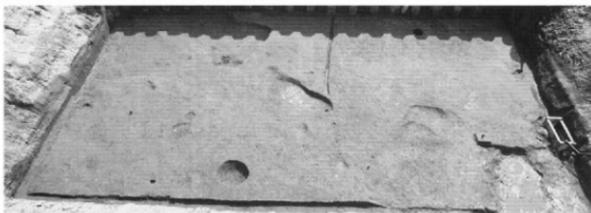
(1) 176-R調査区全景  
(北西#6)



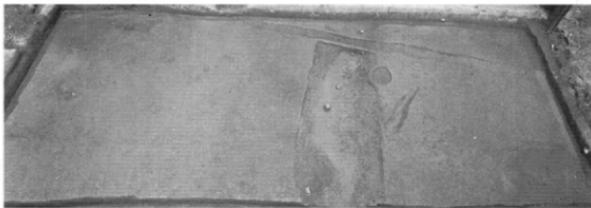
(2) 176-L調査区全景  
(南西#6)



(3) A1-R調査区全景  
(北西#6)

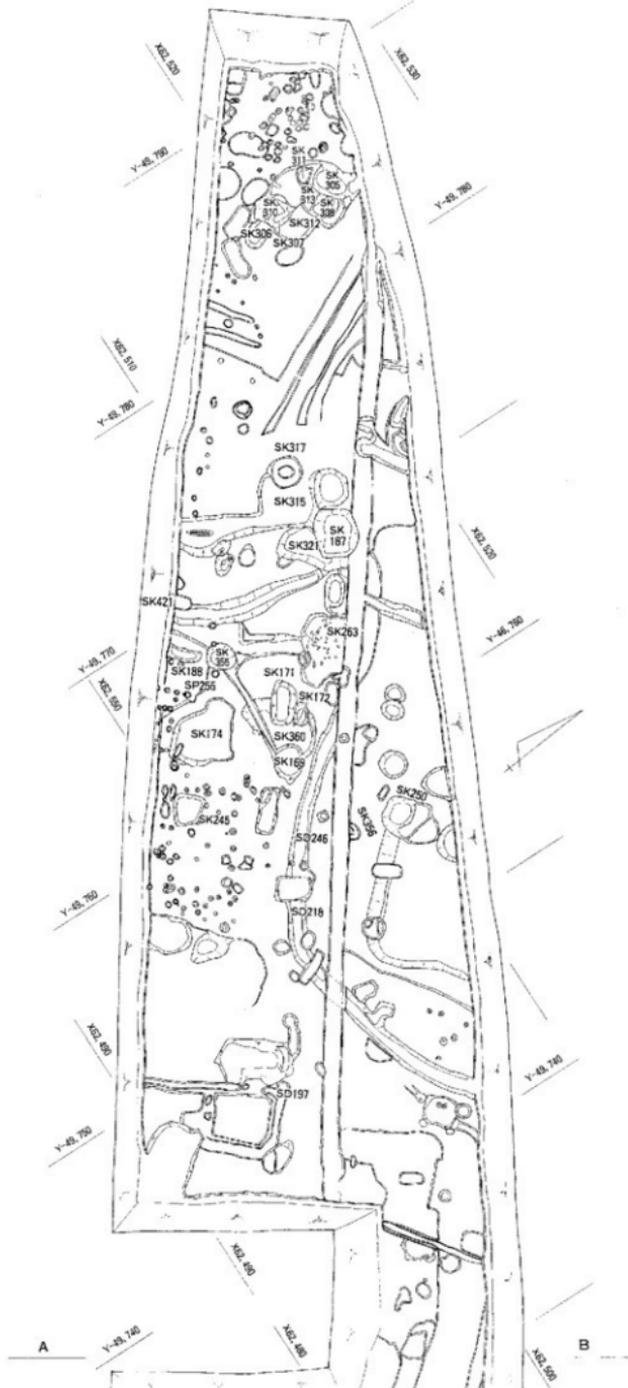


(4) A1-L調査区  
第1面全景  
(南西#6)



(5) A1-L調査区  
第2面北半部  
(南西#6)





A-1 調査区遺構配置図(1/250)



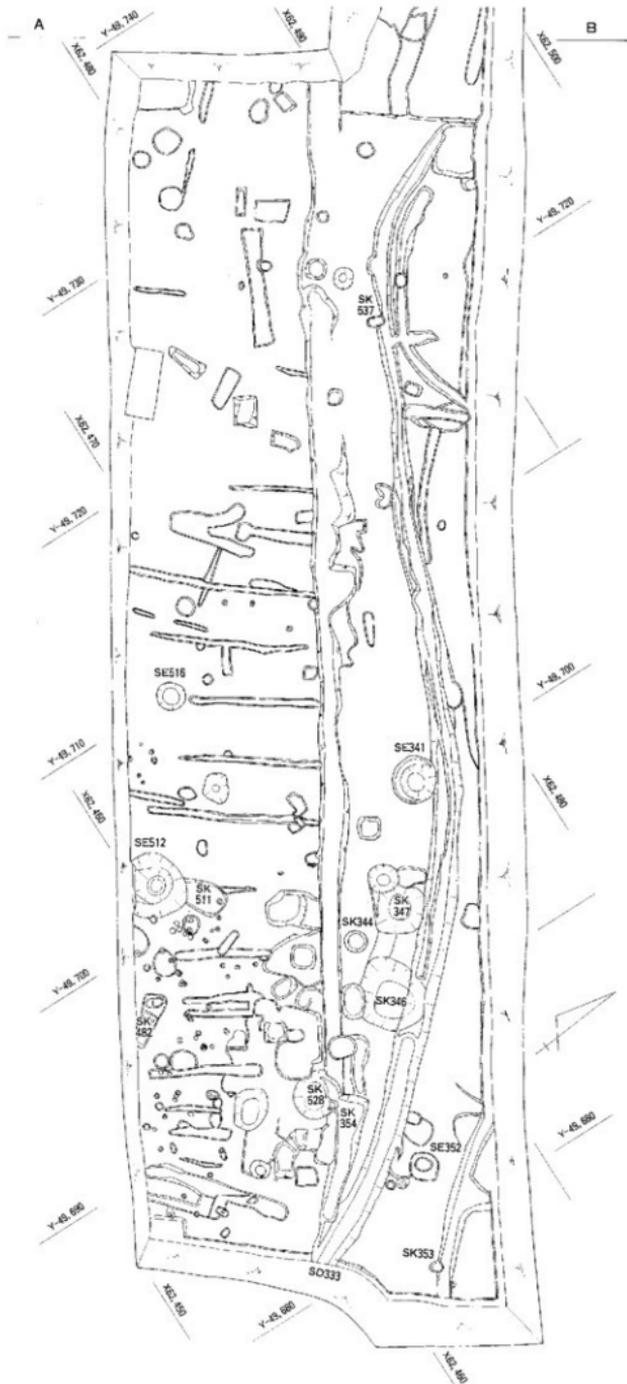
(1) A-I 調査区全景  
(南東から)



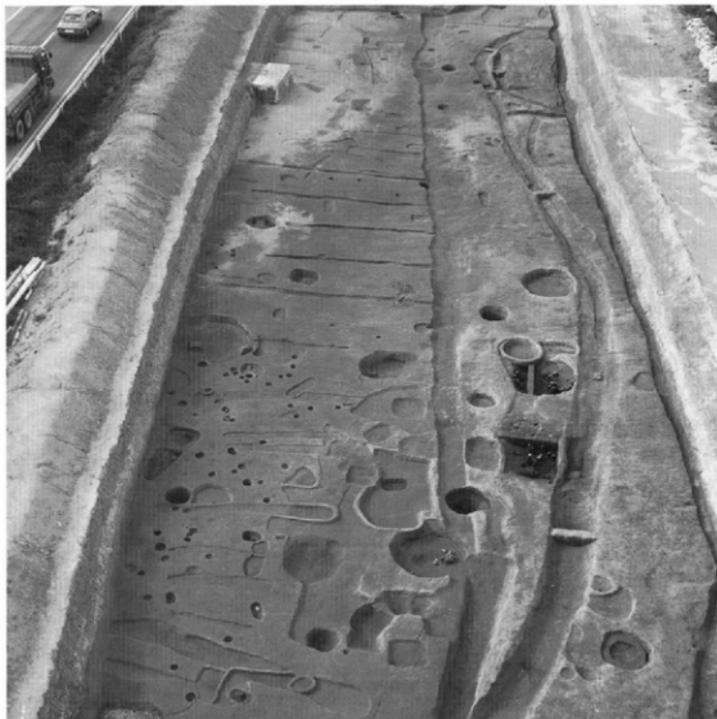
(2) A-I 調査区北半部  
(北東から)



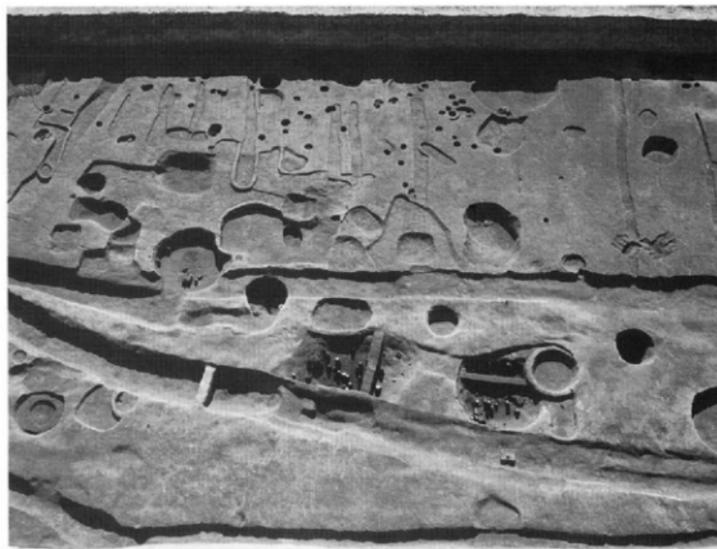
(3) A-I 調査区南半部  
(北東から)



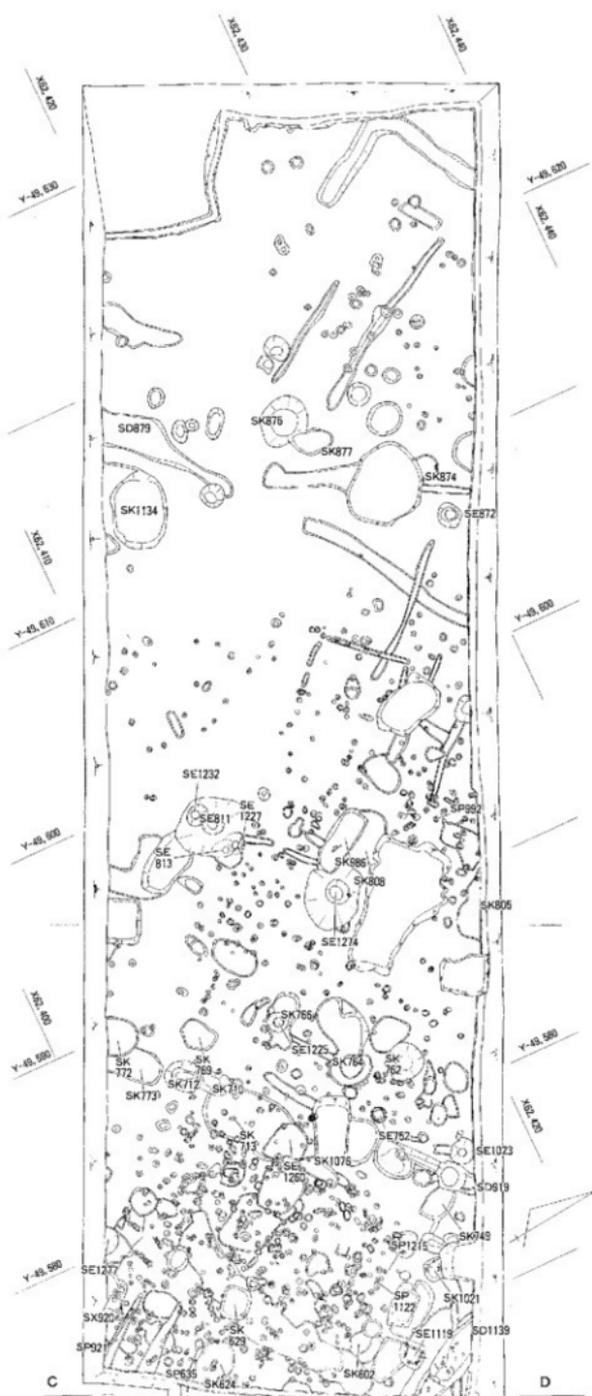
A-II調査区遺構配置図(1/250)



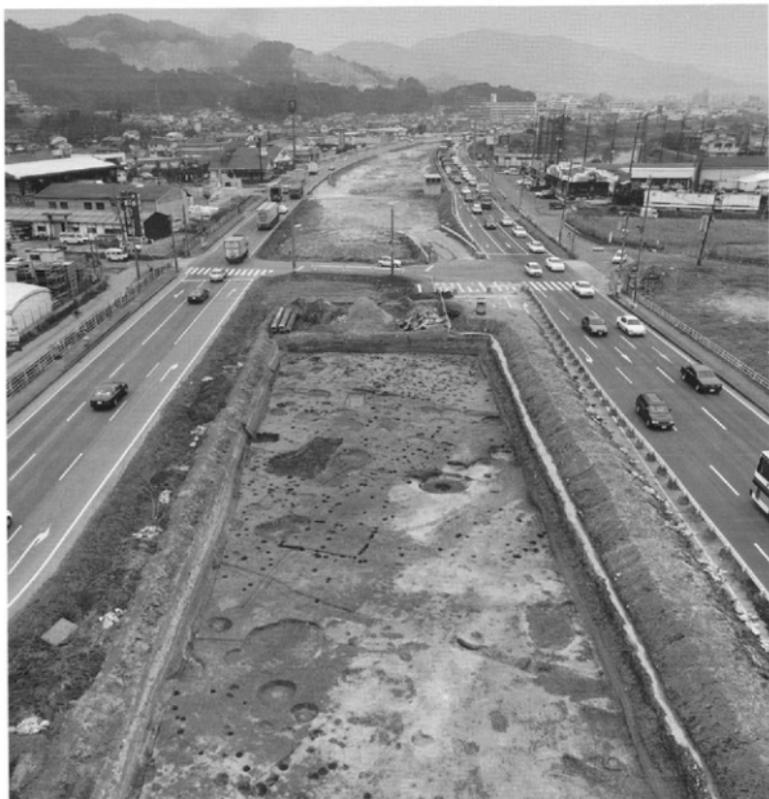
(1) A-II調査区全景(南東から)



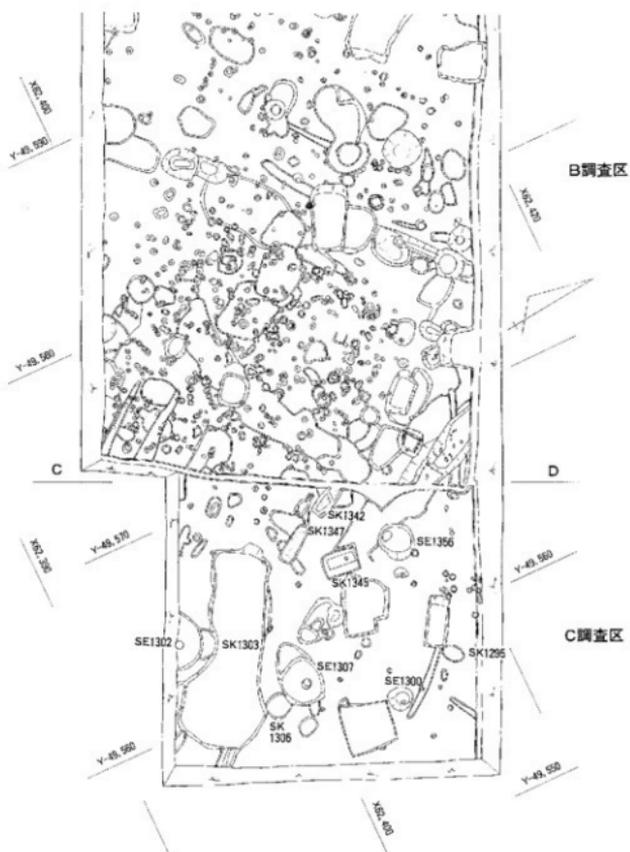
(2) A-II調査区南半部(北東から)



B調査区遺構配置図(1/250)



(1) B調査区全景(北西から)



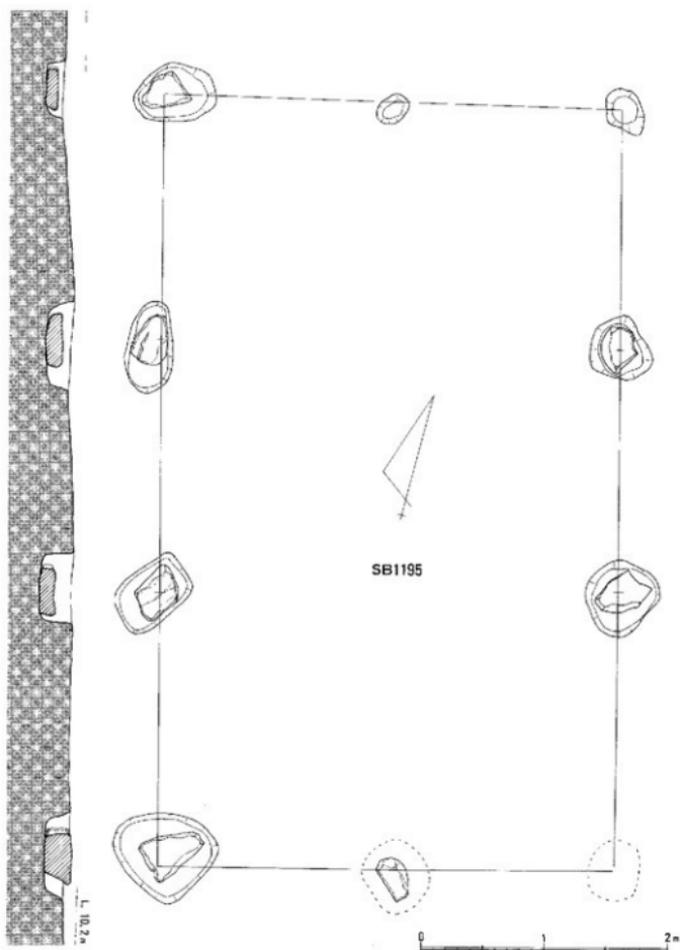
B調査区南半部, C調査区遺構配置図(1/250)



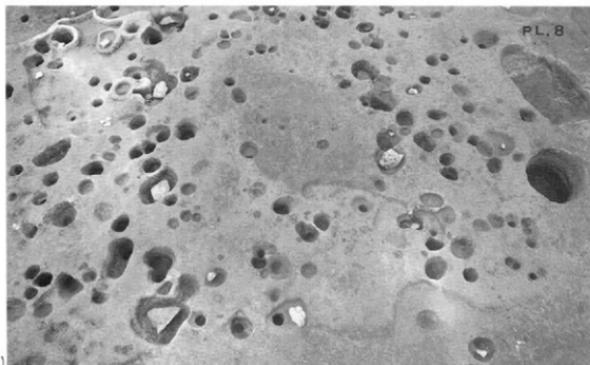
(1) B調査区南半部  
[南西から]



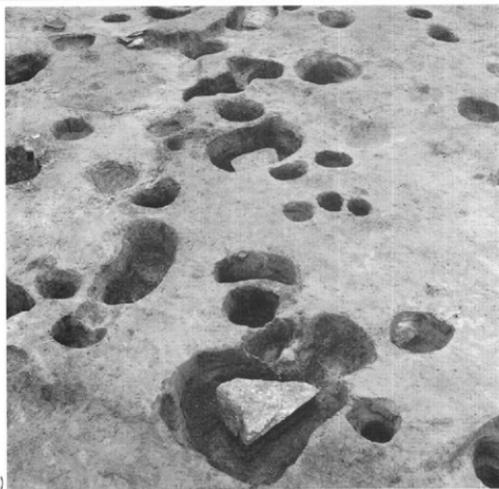
(2) C調査区全景  
[南西から]



SB1195実測図(1/40)



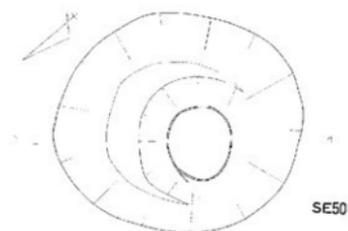
(1) SB1195(南東#5)



(2) SB1195(南東#5)

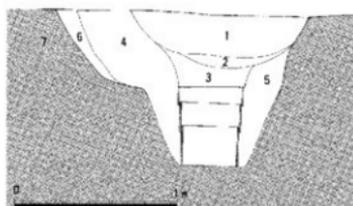


(3) SB1195柱穴裏板(北東#6)



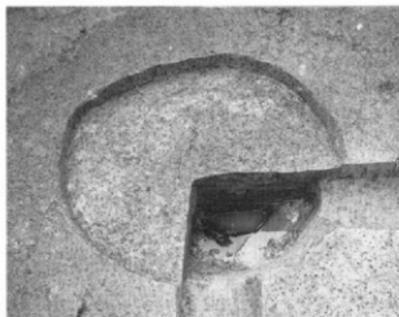
SE50

L. 9.2a



- 1 黒灰色粘性砂質土(炭渣?)
- 2 黒灰色砂質土
- 3 黒灰色砂質土
- 4 灰褐色礫砂
- 5 灰黒灰色粘質土
- 6 黒灰色粘質土
- 7 灰褐色礫砂

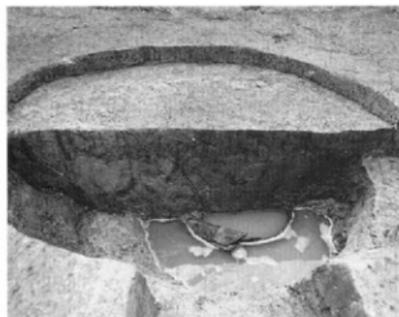
SE50実測図(1/30)



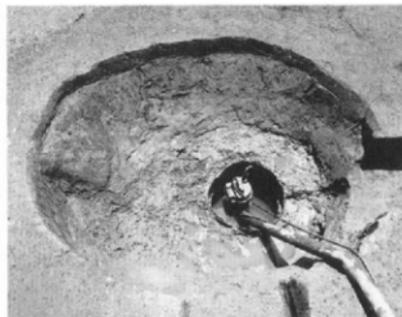
(1) SE50(北西から)



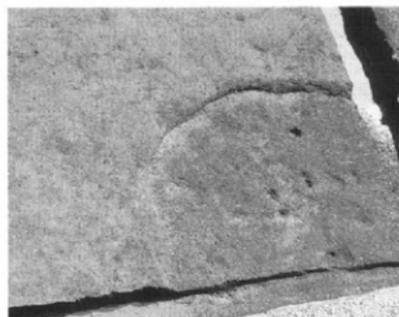
(2) SE50(北西から)



(3) SE50(北西から)



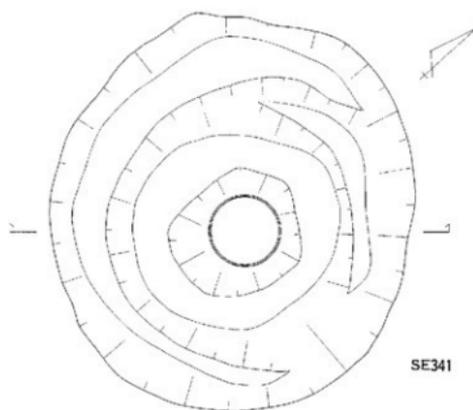
(4) SE50(北西から)



(5) SE153(南西から)

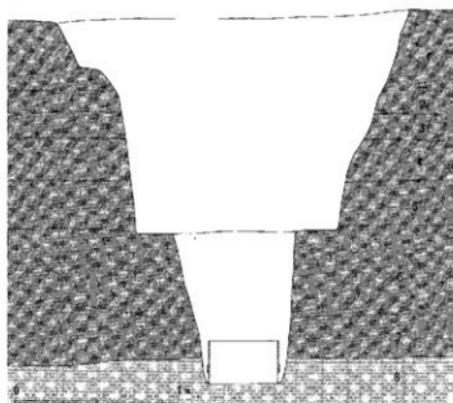


(6) SE153(北西から)



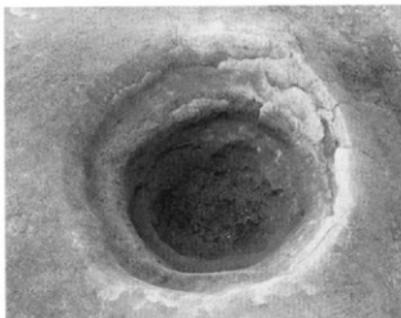
SE341

L 9.8m

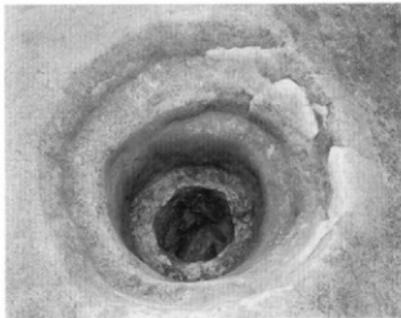


- 1 黄褐色砂質土
- 2 黄褐色～茶褐色細砂
- 3 黄灰色細砂
- 4 黄灰色粘質土
- 5 黄灰色粘土
- 6 黄灰色粘土
- 7 暗青灰色粘性細砂
- 8 暗青灰色細砂(粗砂混り)

SE341実測図(1/30)



(1) SE341(南東から)



(2) SE341(南東から)



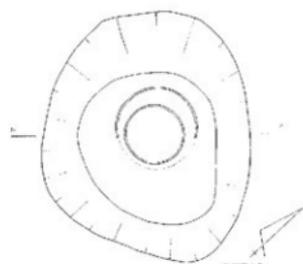
(3) SE341(南東から)



(4) SE341(南東から)

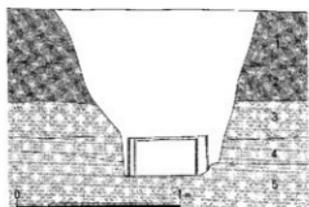


(5) SE341(南東から)



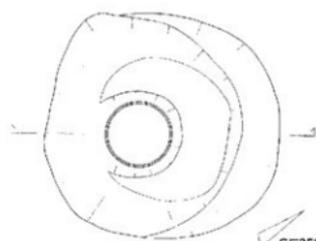
SE516

L. 9.9m



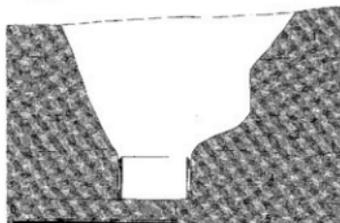
SE516実測図(1/30)

- 1 黄褐色粘性砂質土
- 2 黒灰色粘性細砂
- 3 白色細砂
- 4 緑灰色細砂
- 5 白色～黄褐色粗砂



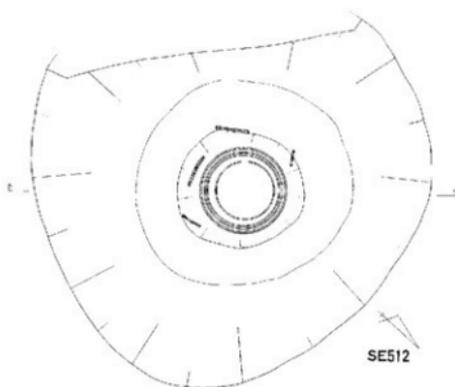
SE352

L. 9.8m



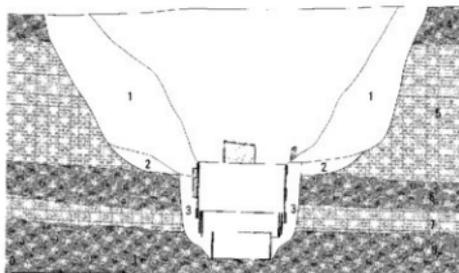
SE352実測図(1/30)

- 1 黄褐色細砂
- 2 緑灰色粘質土
- 3 黄褐色粘性細砂
- 4 黒灰色粘土
- 5 緑灰色粘土



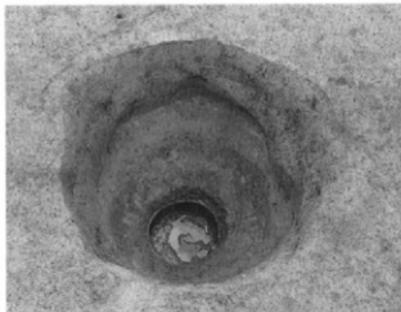
SE512

L. 10m



SE512実測図(1/40)

- 1 赤灰～黄褐色粘性砂質土
- 2 黒灰色粗砂(粘性砂質土混り)
- 3 緑灰色～黄褐色砂(粗砂混り)
- 4 黄褐色砂質土
- 5 灰色細砂と白色砂～粗砂の互層
- 6 黒灰色粘土
- 7 白～褐色細砂
- 8 黄褐色粘土



(1) SE352(南東から)



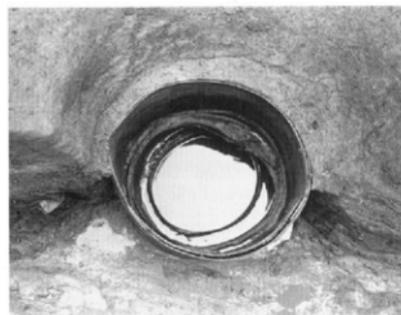
(2) SE352(南東から)



(3) SE512(南東から)



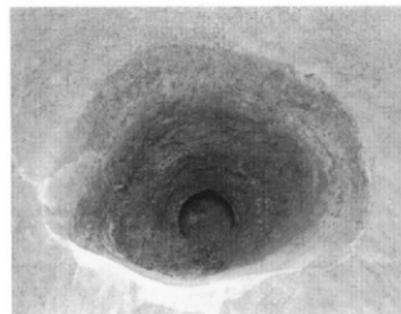
(4) SE512(北東から)



(5) SE512(北東から)



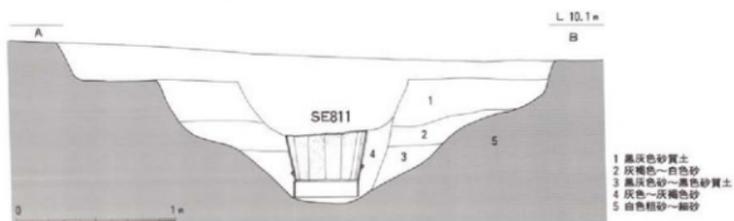
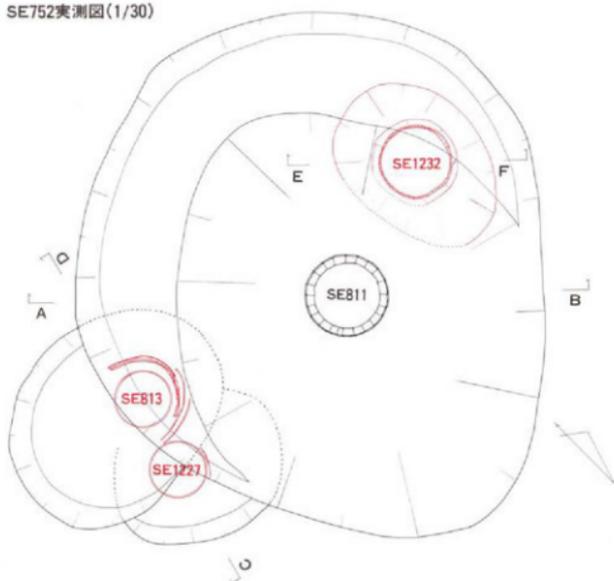
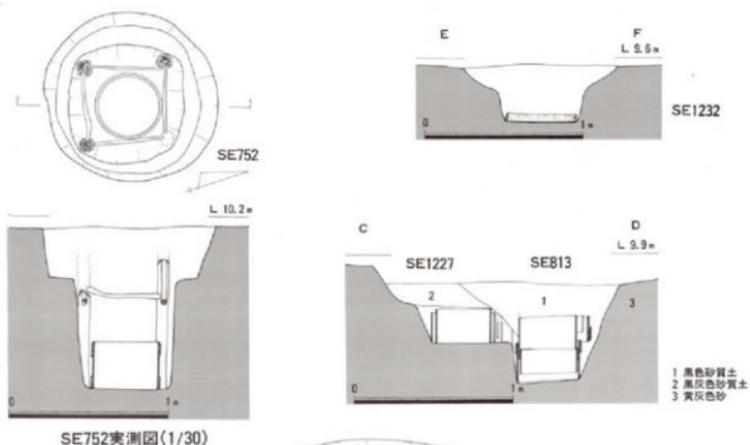
(6) SE512(南東から)



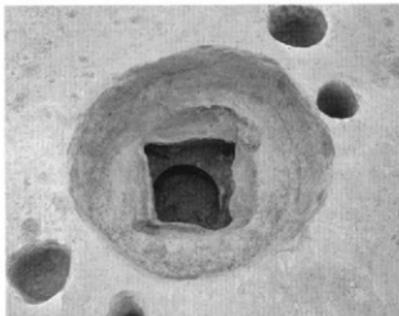
(7) SE516(北東から)



(8) SE516(南東から)



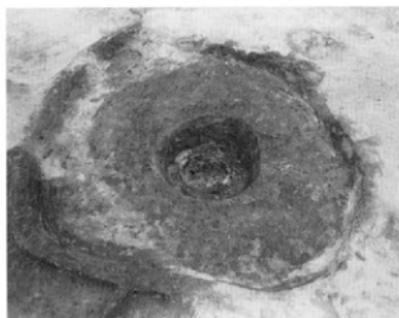
SE811, 813, 1227, 1232, 実測図(1/30)



(1) SE752(北から)



(2) SE752(東から)



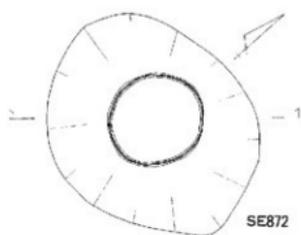
(3) SE811(北東から)



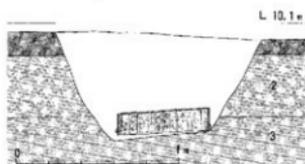
(4) SE811(北東から)



(5) SE811, 813, 1227, 1232(北東から)

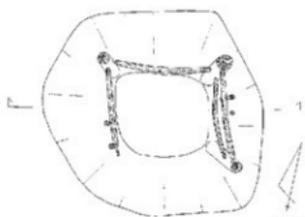


SE872

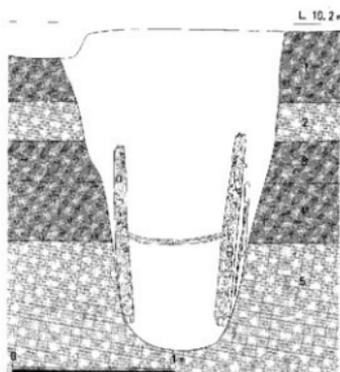


- 1 黄褐色細砂
- 2 棕色~灰色粗砂
- 3 赤褐色~茶褐色砂

SE872実測図(1/30)

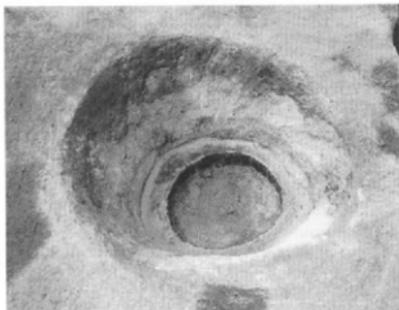


SE1119

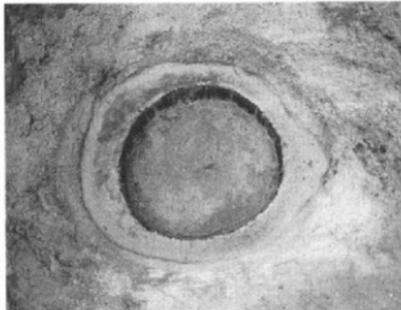


- 1 黄褐色細砂
- 2 黄褐色粗砂
- 3 黄褐色~暗青灰色細砂
- 4 暗茶褐色~黄灰色粘土
- 5 黄褐色~暗灰色粗砂

SE1119実測図(1/30)



(1) SE872(南東から)



(2) SE872(南東から)



(3) SE1119(南東から)



(4) SE1119(南東から)



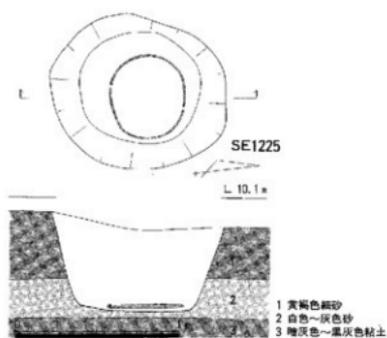
(5) SE1119(南東から)



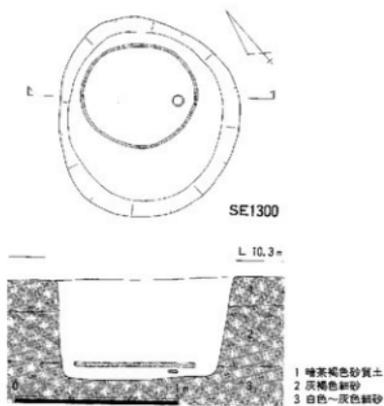
(7) SE1119(南東から)



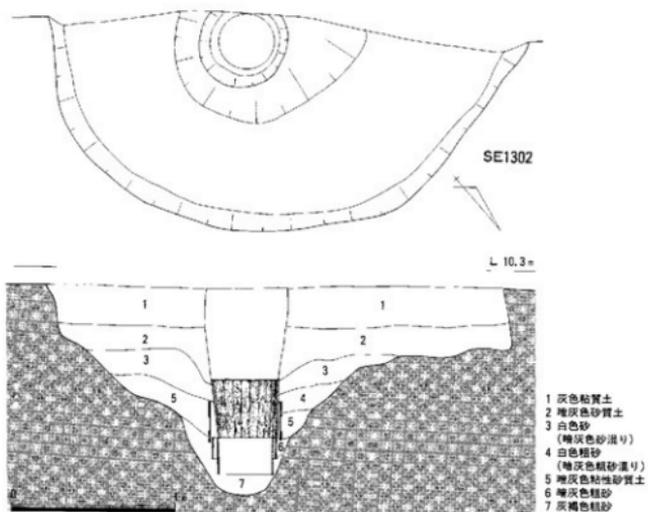
(6) SE1119(南西から)



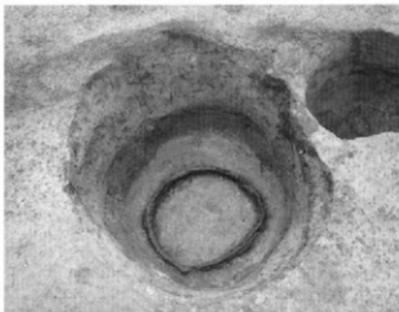
SE1225実測図(1/30)



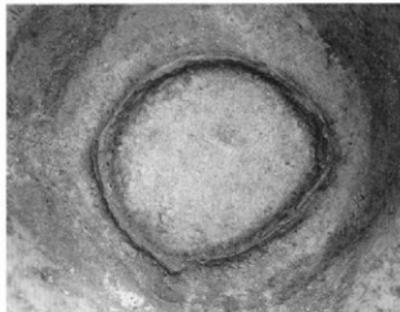
SE1300実測図(1/30)



SE1302実測図(1/30)



(1) SE1225(北東から)



(2) SE1225(北東から)



(3) SE1300(南西から)



(4) SE1300(南西から)



(5) SE1302(北東から)



(6) SE1302(北東から)

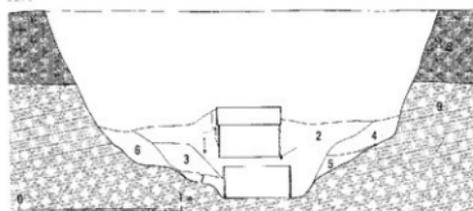


(7) SE1302(東から)



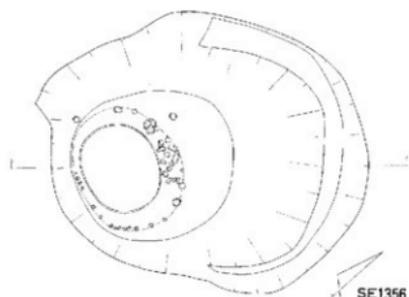
SE1307

L 10.3 m



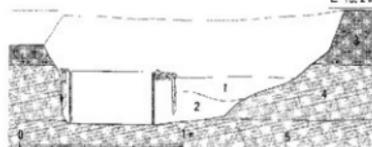
- 1 黒灰色土
- 2 黒灰色粘性砂質土
- 3 黄褐色～灰白色砂
- 4 黄褐色～灰白色砂
- 5 黄褐色砂
- 6 黄灰～白色砂
- 7 黒灰色砂質土
- 8 茶褐色細砂
- 9 灰白色砂～粗砂

SE1307実測図(1/30)



SE1356

L 10.2 m



- 1 黒色砂質土混り
- 2 灰褐色砂質土
- 3 灰褐色砂質土
- 4 茶褐色砂質土
- 5 黄灰～白色細砂～砂

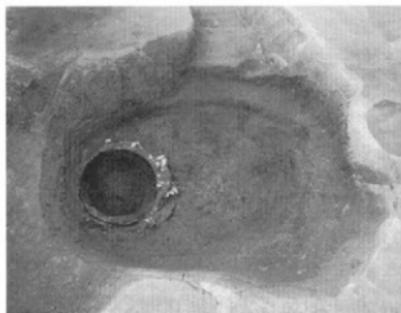
SE1356実測図(1/30)



(1) SE1307(南東から)



(2) SE1307(南西から)



(3) SE1356(南東から)



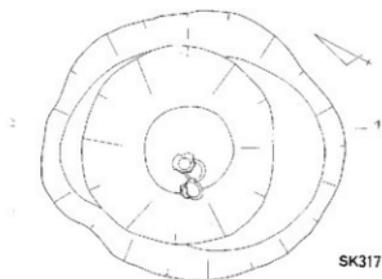
(4) SE1356(南東から)



(5) SE1356(東から)

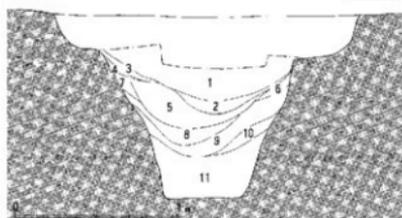


(6) SE1356(南東から)



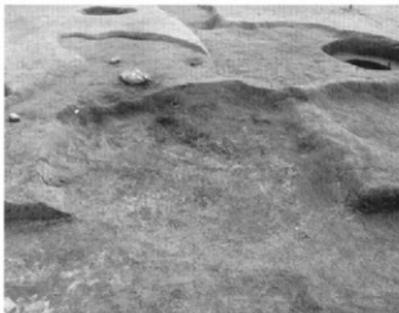
SK317

L. 9.6 m

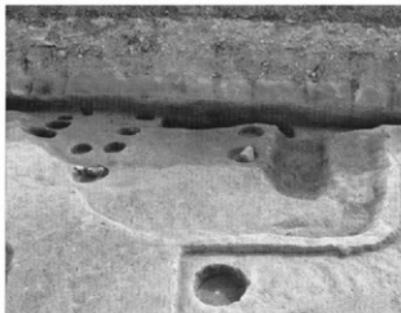


- 1 暗茶灰色粘性砂質土
- 2 黒色土(炭多量に含む)
- 3 灰褐色砂質土
- 4 黒色土(炭多量に含む)
- 5 暗茶褐色粘土
- 6 灰褐色粘性砂
- 7 灰褐色粘性砂
- 8 暗灰色~
- 9 暗茶灰色粘性細砂
- 10 黒色土(炭多量に含む)
- 10 黄褐色細砂
- 11 青灰色粘性細砂

SK317実測図(1/30)



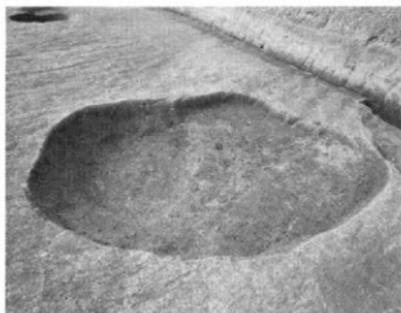
(1) SK187(南東から)



(2) SK188(北東から)



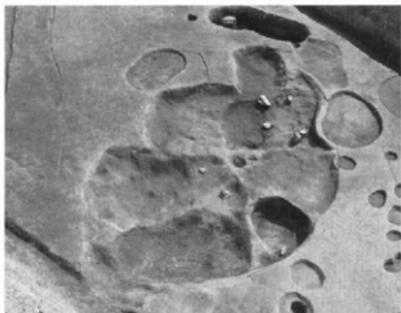
(3) SK245(南東から)



(4) SK250(南東から)



(5) SK263(南東から)



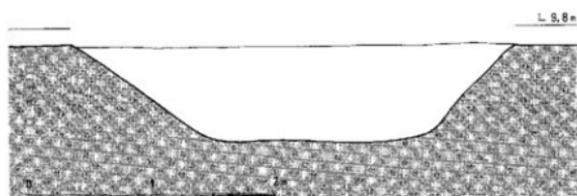
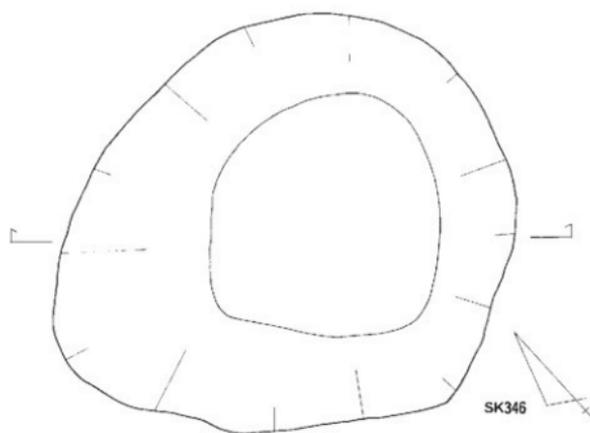
(6) SK305, 306, 310, 312(北から)



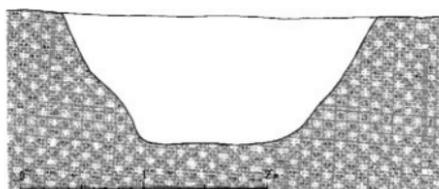
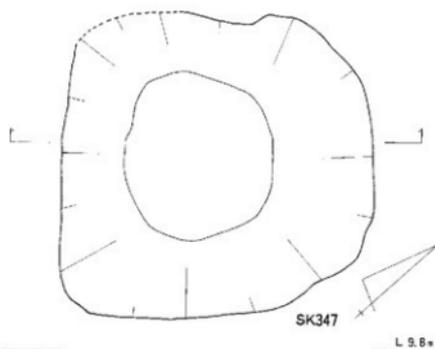
(7) SK317遺物出土状況(南西から)



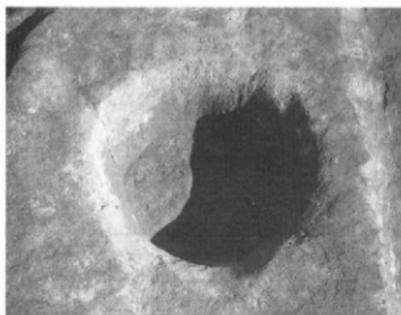
(8) SK317(南西から)



SK346実測図(1/40)



SK347実測図(1/40)



(1) SK344(南東から)



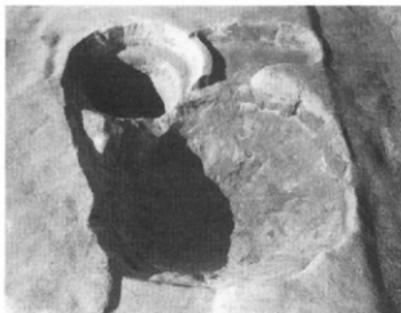
(2) SK346遺物出土状況(南西から)



(3) SK346遺物出土状況(南東から)



(4) SK347上層遺物出土状況(南東から)



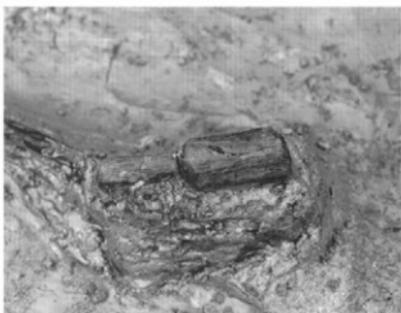
(5) SK347(南東から)



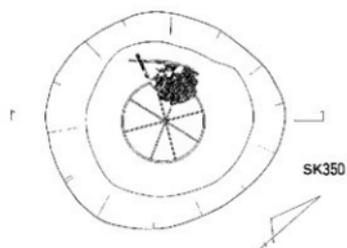
(6) SK347(北西から)



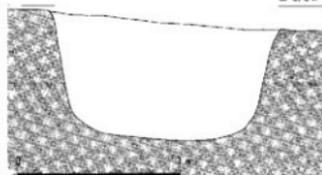
(7) SK347下層遺物出土状況(南東から)



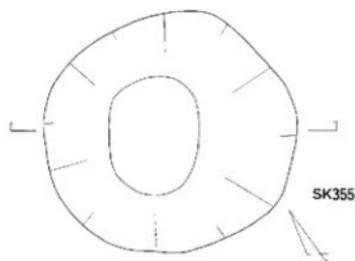
(8) SK347下層遺物出土状況(南西から)



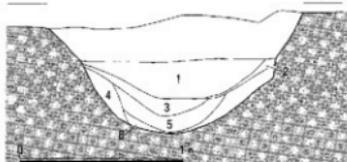
L. 9.6 m



SK350実測図(1/30)

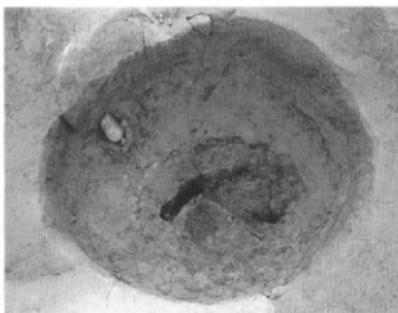


L. 9.7 m

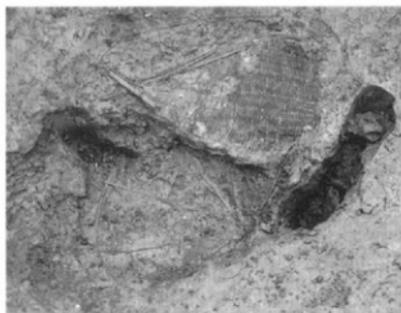


- 1 灰褐色赤灰色砂質土
- 2 黒灰色粘土
- 3 灰色粘砂土
- 4 灰色～灰褐色粗砂
- 5 黒灰色粘土
- 6 灰色粘土

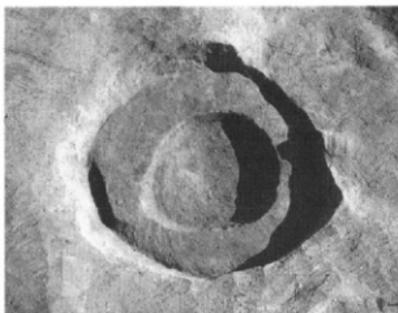
SK355実測図(1/30)



(1) SK350(北西から)



(2) SK350(南東から)



(3) SK353(北東から)



(4) SK355(南西から)



(5) SK360(南西から)



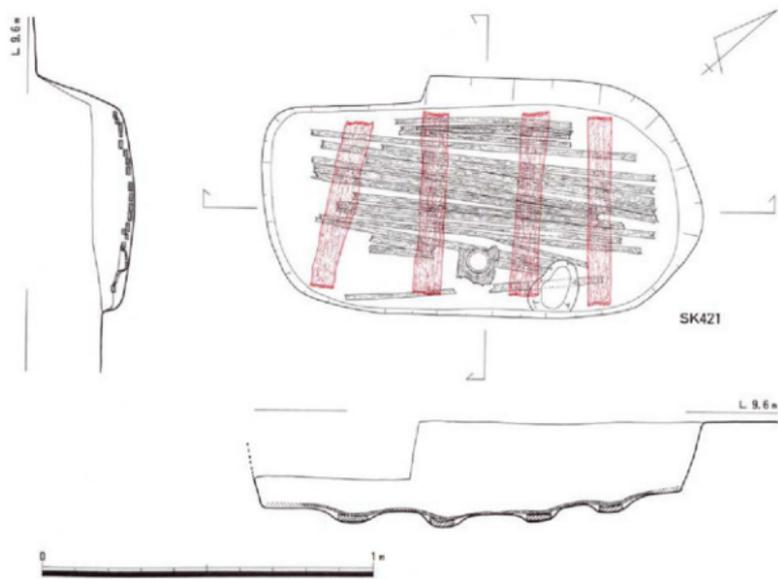
(6) SK360(南から)



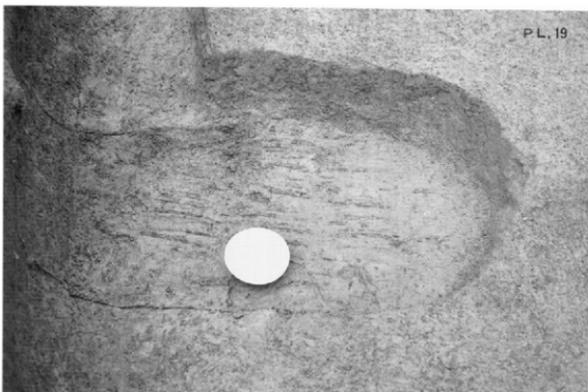
(7) SK528(北東から)



(8) SK528(南東から)



SK421実測図(1/15)



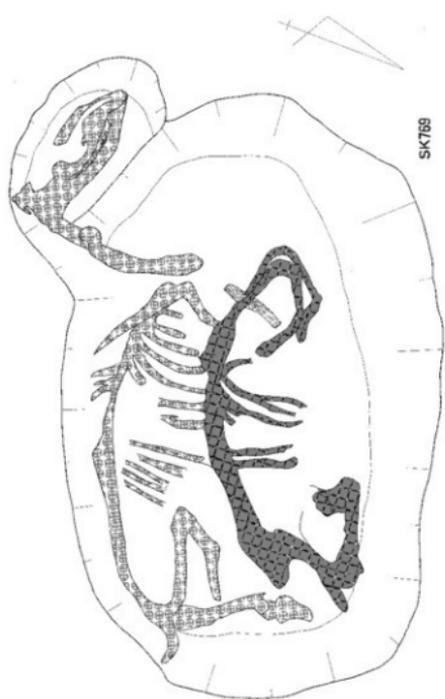
(1) SK421(薄葉から)



(2) SK421(薄葉から)



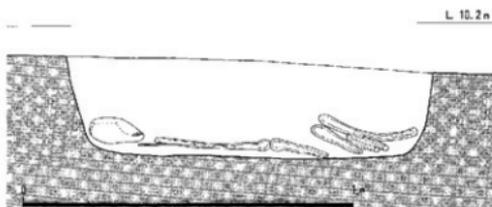
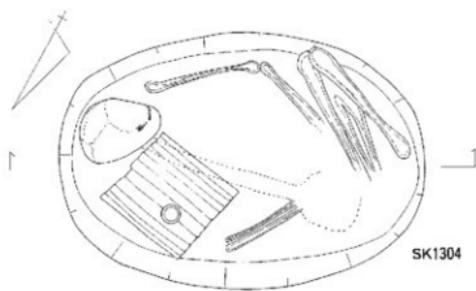
(3) SK421(薄葉から)



SK769家測図(1/15)



(1) SK769(遺物)





(1) SK1295(南西から)

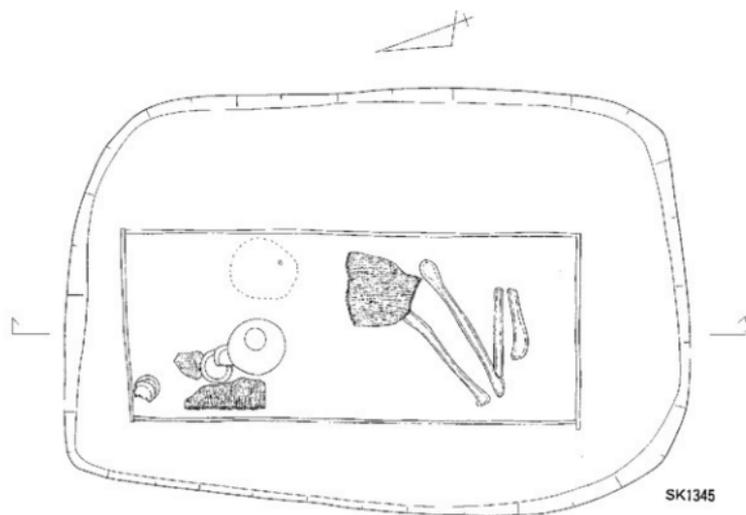


(2) SK1295(南西から)





(1) SK1295(南西#6)



SK1345実測図(1/15)



(1) SK1345(高#5)



(2) SK1345(高#6)



175R区 SP1285



175L区 包含層出土



176L区 包含層



175R区 SE50

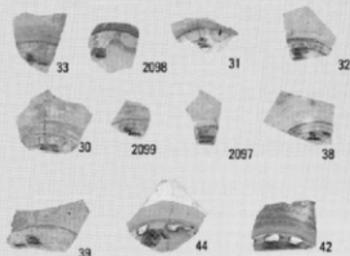
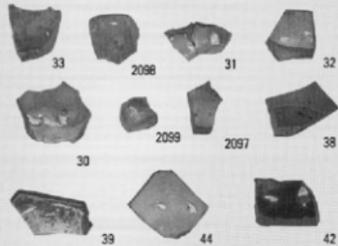


177R区 包含層



第2次調査出土遺物(1)

## 177R区包含層



## 177L区SK131



18



27

## 177L区道構検出面



23



26

## A.L区SD154



49



48



51



52



53



70



72

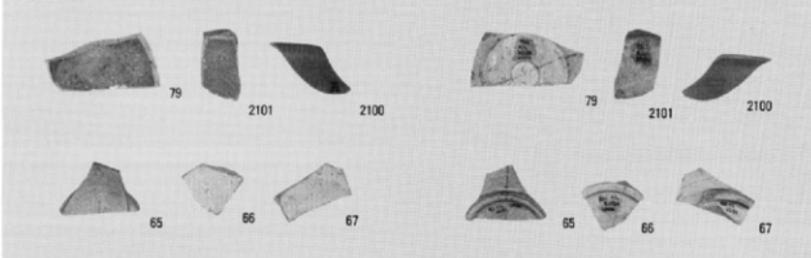


70

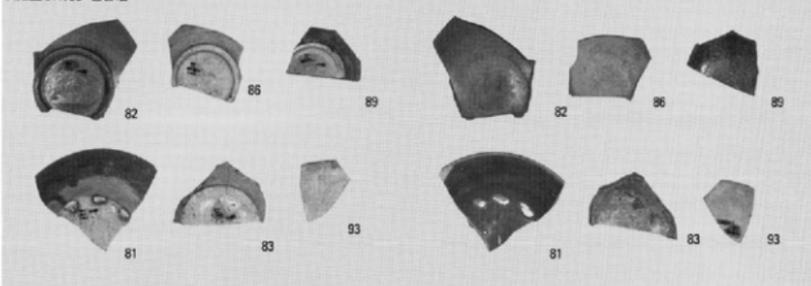


72

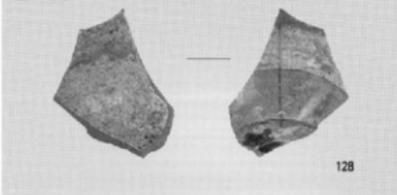
A区SD154



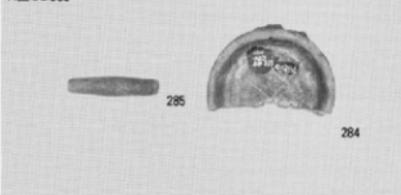
A区SK155・包含層



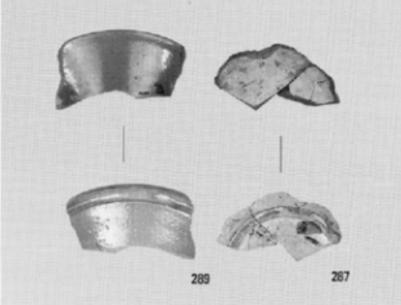
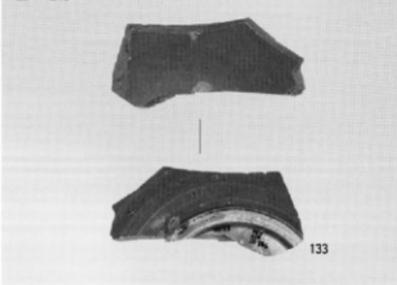
A区SD218



A区SD333



A区SD246



第2次調査出土遺物(3)

A区 SE341



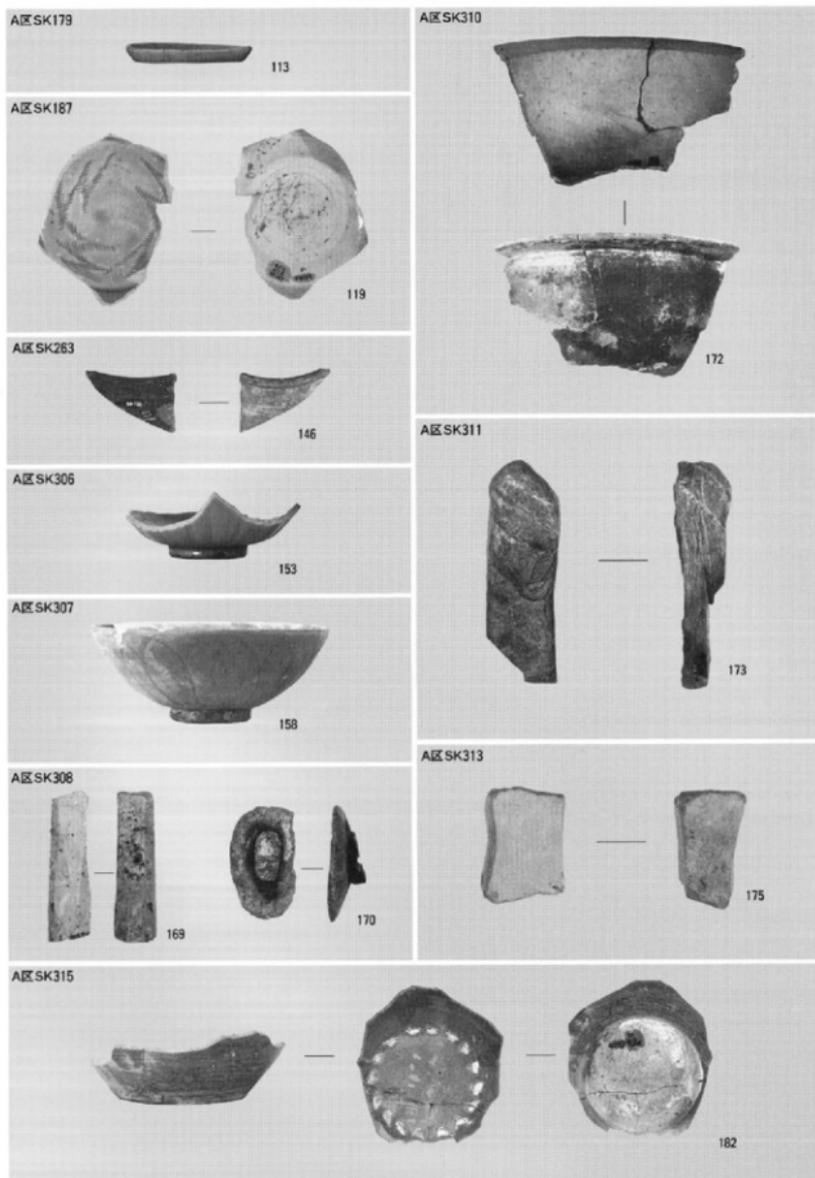
A区 SE352



A区 SE512



第2次調査出土遺物(4)

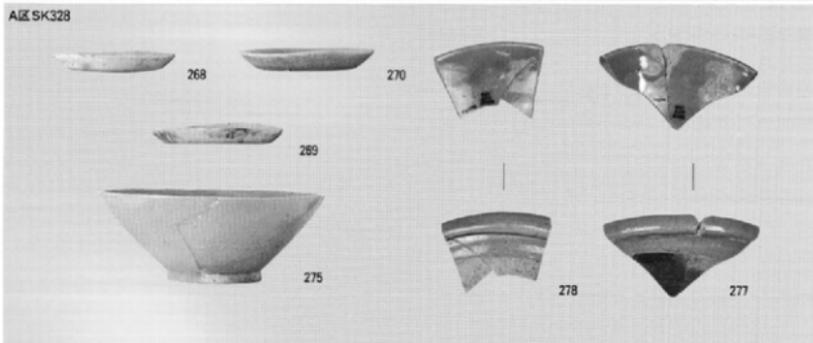


第2次調査出土遺物(5)

A区SK317

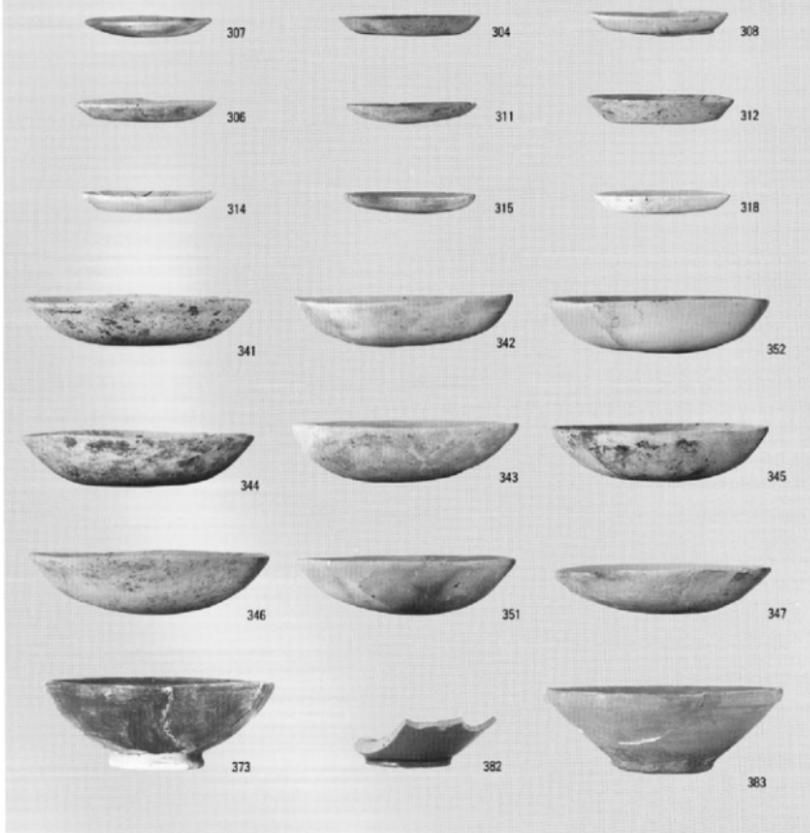


A区SK328



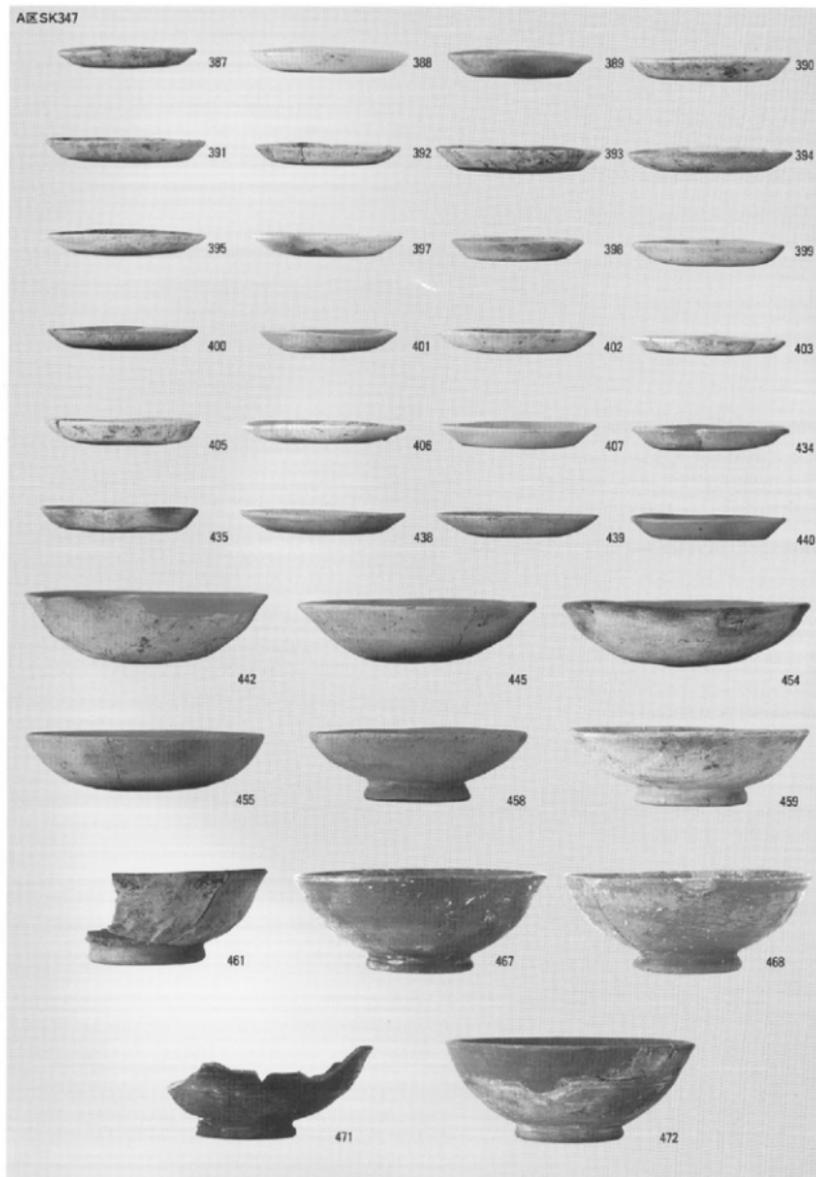
第2次調査出土遺物(6)

A区SK346



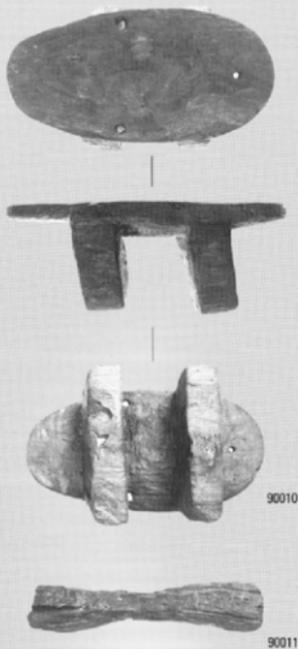
第2次調査出土遺物(7)

A区SK347



第2次調査出土遺物(8)

A区SK346



A区SK347



A1区SE153

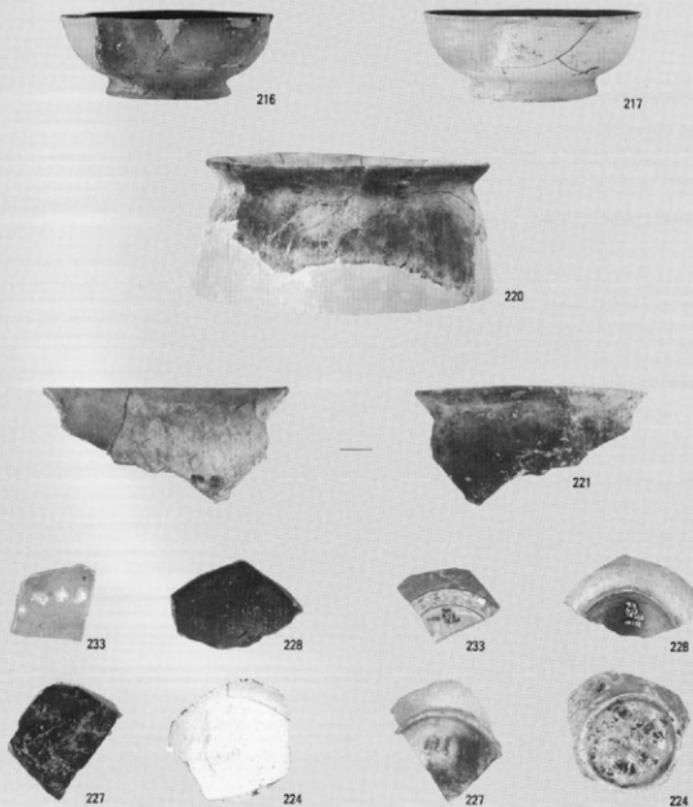


第2次調査出土遺物(9)

A区SK354



A区SK360



第2次調査出土遺物(10)

A区SK421



235

A区SK482



497

A区SK511



503



498



501



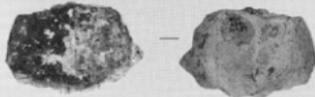
504

A区SK528



533

A区SK537



2105

A区SK537



540



543



544



549

A区SP255



142

A区SP462

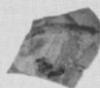
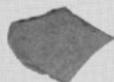


496

A区SX356



2102

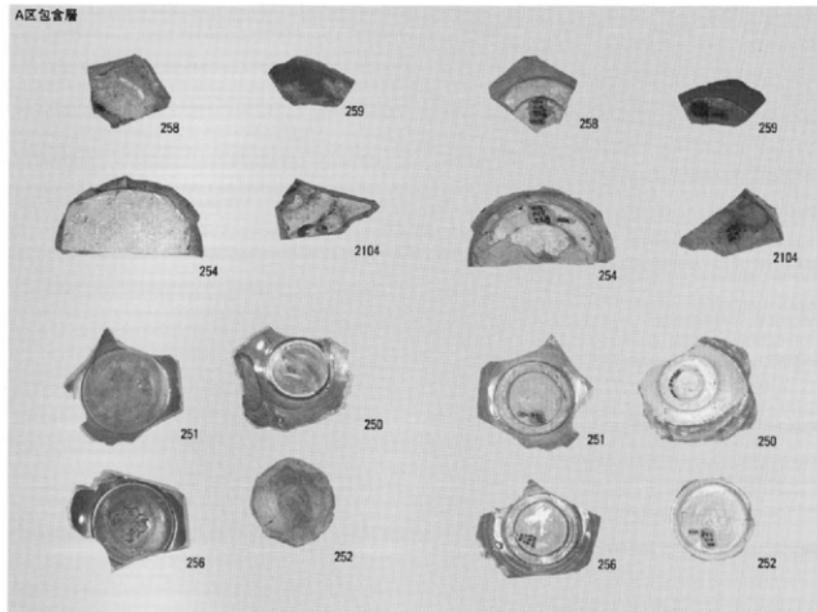


209

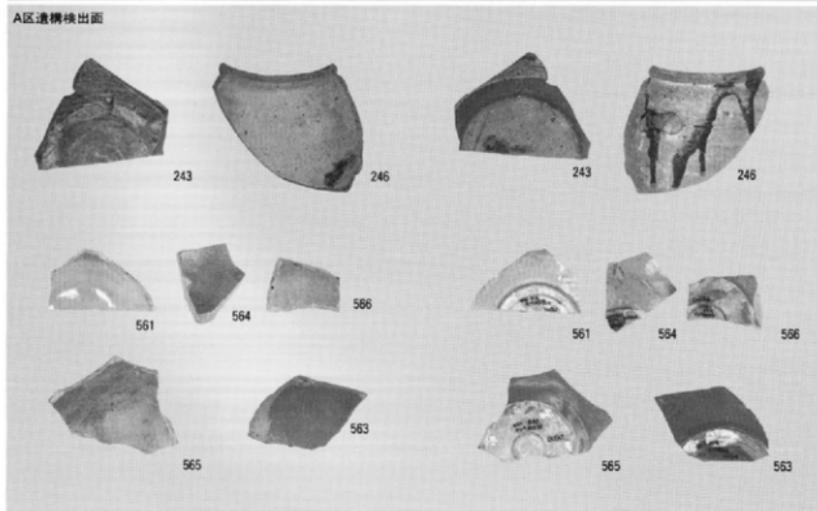


2103

## A区包含層

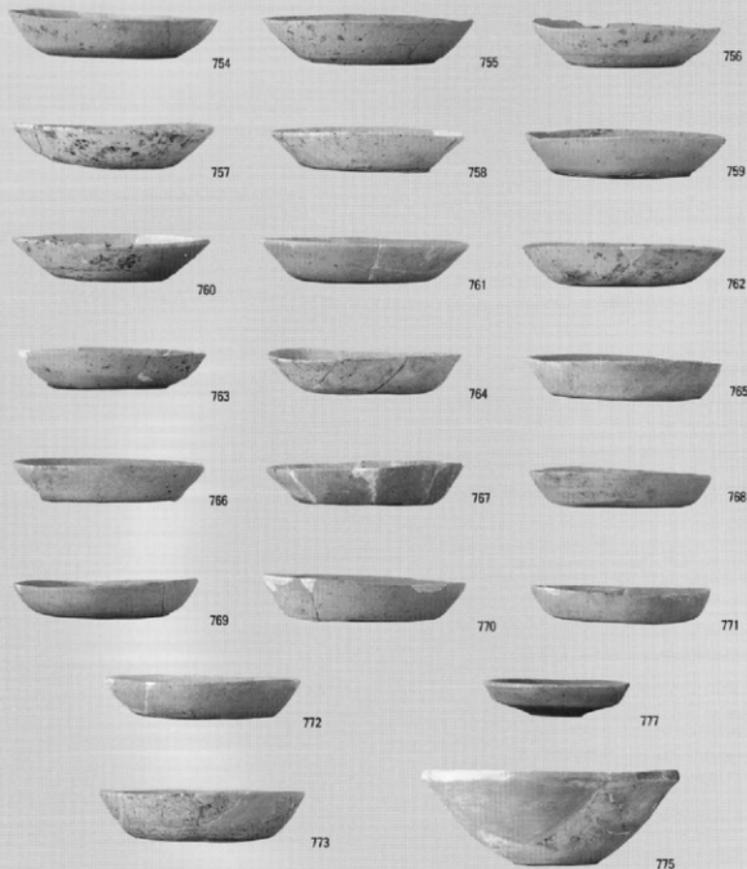


## A区遺構検出面



第2次調査出土遺物(12)

B区SD879

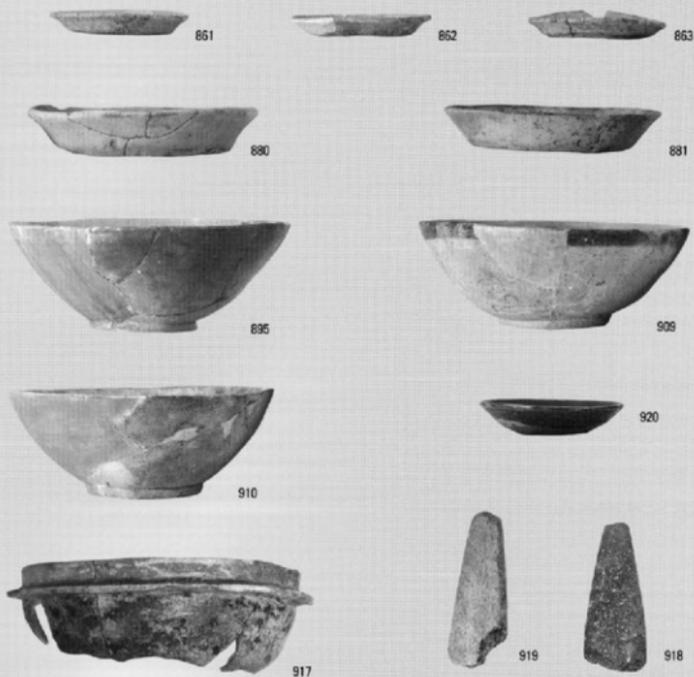


B区SD919



第2次調査出土遺物(13)

B区SD1139



B区SE752



90015



602

B区SE1260



939



942

B区SE1274



943

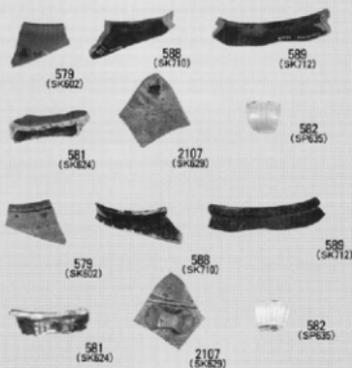
B区SE1277



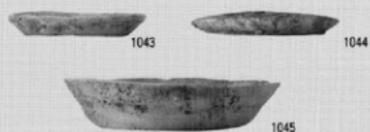
945

第2次調査出土遺物(14)

B区出土陶磁器



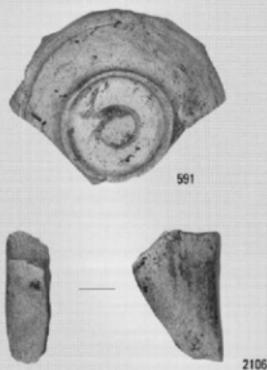
B区SK786



B区SK772



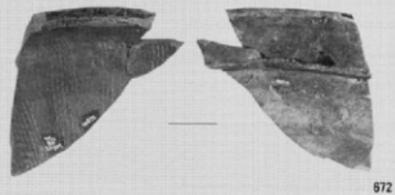
B区SK713



B区SK773



B区SK805



B区SK749

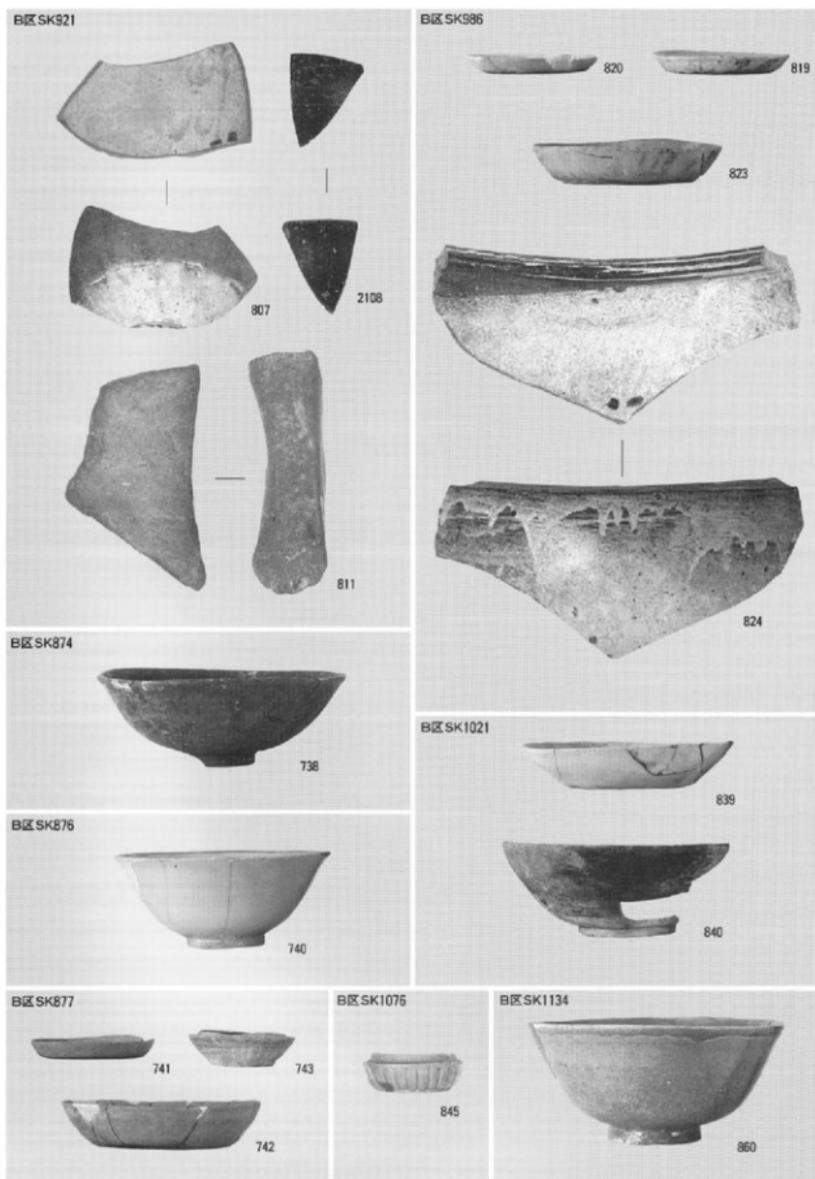


B区SK809



B区SK762



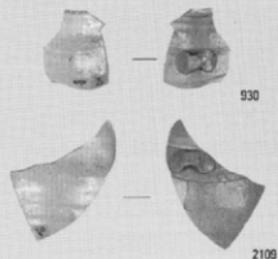


第2次調査出土遺物(16)

B区SP992



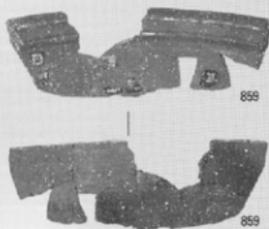
B区SP1215



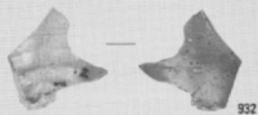
B区SX920



B区I122



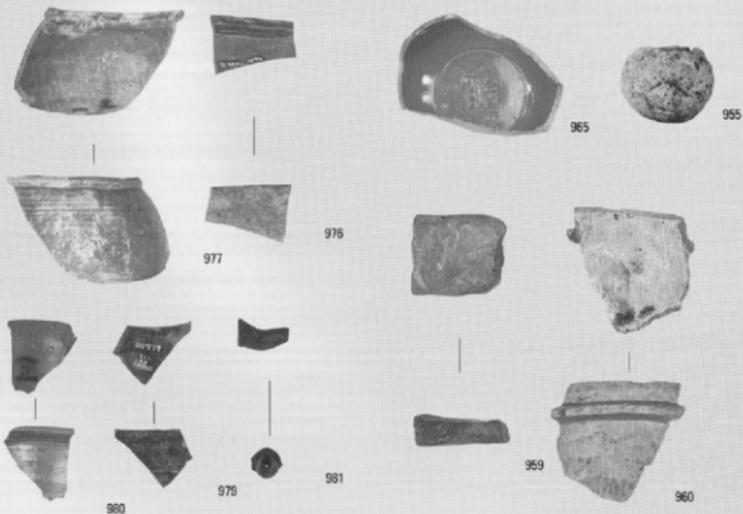
SP1218



SP1255



B区遺構検出面



第2次調査出土遺物(17)

C区SE1300



983



984

C区SK1303



988

C区SE1307



995



996



1005



1008



1007

C区SK1342



1020



1021

C区SK1345



1023



1024



1025

C区SK1295



982



1026

## V 付 論

1. 立花寺B遺跡(第2次調査)出土の馬骨
2. 立花寺B遺跡第2次調査出土の中世人骨
3. 立花寺B遺跡第2次調査における植物遺体分析



## 立花寺B遺跡(第2次調査)出土の馬骨

鹿児島大学獣医学科 西中川駿・吉野文彦

## 1. はじめに

九州で馬歯・馬骨の出土した遺跡は、筆者の調査では73箇所あり、福岡県下では23箇所を数え、そのうち福岡市が15箇所と最も多い。時代別では中世が最も多く、平安、古墳の順である。しかしながら、出上例は報告されていても出土遺体の詳細については報告されておらず、福岡市では博多遺跡群第33次、37次調査の馬歯・馬骨をみるにとどまる。

一方、馬がいつ頃、どこから移入されて来たかは、諸説があり未だに明らかにされていないが、現在のところ弥生中期に朝鮮半島を経由して、渡来してきたという説が有力である。

立花寺B遺跡は、福岡市博多区立花寺にあり、福岡市教育委員会が都市高速道路建設に先立って、平成6年5月～平成8年8月まで発掘調査を行ったものである。時期は弥生時代中期から近世までの広範囲にわたっているが、大部分は9世紀後半～14世紀の遺物が出土している。今回調査を依頼された馬骨は、SK769の上坑内で発見され、出土状況を確認した後、当教室に搬入されたものである。遺体はもろく、破損もあり、計測可能なものは歯のみであり、歯の計測値から体高の推定などを試みたので、その概要を報告する。



Fig. 1 遺跡位置図(1/300,000)



Fig. 2 調査地位置図(1/30,000)

## 2. 出土状況

馬の遺体の出土したSK769は、平面形が隅丸長方形を呈し、東西方向に長軸を有する土坑で、東西1.9m、南北1.4m、深さ0.2mである。土坑内では、PL.1-2-1に示すように、頭を西方に向け、背を南にして左側を下にして横臥した状態で2頭の馬が上、下に埋葬されている。1号馬は頭部からほぼ全身の骨格を判別出来るが、2号馬は胴部と左側の後股を見るのみで、他の骨はない。2号馬は1号馬より表層にあり、土坑の周辺が削平されていることから、2号馬の右側の肢骨や頭、頸部の骨は、削り取られたのかもしれない。

また、土坑内から共伴する遺物がないために、時代の確定は困難であり、周囲の様子から推定して12~14世紀の館に関連するものであると考えられている。

## 3. 出土馬骨の概要

1号馬：1号馬は前述のように左側を下にして横臥した状態で埋葬され、前肢は両足をそろえてみられる。後肢の肢端を除く、ほぼ全身の骨が検出されたが、しかし、骨はもろく、取上げるのに苦勞し、ほとんど計測出来る部位はなかった。頭蓋のみは土と共に取上げ、研究室に持ち帰り、注意深く土を取り除き、PL.2-2に示すように、左側の下顎と上顎の一部を露出できた。この馬は上、下顎共に犬歯があり、雄と判定され、また、右側の下顎第三、四前臼歯(P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>)および第一後臼歯(M<sub>1</sub>)の中心高から、筆者等の方法で年齢を推定すると、15.75±0.59才である。また、左上顎の前臼歯長(158.5mm)から頭蓋最大長を推定すると485.59mmである。一方、下顎角からの全長(Goc-Id)から下顎全長(Cr-Id)を推定すると399.52mmである。これらの値は、現生の宮崎県都井岬の御崎馬より少し小さい値である。また、上記各臼歯の歯冠長や頭蓋および下顎最大長などから、筆者等及び林田らの方法で体高を推定すると、127.04±3.82cmであり、これはトカラ馬(115cm)より大きく、御崎馬(131cm)より小さい馬であることが推定される。

2号馬：2号馬は計測可能な部位は全くなく、左側の寛骨、仙骨(PL.2-5)および左側大腿骨を確認できるのみである。1号馬より少し小さい馬で、年齢、雄雌は不明である。



PL.1 馬遺体の出土状況(左側成人女性:身長153cm)

#### 4. 考 察

馬の埋葬例は、全国各地でみられ、九州でも熊本県の宇土城三ノ丸跡、上の原遺跡、八反原遺跡、宮崎県の祇園原地区遺跡などで検出されているが、いずれも歯の出土が中心で、今回のように動物体が横臥されて、ほぼ全身の骨格が検出されたものは数少ない。

福岡県下では23箇所から馬歯、馬骨の出土例が報告されているが、詳細な報告はない。博多遺跡群第33次調査(博多区祇園町)からは前肢骨および1部の後肢骨が検出され、それらは少なくとも2体のものであり、体高は130cm前後のものと推定されている。また、博多遺跡群第37次調査(博多駅1丁目)からは臼歯を伴った上、下顎骨のみの出土で、臼歯の計測値から9才で、体高128.26±1.98cmと推定されている。今回のものはこれら2調査地のものより体高は低く推定されたが、15、6歳という高年齢であり、中型馬の下限に入るものと思われる。鎌倉市の材木座遺跡や千葉地東遺跡から出土する馬骨も中型馬に属するもので、中世の馬は、現生の木曾馬(134cm)や御崎馬(131cm)と同じ大きさの馬であったことが想像される。

これらの馬の祖先が、いつ頃、どこからわが国に移入されて来たかは、未だに明らかにされていないが、古墳時代になると、全国各地から馬具や馬歯、馬骨が出土していることから、これ以前に民族の移動と共に、持ち込まれたことは事実であろう。長谷部は熱田、轟、出水貝塚からの馬歯、馬骨を調査し、石器時代に馬のいたことを論考しているが、近年C<sup>14</sup>やフッ素による年代測定で縄文時代の出土馬骨は時代が悉く新しくなっており、渡来の時期は縄文遺跡からの出土例のない限り、現在のところ弥生中期以降で、その経路は朝鮮半島経由説が有力になっている。

立花寺B遺跡を遺した人々は、御崎馬と同じ大きさの中型馬を飼養し、交通の運搬や騎馬に使役していたことがうかがわれ、また、本遺跡の特徴として、同じ土坑内に2頭の馬が埋葬されていたことは、老齢馬への殉葬か、疾病死亡による合葬などが考えられる。

#### 5. ま と め

立花寺B遺跡(第2次調査)出土の馬骨について調査した。

1. 土坑SK769から2体の馬遺体を検出した。1号馬は頭、胴、四肢骨のあるほぼ全身骨格がみられたが、2号馬は胴骨と左側後肢骨のみであった。

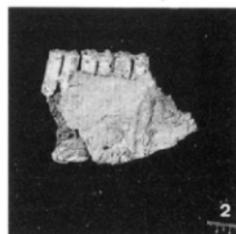
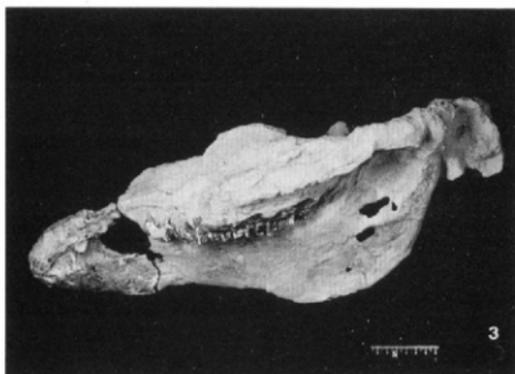
2. 1号馬の上顎および下顎臼歯から頭蓋および下顎最大値を推定し、さらに体高を推定すると、127.04±3.82cmであり、これは中型馬に属することがわかった。また、この馬は大歯を有することから雄と判断され、臼歯の計測値から15.75±0.5(15~16)才と推定された。

#### [参考文献]

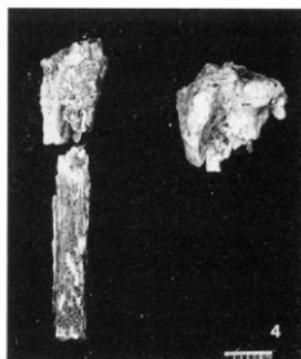
1. 長谷部晋人：石器時代の馬に関して、人類誌、40(4)131-135(1925)
2. 林田重幸：日本在馬の系統に関する研究、1-180、日本中央競馬会、東京(1978)
3. 林田重幸・山内忠平：馬における骨長より体高の推定法、鹿大農学術報告、6、146-156(1957)
4. 西中川峻 他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究、文部省科学研究費補助金(一般B)研究成果報告書1-197、(1991)
5. 芝田清吾：日本古代家畜史の研究、100~189、学術出版会、東京(1969)



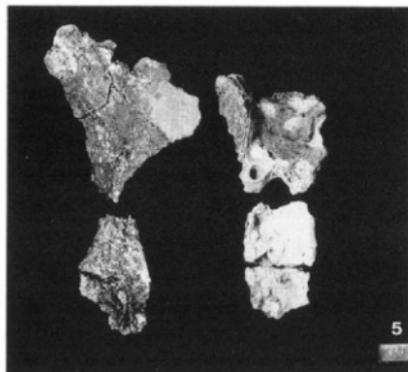
(1) 馬遺体の出土状況(上#1号馬、下#2号馬)

(2) 1号馬の右下顎骨(左からM<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>)

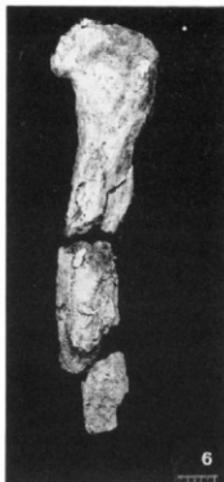
(3) 1号馬の左側上顎、下顎骨(切歯、犬歯、臼歯がみられる)



(4) 1号馬の左中手骨(左)と左跗骨



(5) 2号馬の左寛骨(左)と仙骨



(6) 2号馬の左大腿骨

## 立花寺B遺跡第2次調査出土の中世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究科 中橋孝博

## はじめに

福岡市とその周辺は、様々な歴史遺構、遺物と共に、これまで相当数の人骨資料も出土し、歴史時代の人骨形質に見る時代変化や都市生活の影響などに関する興味深い事例を提供し続けている。

福岡市博多区立花寺における道路建設工事に伴った発掘調査により、中世初期に属する人骨2体が新たに出土した。保存不良のため、形態的な検討はできなかったが、以下に知り得たところを報告する。

## 遺跡・資料

立花寺B遺跡は、福岡空港にも近い博多区立花寺の3号線バイパス路上に見出された遺跡で、1995年度の福岡市教育委員会による発掘調査によって、9世紀から14世紀頃にいたる遺構、遺物が検出された。人骨はその内の木棺墓、土塚墓のそれぞれ各一基から出土した。副葬された青磁碗や土師皿などに関する考古学的検証から、いずれも12～13世紀の遺骨と考えられている。

## 観察所見・考察

## 1, SK-1295 (男性・熟年)

長径110cm、短径80cmの、ほぼ楕円形の土塚中に見出されたもので、体軸を北東に向け、やや左(東)に身体を向けた仰臥屈葬のかたちで埋葬されていた。上肢は、左右とも上腕をやや外側に広げ、肘関節を緩く曲げて両手を腰の上あたりに置いている。下肢は、少なくとも左は股関節、膝関節ともに強屈して、大腿骨、下腿骨を左(ほぼ東)に倒している。右脛骨の破片も、左側の下腿骨に平行して確認できるので、右下肢も同様に強屈していたものと見なされる。

頭蓋の一部や四肢骨については、以上のようにその輪郭がある程度観察できるが、頭蓋の大部分、脊椎の軀幹部や骨盤などは、その位置がかりうじて見分けられる程度で、形態的な詳しい特徴は観察不能であった。ただ、右下顎大白歯がかなり摩耗し、また、サイズも大きく、さらに大腿骨骨頭の径が44～45と、現代九州人の男性平均(右:44.6mm, 左:45.2mm:阿部, 1955)に近いことから、おそらく熟年に達した男性と推察される。

なお、当人骨の右上胸骨の骨幹中央付近に青磁碗が副葬されていた。

## 2, SK-1345 (男性?・熟年)

長径140cm、短径約55cmの木棺中に見出された遺体で、体幹軸(木棺の長軸方向)にはほぼ一致)を南北方向に向けた北頭位で、身体を西に向ける右側臥屈葬で埋葬されていた。保存状態が不良ながら、人骨検出時の観察によって、頭蓋の顔面部もほぼ西方向に向けていることが観察された。

特に上半身の腐朽が著しいためはっきりとは確認できないが、左上肢とおぼしき骨片の連なりにより、肘を緩く曲げて手を少し前方(西)に置いていたことが窺える。右上肢は不明。股関節は45度に緩く曲げて大腿を右(西)に倒し、膝は強屈して、その下腿骨を棺の南壁に沿うように束ねている。

性別、年齢の判定に供し得る部位がほとんど見当たらないが、歯の破片(上顎大白歯)の咬耗がやや進み、また、わずかに原形を保っていた腓骨下端部がかなり太いことなどから、一応、熟年、男性の

可能性が窺える。しかし、上記のような状況のため、確言はし難い。

なお、当人骨には、頭蓋の右（西）脇あたりに青磁碗、土師皿などが副葬されていた。

以上、立花寺B遺跡の第二次調査で出土した、12～13世紀所属の中世人骨は、残念ながら保存状態が不良で、わずかに性別、年齢、埋葬姿勢などの推定ができただけに留まった。ただ、今回の発掘で明らかになった点の一つとして、その埋葬姿勢について最後に少し注記しておきたい。SK1345に見られた、北頭位、右側臥屈葬という姿勢は、中世から近世期にかけて、かなり全国的な広がりをもせる埋葬形態である。近郊でも例えば筑紫野市、原田近世墓では、200基以上の埋葬がほぼ例外なくこの姿勢で統一されていた。一方、博多市街区やその近郊では、従来からそうした統一された埋葬遺跡は少なく（中橋、1995）、おそらく宗教的な背景の違いによると思われる地域差が明確である。本遺跡でも、北頭位、右側臥屈葬と、北頭位、仰臥（左？）屈葬という、異なった埋葬姿勢の2例が確認され、当地の埋葬習俗におけるこれまでの傾向を踏襲する結果となった。今後とも事例を増やし、そうした埋葬習俗の由来、時代推移、地域差などに注目していきたいと考える。また、今回は検討できなかったが、この時代（12～13世紀）の人骨資料は数少なく、その形態的特徴にも不明点が多い。今後の出土に期待したい。

#### 〔参考文献〕

- 阿部英世（1955）「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究、2  
中橋孝博（1995）「博多遺跡群第62次調査出土の古代・中世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告、48

## 立花寺B遺跡第2次調査における植物遺体分析

株式会社 古環境研究所

## I. 試料について

試料は、立花寺B遺跡第2次調査の井戸、土坑の遺構内から採取された花粉分析用12点、種実同定用21点の計33点である。以下に試料を一覧する。

表1 試料一覧

No.	試料	採取遺構 / 個所	花粉分析	種実同定
1	巖状	SK169		○
2	土	SK317 (1) 暗茶灰色粘質砂土	○	○
3	土	SK317 (5) 黒色土	○	○
4	土	SK317 (6) 暗茶褐色粘質土	○	○
5	土	SK317 (10) 暗灰色～暗青灰色粘質細砂	○	○
6	土	SK317 (11) 黒色土	○	○
7	土	SK317 (15) 青灰色シルト	○	○
8	土	SE341 井筒内下層	○	○
9	土	SK346 (1) 黒色土	○	○
10	土	SK346 (2) 黒色土	○	○
11	土	SK350 土坑底面	○	○
12	土	SK350 土坑底面	○	○
13	種実	SK350		○
14	土	SE512 井筒内上層	○	○
15	土	SE512 井筒内上層	○	○
16	土	SE512 " 上段棒	○	○
17	土	SE512 " 上段棒	○	○
18	土	SE512 " 中段棒	○	○
19	土	SE512 " 下段棒	○	○
20	土	SE516 井筒内下層	○	○
21	炭化米	SP1219		○

## II. 花粉分析

### 1. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え、15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水和し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300-1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974, 1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

### 2. 結果

#### (1) 分類群

同定された分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉24、シダ植物胞子2形態の計60である。これらの学名と和名および粒数を表1・2に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

#### 〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシテ属-アサダ、クリ-シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ニシキギ科、カエデ属、グミ属、ハイノキ属、ツツジ科、ニワトコ属-ガマズミ属、マンサク科、スイカズラ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

#### 〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タテ属、タテ属サナエタ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、セリ科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

#### 〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

## (2) 花粉群集の特徴

## 1) SE341

No.8は樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、特に人里植物を多く含むイネ科、乾燥地を好むヨモギ属の出現率が高い。他に草本花粉では畑作雑草であるアカザ科-ヒユ科、セリ科などが出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、クリーシイ属-マテバシイ属、マツ属複雑管束亜属が伴われる。他に人里植物を多く含むクワ科-イラクサ科の出現率が高い。栽培植物としてはソバ属が出現する。

## 2) SE512

No.14、No.19は花粉粒が多く出現するが、No.15-18は少ない。各試料とも樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、特に人里植物や畑作雑草の性格をもつイネ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科の出現率が高い。セリ科なども出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、クリーシイ属-マテバシイ属、マツ属複雑管束亜属が伴われる。人里植物を多く含むクワ科-イラクサ科の出現率も高い。No.15、19ではイネ属型がやや多い。

## 3) SE516

No.20は花粉粒があまり出現しない。樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高く、イネ科、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属の順に出現率が高く、いずれも人里植物および畑作雑草の性格をもつ。栽培植物としてはソバ属が出現し、アブラナ科にも多くの栽培植物が含まれる。

## 4) SK317

樹木花粉の占める割合は低く、草本花粉とシダ植物胞子の割合が高い。樹木花粉ではクリーシイ属-マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が主に出現する。草本花粉ではイネ科の出現率が高く、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、オオバコ属が伴われる。いずれも人里植物や乾燥した畑作雑草の性格をもつ人為環境に多い草本である。

下部から上部 (No.7-No.2) にかけて変遷を示し、No.7-No.4はシダ植物胞子の出現率が高く上部に向かって減少する。カヤツリグサ科はNo.7、6、5ではやや出現率が高いが上部に向かって減少し、ヨモギ属は上部で増加しNo.4-2ではやや高率になる。クワ科-イラクサ科も上部のNo.5-2は高率に出現する。樹木花粉は上部のNo.3、2では低率である。

## 5) SK346

花粉粒はあまり検出されなかった。No.10では草本花粉の占める割合が極めて高く、人里植物の性格をもつイネ科が優占する。

## 6) SK350

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、特に人里植物や畑作雑草の性格をもつイネ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、オオバコ属の出現率が高い。セリ科なども出現する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、クリーシイ属-マテバシイ属、マツ属複雑管束亜属が主に出現する。

## (3) 寄生虫卵

SE512のNo.14から鞭虫卵、肝吸虫卵、No.15からマンソン裂頭条虫卵が検出された。いずれも1個であり少ない。

表2 立花寺B遺跡第2次調査における花粉分析結果(1)

学名	分類群	和名	SE341		SE 512			SE516	
			No.8	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19
Arboreal pollen		樹木花粉							
<i>Abies</i>		モミ属	3		1				
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1						
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	15	6	5	9	5	4	8
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	4						1
Taxaceae-Cephalotaxaceae		イチイ科-イヌガヤ科							
	-Cupressaceae	-ヒノキ科	2						
<i>Betula</i>		カバノキ属			1				
<i>Corylus</i>		ハシバミ属	1	1					1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1						
<i>Castanea crenata-Castanopsis-Pasania</i>		クリ-シイ属-マテバシイ属	22	4	1		5	5	2
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	4		1				1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	49	8	3		3	3	8
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		ニノキ属-ムクノキ	1						1
Celastraceae		ニシキギ科	1						
<i>Acer</i>		カエデ属	1						
<i>Symplocos</i>		ハインキ属	1						
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	5						
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	80	17		2		7	11
Rosaceae		バラ科	6						4
Leguminosae		マメ科			1			1	
Araliaceae		ウコギ科							1
Nonarboreal pollen		草本花粉							
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	1						
Gramineae		イネ科	105	72	47	30	31	30	157
<i>Oryza type</i>		イネ属型	3		1				14
Cyperaceae		カヤツリグサ科	20	4		2	5	7	5
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	1		1				1
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	1				1		1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	30	20	9	26	28	18	27
Caryophyllaceae		ナデシコ科		1	1	1	1		6
Cruciferae		アブラナ科	3	4	1	4	2	2	1
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属	1						24
Umbelliferae		セリ科	24	7	5	3	4	2	2
<i>Plantago</i>		オオバコ属	1						
Valerianaceae		オミナエシ科	1						
Lactucoideae		タンポポ科	7	1	2	3	4	2	6
Asteroidae		キク科	2	1					2
<i>Xanthium</i>		オナモミ属			1		1	1	2
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	71	59	39	18	19	26	131
Fern spore		シダ植物胞子							
Monolate type spore		単条溝胞子	9	1	1		3	4	2
Trilate type spore		三条溝胞子	6	7	10	5	8	4	8
Arboreal pollen		樹木花粉	111	20	11	9	13	12	20
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	86	17	1	2	0	8	12
Nonarboreal pollen		草本花粉	271	169	107	87	96	88	354
Total pollen		花粉総数	468	206	119	98	109	108	386
Unknown pollen		未同定花粉	3	0	0	0	2	0	0
Fern spore		シダ植物胞子	15	8	11	5	11	8	10
Helminth eggs		寄生虫卵							
<i>Trichuris</i>		鞭虫卵		1					
<i>Clonorchis sinensis</i>		肝吸虫卵		1					
<i>Diphyllobothyum mansoni</i>		マンソン裂頭条虫卵			1				
Total		計	(-)	2	1	(-)	(-)	(-)	(-)







## III. 種実同定

## 1. 方法

土（堆積物）は試料200ccを0.25mmの篩を用いて水洗選別を行って種実遺体を抽出した。同定と計数は肉眼観察および実体顕微鏡で行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

## 2. 結果

## (1) 出現する分類群

樹木1、草本35の計36が同定された。学名、和名および粒数を表4～6に示す。なお、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

## 1) 樹木

・クワ属 *Morus* 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。長さ2.2mm、幅1.6mm。

## 2) 草本

・イネ *Oryza sativa* L. 穎・果実 イネ科

穎は炭化し黒色を呈し、扁平楕円形で下端に枝稜が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。長さ7.0～7.5mm、幅2.7～3.2mm。

果実は炭化し黒色を呈す。長楕円形で、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。長さ3.7～4.1mm、幅2.2～3.0mm。

・オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

果実は炭化し黒色を呈す。楕円形で腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。長さ5.0mm、幅2.9mm、厚さ2.9mm。

・ジュズダマ *Coix lacryma-jobi* L. 果実 イネ科

果実は灰白色で卵球形を呈す。表面には光沢がある。長さ9.0～9.2mm、幅7.3～8.0mm。

・エノコログサ属 *Setaria* 穎 イネ科

穎は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。長さ2.3～2.6mm、幅1.4～1.7mm。

・イネ科 *Gramineae* 穎・果実

穎は灰褐色～茶褐色で紡錘形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。長さ3.0mm、幅1.5mm。

果実は炭化し黒褐色で、円形を呈す。胚の部分は欠落しくぼんでいる。長さ1.1mm、幅0.9mm。

・ウキヤガラ *Scirpus fluviatilis* A. Gray 果実 カヤツリグサ科

黒灰色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は三角形である。長さ3.0mm、幅1.5mm。

・ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は肉凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。長さ1.7～1.8mm、幅1.1～1.2mm。

・カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色～黒色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。長さ1.5～1.6mm、幅0.4mm～0.5mm。

- ・ **カヤツリグサ科** Cyperaceae 果実  
茶褐色で倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。長さ1.5mm、幅0.9mm。
- ・ **イボクサ** *Ancilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科  
黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。長さmm1.8～2.3mm、幅1.5～2.0mm。
- ・ **ツユクサ属** *Commelina* 種子 ツユクサ科  
茶褐色で楕円形を呈し、一端は切形である。表面には「…」字状のへそがあり、切形の端まで達する。一側面にくぼんだ発芽孔がある。長さ2.0mm、幅2.0mm。
- ・ **コナギ** *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科  
淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に8～10本程度の隆起があり、その間には横方向の微細な隆線がある。種皮は薄く透き通る。長さ1.0mm、幅0.4mm。
- ・ **カラムシ属** *Boehmeria* 種子 イラクサ科  
黄褐色を呈し、ゆがんだ卵形で先端が尖る。表面はざらつき、種皮は厚くやや堅い。長さ2.8～3.3mm、幅1.8～1.9mm。
- ・ **タデ属A・B** *Polygonum A・B* 果実 タデ科  
Aは黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。長さ2.1mm、幅1.5mm。  
Bは黒褐色で先端の尖る卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。長さ1.5mm、幅1.1mm。
- ・ **ギシギシ属** *Rumex* 果実 タデ科  
茶褐色で頂端が尖る卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。長さ2.5mm、幅1.5mm。
- ・ **アカザ属** *Chenopodium* 種子 アカザ科  
黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝がはしる。径1.1mm。
- ・ **ヒユ属** *Amaranthus* 種子 ヒユ科  
黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みへそがある。断面は両凸レンズ形である。径1.1mm～1.2mm。
- ・ **ザクロソウ** *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科  
黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一カ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。径0.4mm。
- ・ **ナデシコ科** *Caryophyllaceae* 種子  
黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。径0.6mm。
- ・ **キンボウゲ属** *Ranunculus* 果実 キンボウゲ科  
淡褐色で楕円形を呈す。表面はやや粗く、コルク質である。長さ1.1～1.2mm、幅0.8mm。
- ・ **ササゲ属** *Vigna* 種子 マメ科  
種子は炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。へそは縦に細長い。長さ5.4～6.3mm、幅3.5～4.0mm。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状では識別は困難ある。
- ・ **カタバミ属** *Oxalis* 種子 カタバミ科  
茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。長さ1.4mm、幅0.8mm。

- **スミレ属** *Viola* 種子 スミレ科  
下端の尖る倒卵形を呈す。基部の側面にへそがあり、そこから上端まで筋が走る。長さ1.5mm、幅1.3mm。
- **アブラナ科** *Cruciferae* 種子  
茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に長方形の網目模様がある。長さ1.0mm、幅0.6mm。
- **ヤブシラミ属** *Torilis* 果実 セリ科  
果実は淡褐色で紡錘形を呈す。頂端が尖る。背面は丸く、腹面はくぼんだみぞがある。長さ3.7、幅1.2mm。
- **チドメグサ属** *Hydrocotyle* 果実 セリ科  
淡褐色～黄褐色で一端が切形となる半円形を呈す。緑と中央に縦方向の稜が走る。長さ1.1mm、幅0.6mm。
- **シソ属** *Perilla* 果実 シソ科  
茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。径1.5～1.8mm。
- **イヌコウジュ属** *Mosia* 果実 シソ科  
茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面は網目模様がある。径1.0mm。
- **メハジキ属** *Leonurus* 果実 シソ科  
果実は淡褐色で三角状くさび形を呈し、3稜がある。上端は切形で三角形、下端のへそにむかって細くなる。長さ2.6mm、幅1.5mm。
- **ナス** *Solanum melongera* L. 種子 ナス科  
黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。長さ3.0mm、幅2.5mm。
- **ナス科** *Solanaceae* 種子  
黄褐色で円形を呈す。表面には網目模様がある。長さ1.5mm、幅1.3mm。
- **ゴマ** *Sesamum indicum* L. 種子 ゴマ科  
黒褐色で楕円形を呈し、上端がやや尖る。表面には微細な網目模様がある。長さ2.8mm、幅1.8。
- **メナモミ** *Siegesbeckia pubescens* Makino 果実 キク科  
黒色で倒卵形を呈し、上端は切形で、下端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。長さ3.0mm、幅1.7mm。
- **タカサブロウ** *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科  
黄褐色で長倒卵形を呈し、一端は切形である。中央部にはいは状の突起がある。長さ2.9mm、幅1.4mm。
- **キク科** *Compositae* 果実 キク科  
茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。長さ2.5mm、幅0.6mm。

表4 立花寺B遺跡第2次調査における種実同定結果(1)

分類群			SK317	SK350	SP1219
学名	和名	部位	No. 1	No.13	No.21
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	※192		※96
<i>Coix lacryma-jobi</i> L.	ジュズダマ	果実		3	

※体積比による推定粒数

表5 立花寺B遺跡第2次調査における種実同定結果(2)

学名	分類群	和名	部位	(200cc中)		SF512					SF516	
				SE341	No.8	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20
arbor		樹木										
<i>Morus</i>		クワ属	種子									1
herb		草本										
<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	果実		2	1						
			穎									1
<i>Hordeum vulgare</i> L.		オオムギ	果実				1					
<i>Setaria</i>		エノコログサ属	穎		1	2	1	6	2	1		
Gramineae		イネ科	果実					1				
			穎		16	4	2	4	11	43		
<i>Scirpus fluviatilis</i> A. Gray		ウキヤガラ	果実		1							
<i>Cyperus</i>		カヤツリグサ属	果実	5	19	14	23	29	28	45		
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実		1							
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.		イボクサ	種子		1							
<i>Commelina</i>		ツユクサ属	種子					1				
<i>Boehmeria</i>		カラムシ属	種子	4	93	60	41	74	125	96		
<i>Polygonum A</i>		タデ属A	果実	1								
<i>Polygonum B</i>		タデ属B	果実	1	1		1		1	2		
<i>Rumex</i>		ギシギシ属	果実	1								
<i>Chenopodium</i>		アカザ属	種子		9	17	12	5	13	11		
<i>Amaranthus</i>		ヒユ属	種子	1	5		3	1		3		
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.		ザクロソウ	種子									1
Caryophyllaceae		ナデシコ科	種子	22	68	37	60	47	76	92		
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属	果実			1						
<i>Oxalis</i>		カタバミ属	種子	2	5	2	2	3	5	7		
<i>Viola</i>		スマレ属	種子	1	1	1	1		1	3		
Cruciferae		アブラナ科	種子	4	3	1	2	3	1	2		
<i>Hydrocotyle</i>		チドメグサ属	果実									
<i>Torilis</i>		ヤブジラミ属	果実		6	3		2	5			
<i>Perilla</i>		シソ属	果実		3							
<i>Mosla</i>		イヌコウジュ属	果実	1		3	1		5	2		
<i>Leonurus</i>		メハジキ属	果実				1		2	3		
<i>Solanum melongena</i> L.		ナス	種子							2		
<i>Siegesbeckia pubescens</i> Makino		メナモミ	果実		1		1			1		
<i>Eclipta prostrata</i> L.		タカサブロウ	果実			1			1			
Compositae		キク科	果実									1
Total		合計		43	235	150	150	176	276	315	2	
	Unknown	不明		1	4	1		4	2			





表7 立花寺B遺跡第2次調査におけるイネ果実（炭化米）の計測値

遺構	試料	長さ(mm)	幅(mm)	粒長/粒幅	粒長×粒幅
SK317	No.1	5.5	2.1	2.6	11.6
		5.6	3.0	1.9	16.8
		5.1	2.6	2.0	13.3
		5.6	2.6	2.2	14.6
		5.6	2.5	2.2	14.0
		5.8	2.6	2.2	15.1
SK346	No.9	4.5	2.0	2.3	9.0
		4.0	2.0	2.0	8.0
	No.10	4.8	2.4	2.0	11.5
		6.3	2.7	2.3	17.0

## (2) 種実遺体群の特徴

## 1) SK317、350、SP1219

- SK317: 炭化したイネの果実塊である。
- SK350: ジュズグマであり、水路ぎわなどに生育する。
- SP1219: 炭化したイネの果実塊である。

## 2) 水洗選別試料

- SE341: ナデシコ科を主にかわずかに出現し、カラムシ属、カタバミ属など乾燥地や人里植物が多い。
- SE512: カラムシ属、ナデシコ科、イネ科、アカザ属が多く出現する。栽培植物はNo.14、15からイネ（炭化米）、19からナスが検出された。
- SE516: イネ（穎）、ザクロソウがわずかに出現した。
- SK317: No.5からアブラナ科が出現するが、他は極めてすくないか検出されなかった。
- SK346: イネ（炭化、穎）がやや多く検出された。他に栽培植物としてゴマが検出された。
- SK350: ナデシコ科が多く、アブラナ科、タカサブロウ、カヤツリグサ属、カラムシ属、アカザ属、ヒユ属が比較的多く出現する。いずれも乾燥地を好む草本で人里や畑地に多い草本である。栽培植物ではイネ（炭化米、穎）、ササゲ属が出現する。

## IV. 考 察

## 1. 推定される植生、環境

各試料の花粉群集はイネ科が高率で、出現率の多少の差異はあるがヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、セリ科、クワ科-イラクサ科、アブラナ科、オオバコ属から構成される。いずれの草本も排水のよい人里や畑の環境を好む種類である。種実においても、出現数の差異はあるがナデシコ科、カラムシ属、カタバミ属、アカザ属、アブラナ科、タカサブロウが出現し、いずれも人里の乾燥地や畑の環境に生育する草本ばかりである。このことから、立花寺B遺跡の分析対象となった井戸や土坑の周囲にはヨモギ属、アカザ属(アカザ科-ヒユ科)、セリ科、カラムシ属(クワ科-イラクサ科)、ナデシコ科、アブラナ科、オオバコ属、タカサブロウという人里植物ないし畑作雑草の性格をもつ草本が繁茂していたと推定される。周囲には樹木は少なく、カシ類(コナラ属アカガシ亜属)、クリ-シイ属-マテバシイ属、ニヨウマツ類(マツ属複雑管束亜属)が孤立木の状態で生育するかやや遠方で森林として分布していたと推定される。

SK317では花粉群集が層位的な変遷を示し、周囲の植生の変化が認められる。下部ではシダ植物とカヤツリグサ科の草本が多くカシ類やクリ-シイ属-マテバシイ属の樹木もやや多い。上部ではクワ科-イラクサ科とヨモギ属がより多くなる。よって下部から上部に向かって森林が減少し、相対的に乾燥化したと推定される。

## 2. 農耕と栽培植物

以上から立花寺B遺跡および周囲は、人里植物および畑作雑草の繁茂する環境が広がったと考えられる。栽培植物としては、SE341、516からソバ属花粉、SE512、516、517、SK346、350からイネの果実(炭化米、穎)が検出された。アブラナ科も多くの栽培植物を含み栽培植物である可能性が高い。また、SE512からナス、SK346からゴマ、SK350からササゲ属がそれぞれ検出された。よって、立花寺B遺跡の周辺は水田に加え、ソバ(ソバ属)、ナス、ゴマ、マメ類(ササゲ属)、アブラナ科植物の畑作が行われていたと推定される。

炭化米はコメの形態を調べるために計測可能なものの大きさを計った。佐藤(1988)に照らし合わせると、粒形(粒長/粒幅)が2.0より大きなものが多く、粒大(粒長×粒幅)が12.0から16.0が多く、比較的長粒で小粒の形態のコメが多いといえる。

## 3. 便所遺構の可能性

寄生虫卵がSE512から少量検出され、また各試料から栽培植物の花粉や種実が検出されているが、花粉群集と種実群集の組成は特殊なものではない。よって、各井戸と土坑の堆積に多量に糞便の堆積が含まれているとは考えられず、便所遺構である蓋然性はないと考えられる。

## 【参考文献】

- 中村純(1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.  
 金原正明(1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.  
 島倉巴三郎(1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵品誌第5集, 60p.  
 中村純(1980) 日本産花粉の標本, 大阪自然史博物館収蔵品誌第13集, 91p.  
 中村純(1974) イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.  
 中村純(1977) 雑作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.  
 金原正明・金原正子(1992) 花粉分析および寄生虫, 藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.  
 笠原安夫(1985) 日本雑草図説, 農学, 494p.  
 松岡暁子(1992) 和服・森本遺跡(4次)出土炭化米粒および炭化茶粉について, 橿原考古学研究所紀要考古学論叢第16号, 奈良国立橿原考古学研究所, p.19-24.  
 佐藤敏也(1988) 野生のコメ, 野生文化の研究, 第2巻, 雄山閣出版, p.97-111.



1 スギ



2 クリーシイ属-マナバシイ属



3 コナラ属アカガシ亜属



4 クワ科-イラクサ科



5 オモダカ属



6 イネ属型



7 カヤツリグサ科



8 ソバ属



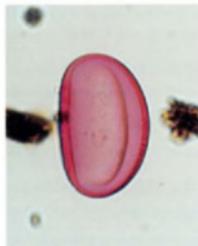
9 アカザ科-ヒユ科



10 アブラナ科



11 セリ科



12 シダ植物単条溝胞子



13 糠虫卵



14 マンソン裂頭条虫卵



15 異形吸虫卵

45 μm



立花寺B遺跡第2次調査出土の種実 I



## 立花寺 B 遺跡

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書

<第523集>

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1

平成9年3月31日

☎092(711)4667

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

福岡市東区松田三丁目9-32

# RYUGEJI-B SITES

Results of the 1st, 2nd and 3rd excavations  
of the Ryugeji-B sites  
in Fukuoka, Japan

Editor	Tadashi Takimoto
Contributors	Hayao Nishinakagawa
	Humihiko Yoshino
	Takahiro Nakahashi
	Manabu Yoshitake
	Tadashi Takimoto

March 1997

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY